



平成29年度 鳴門教育大学
グローバル教員養成プログラム報告書



鳴門教育大学

目 次

大韓民国

生徒指導の国際比較演習

〈光州教育大学校〉

実施報告書	金 貞均, 池田 誠喜, 森本 紗矢	3
参加報告書	田中 保子	13
参加報告書	田中由賀里	19
参加報告書	中野美砂子	25
参加報告書	西 由香里	29

社会科教育プログラム ～社会科における主権者教育の国際比較～

〈光州教育大学校〉

実施報告書	井上 奈穂	35
参加報告書	長瀬 多絵	41
参加報告書	石畠みさき	47
参加報告書	古屋 寛樹	51
参加報告書	星出 諒太	55

タイ王国

算数科・数学科教育プログラム

～グローバルな視野を持つ算数科・数学科担当教員の養成を目的とする海外研修～

〈コンケン大学〉

実施報告書	秋田 美代, 早田 透	63
参加報告書	大島 弘子	73
参加報告書	茅野 友郎	81
参加報告書	谷口 誠崇	87
参加報告書	住田 幸平	93
参加報告書	三木 崇正	97

海外観察・交流実習（気づく実習）

〈コンケン大学〉

実施報告書	佐藤 長武, 若井ゆかり, 日野 正之	103
参加報告書	濱田 あや	109
参加報告書	小谷 真由	113
参加報告書	三笠 由季	119
参加報告書	後 博子	123
参加報告書	戸石 遥香	127

大韓民国

平成 29 年度 鳴門教育大学
グローバル教員養成プログラム 実施報告書

生徒指導の国際比較演習

出張者所属・氏名

教員（2名）：	生活・健康系コース（家庭）	金 貞均
	教職実践力高度化コース	池田 誠喜
院生（4名）：	教職実践力高度化コース	田中 保子（M1）
	教職実践力高度化コース	田中由賀里（M1）
	教職実践力高度化コース	中野美砂子（M1）
	教職実践力高度化コース	西 由香里（M1）
職員（1名）：	教務企画課学部教務係	森本 紗矢
用務地	：	大韓民国
用務先	：	光州教育大学校
出張期間	：	平成 29 年 9 月 24 日（日）～ 9 月 28 日（木）

1. はじめに（目的と活動）

グローバル教員養成プログラム（光州教育大学校【韓国】・「生徒指導の国際比較演習」）は、光州教育大学校への短期留学により、韓国の教育事情を知ること、韓国の学校教育を実際に見ること、韓国の現職院生とディスカッションを行うこと等を通じて、日本の学校教育における生徒指導の在り方を相対化して捉えなおし、グローバルな視点に立った生徒指導を展開する力を養うことを目的としている。

本プログラムでは、韓国と日本の学校教育を比較検討するためには、韓国の教育事情を調査するだけでは不十分であり、その背景となっている韓国の歴史・文化、生活、気質、経済などについての理解を深める必要があるとして、学校教育での生徒指導のみならず、教育施設文化・歴史施設等の見学も含めた人間理解を深めることも重要な取り組みとして捉えている。具体的な活動を表1に示す。

表1 グローバル教員養成プログラム「生徒指導の国際比較演習」の活動

- ①学校教育，研修を含む教師教育，大学における教員養成や現場のフィールド調査
- ②韓国の文化，人々，慣習に触れ，学校教育に対するニーズ及び教員養成にかかわるニーズの調査
- ③日韓の学生（現職教員大学院生）による生徒指導にかかわるテーマについてのディスカッション通した比較研究

2. 光州教育大学校でのプログラム実施内容

(1) プログラムの参加者と参加形態

光州教育大学校（韓国）におけるグローバル教員養成プログラムは、専門職学位課程の専門科目授業「生徒指導の国際比較演習」として実施された。参加者は授業科目を履修する大学院生を基本としている。ただし、本プログラムの目的達成を目指してプログラムの参加を希望する学生であれば、授業を履修することができない学生（例えば修士課程所属の大学院生）でも参加することは可能である。その際には、渡航前に実施される授業に参加することが求められる（授業への参加は聴講などの形態で可能）。

今年度、本プログラム参加者は、高度学校教育実践専攻に所属する大学院生（現職の派遣教員4名）であった。

(2) 渡航前の授業および準備

（授業）

①オリエンテーション 4月13日（木）

授業科目の目的、内容、費用についての説明

授業の目的・内容・プログラムの趣旨・費用等の条件について説明を受けた上で、履修および

プログラム参加の判断をする。履修者以外でも国際交流係へプログラムの申込をすることにより、授業聴講などの形で参加が可能であったが、今回は履修者以外の参加はなかった。オリエンテーションでの説明から履修登録の締め切りは1週間ほどで、短期間ではあるが費用や授業の見通しを立てながらプログラムへの参加について検討する期間を設けた。渡航費用については概算経費（実施時の人数や宿泊施設等を考慮したもの）を提示した。オリエンテーションには10数名の参加者があった。

②グローバルな視点を持った教師（講義：香西教授） 5月18日（木）1限

「今、求められるグローバルな視点を持つ教師の必要性について」をテーマに、グローバルな視点とはどのようなものか。なぜ、今、必要なのか。日本の学校教育にどのように活かすのか。これまでの鳴門教育大学の国際交流事業を紹介しながら、具体的な事例を紹介しながら講義が行われた。生徒指導を機能させる上でグローバルな視点が役立つことに気づいたという感想が聞かれた。

授業後に確定した旅程・費用等の詳細について確認し、渡航に関わる準備についての確認を行った。

③韓国の文化、教育事情の理解（講義：金教授） 6月29日（木）1限

「韓国の文化、教育事情について」をテーマに、韓国の歴史・文化、生活、気質、経済などについて詳しく紹介。また、教育事情については、学校教育、教育政策の紹介に留まらず、日本の学校教育との異同について比較検討をさせながら、比較研究についての意義や方法についての知見を得ることができた。本講義から、訪韓の際には、単に学校教育に関することのみならず、幅広い韓国の文化などを理解することにより、さらなる学びになることが示唆された。

④生徒指導の比較研究についての検討（演習：阿形教授・池田准教授） 7月20日（木）1限

韓国との比較による日本の生徒指導の相対化を図ることを目的で、訪問時の共同研究ワークショップとして日韓の大学院生同士のディスカッションが設定され、取り上げるテーマやディスカッションの進め方についての確認を行なった。

テーマは、光州教育大学校との検討により「Cyber Bullying」とし、日韓双方で自国の問題についてそれぞれ2回のプレゼンテーションを行い、それについてディスカッションを行うという形で進めることとした。日本側からの提示は、インターネットがいじめに悪用されているだけでなく、ネット犯罪などのトラブルを引く起こす要因となって社会問題化していること、学齢期の子供たちの望ましい発達に著しい悪影響を及ぼすことを鑑み、総務省がインターネットトラブルとして被害・加害の防止のための啓発を図っている内容から、学齢期の子供たちに関係の深い内容を取り上げて紹介し、ディスカッションを行うこととした。

(3) 訪問日程

グローバル教員養成プログラム（光州教育大学校【韓国】・生徒指導）事業に係る大韓民国の光州教育大学校訪問の日程は、表1の通りである。

表1 調査研究日程

日順	月日(曜日)	業務地	業務内容
1	9月24日(日)	関空→ソウル ソウル→光州	移動 アシア航空 0Z1135 (関空 11:10→金浦 13:00) 移動 アシア航空 0Z8707 (金浦 16:00→光州 17:00) 移動 車 (光州空港→光州教育大学校ゲストハウス泊)
2	9月25日(月)	光州	9:30-10:00 総長代理・役職教員との公式会議 10:30-11:30 附属小学校施設見学及び授業参観 13:30-15:00 光州教育大キャンパス見学及び授業見学 15:30-17:30 共同研究ワークショップ 18:00-20:00 光州教育大学校関係者による歓迎会
3	9月26日(火)	全州	10:30-17:00 全州韓屋村・慶基殿 文化施設見学 17:30-19:30 附属小学校教員との交流会
4	9月27日(水)	光州→ソウル	移動 アシア航空 0Z8704 (光州 11:00 → 金浦 12:00) 移動 バス (金浦 12:20 → ソウル・東大門 13:30) ソウル地域文化施設見学 ホテル (東大門)
5	9月28日(木)	ソウル → 関空	移動 バス (ホテル→仁川) 移動 アシア航空 0Z114 (仁川発 14:30→関空 16:30) 移動 バス (関空 17:20→鳴門 19:40)

(4) 光州教育大学校 プログラム活動内容

① 附属小学校施設見学及び授業参観 (9月25日)

施設見学は授業参観の中に組み込まれており、施設活用の実際を授業参観を通して見ることができた。また、子どもたちの集会の最中に施設を見学する場を設けていただくなど、施設自体の細かい箇所を見ることができたことに加え、説明や質問が制限なくできるよう配慮されていた。施設見学と参観の両方について時間を無駄にしないよう効率よく且つ効果的に設定されていた。

附属小学校の施設はたいへん充実しており、日本の小学校では滅多に見られないような工夫がされていた。例えば、ランチルーム入り口で、子供たちが持ち込むゴミやホコリが入らないようにするためのエアダスターや学年ごとの職員が休憩できる部屋、放課後のケアルームなどである。あったら助かるという施設設備が供えてあり、日本の学校では見られない配慮や考えが反映されていて大変参考になった。

また、学校施設見学と授業参観途中のブレイクタイムの中で学校長の話が聴けるように設定してあった。短い時間であったが、フォーマルなレクチャーでは味わえないインタラクティブなコ

コミュニケーションの中で、附属小学校の教育理念、韓国の学校教育が語られた。参加者も施設見学及び授業参観で感じた疑問のみならず、韓国の学校教育と文化について詳しく聴くことができた。

授業参観として、特に英語・社会・生活の3教科の授業を参観した。英語・社会は我々の訪問のために日本語で作成したの指導計画が配布され、本プログラム参加者が授業内容を理解するのに非常に役に立った。英語については、子供たちの英語力や授業の進め方に受講者も大変感心していた様子であった。附属小学校教師のICTのリテラシーが高く、授業の流れを断つことなく効果的に用いられていたことも参考になったようである。

資料1 光州教育大学校 附属小学校 授業授業過程案

2017		6年生の英語科学びの授業過程案	教師 チョンヒョンジ
日時	2017年9月25日 月曜日 1時限目(09:00~09:40)	場所	6-1 教室
単元名	10. What Do You Think?		
テーマ	・同意するかどうかを聞き、答えを聞いて理解する(1/6)		
達成基準	・同意するかどうか聞き、答えを英語で聞いて答える		
核心・教科の能力	・意思疎通の能力、知識情報処理能力		
目標	・同意するかどうかを表す語彙や文章を知ることができる。 ・同意するかどうかを聞き、答えを聞いて理解することができる。 ・対話文や他人の言葉を傾聴する態度を持つ。		
授業の設計	・様々なテーマに対し、互いの考え方を示し、それについて同意するかどうかを示す表現ができるようにする。今回は、世界の伝統遊びに対して考えを示す対話文が使われた。		
用意する教材	・CD-ROM、ノート、外国の伝統遊びの写真		
予習課題			
過程	学び活動(○)		
学ぶ(5')	○学ば活動発表する(Report Talk) -What did you do yesterday? 文型を利用してクラスの友達と週末にしたことに対してお互い聞く ○テーマ確認する -同意するかどうかを聞き、答えを聞いて理解する		
活動(32')	○学びの順序と方法を調べる -Look and Listen -Listen and Do -Listen and Play ○活動1<Look and Listen> -教科書の絵や絵資料報告、外国の伝統遊びについての話をする -対話文を聞いて内容把握する -友達と一緒に聞いた文を一緒に話す -字幕とともに、対話文をもう一回確認する ○活動2<Listen and Do> -対話文を聞いて相手の意見に同意する内容はO、同意しない内容にはX表示する。 -教師とともに答えを確認する。 ○活動3<Listen and Play> -教科書に提示された5つの活動に対して、教師が'It looks~, What do you think?'と聞いたら、絵ではここに書いて降って該当する絵を見ながら'I think so, I don't think so.'で答える。		
整理(3')	○学びの分ち合い(ジョブ・シェアリング)と振り返りする 今日たくさん使用した英語表現を使って、学習活動に熱心に参加したのかを省察しながらノートを使う。 ○予告 -予習課題及び次回案内する		
達成基準		評価基準	評価方法及び評価
同意するかどうかを聞き、答えを聞いて理解することができる。(能力:コミュニケーション能力)		高い	同意するかどうかを聞き、答えをよく理解して反応する。
		普通	同意するかどうかを聞き、答えをある程度理解して反応する。
		努力	同意するかどうかを聞き、答えを理解するのに困難があった。
			学び活動/観察評価

6年生社会科学習の授業過程案	
対象	6-2 単元名 1-(2) 国家の仕事をもめている機関
テーマ	'憲法に反する法律も守らなければならない。'という論題に全体討論する
準備物や資料	教師 ポストイット
予習課題	学生 賛否を定めた立場で、根拠を準備してくる
達成基準	意思疎通の能力、知識情報処理の能力、共同体の能力
能力	国会、行政部、裁判所の構造や機能を把握して、各機関の相互関係を三権分立の原則と関連づけて説明することができる。
テーマの概要及び意図	(立法府と司法府とは何か?)で学生たちの思考を深く考えることができるように構成した。立法と司法にわたっている論題に'憲法に反した法律も守らなければならない。'という論題にクラス全体討論をしようとする。 1. 2. 3組が一つのチーム、4. 5. 6組がチームとして二回戦まで進行する。(II II組の配列で進行、6人6人一列ずつ座って賛成したチーム、6人6人一列ずつ座って反対したチーム)先に賛成6人最初の行チームが最初討論最初の列の後ろに座っている友達の前座って二回戦進行して多くの学生が参加できるように授業をデザインした。 *後ろページにある絵を参考
評価の観点	授業の流れ
◎WSQ対話	資料&注意点
-論題の案内および討論順確認	反省&省察
<テーマ> '憲法に反する法律も守らなければならない。'という論題にクラス全体討論する	*ただし憲法は国民の基本権を保障する最高の法であることを案内、過去、推定憲法に対する憲法の内容には言及しないようにする。'憲法も法だ。'というモチーフでこの討論論題を設定した。何が憲法か?用語の定義問題で国民の基本権が言及された憲法に反することが憲法だと用語の定義をするため。(過去、憲法また、憲法に利用される可能性があることを語るためではない)
<手順> -第一 -第二 -最後の主張	
意思疎通の能力、知識情報処理の能力、共同体の能力	◎討論順番
	賛成 反対
1	第1主張 第2主張
	自由討論
2	第1主張 第2主張
	自由討論
	準備時間(作戦タイム)
	最後の主張 最後の主張
-時間は賛成1、反対1の立論は時間関係なしで進む。 (2分弱である。)	
-賛成2、反対2、賛否をめぐり最後の主張	
-作戦タイムの時間は4分とする。	
-全員文彦1、2はそれぞれ8分ずつ行う。	



<II組の配列>

②光州教育大キャンパス見学

キャンパス内に、講堂、多文化教育体験館、歴史博物館などの文化施設を備えており、それぞれの施設の管理者により詳しく説明をしていただきながら見学することができた。地域の文化施設としても価値のある施設であり、ソフト・ハード面においてコミュニティに解放された施設運営がなされていた。

授業参観をキャンパスツアーに組み入れていただき、「コンピューター教育」、「デザイン・リサーチ」の学部生対象の授業を見学した(授業プランを下記に表示)。学生の真剣な姿勢とイ

インタラクティブな授業スタイルがとても参考になるものであった（資料2）。「コンピューター教育」の授業は講義形式での授業であったが、発問-回答、アクティビティなどアクティブラーニングが実施されており、学生も主体的に取り組んでいた。

資料2 光州教育大学校 授業プラン

2017, 2 nd Semester Class Plan									
Subject	Name of the class	Research of Design					Credit (hours)	Section	
		Professor	Hours	Class room				Major	Intensive
		An, JaeYoung	4		215		3(4)	a1313814@gnu.ac.kr	
Keyword related elementary education ▶ Improving formative ability of design ▶ Studying for basic knowledge about design in elementary school.									
Guide for the class Purpose of the class • Teach design education, theory, and practical skills related to elementary school education. • Improve formative ability of design.									
Guide for the class	Type of the lecture	Focus on Theory (), Focus on Experiment (), Focus on Practical Skill (), Team Teaching (), English Lecture (), Online Studying ()							
		Class character							
		Teacher Professionalism				The Talent of Preservice Elementary Teachers			
		Understanding Curriculum	Improving the ability of teaching about subject learning	Improving the ability of teaching about basic learning	Making and Using the material	Development of character and aptitude for teaching	Improvement about creativity/convergence ability	Communication (Language) /Developing sophistication	
		○	○		○		○		
Theme of the class 1) Orientation & Current state and intentions about design education in elementary schools 2) Design for handicraft (Pottery for decoration & pottery for function) and basic pottery 3) Group making - C.I.P(Continuous Improvement Process) (Basic & applied System) 4) Design for Visual information 5) Group making - Design for making beautiful environment indoors or outdoors.									

GwangJu National University of Education, The class for undergraduate students

2017, 2 nd Semester Class Plan									
Subject	Name of the class	Computer Education					Credit (hours)	Section	
		Professor	Hours	Class room				Major	Intensive
		Kim, JeongRang	1		An Audio-Visual classroom 2		1(1)	j.kim@gnu.ac.kr	
Keyword related elementary education ▶ Computer education ▶ Software education									
Guide for the class Purpose of the class • Students can learn about using an elementary school software education system, including curriculum, contents, teaching plans, practical teaching, research, and evaluation, using systemic information and practical exam. • The class will help students in both theory and practice using elementary school software education.									
Guide for the class	Type of the lecture	Focus on Theory (), Focus on Experiment (), Focus on Practical Skill (), Team Teaching (), English Lecture (), Online Studying ()							
		Class character							
		Teacher Professionalism				The Talent of Preservice Elementary Teachers			
		Understanding Curriculum	Improving the ability of teaching about subject learning	Improving the ability of teaching about basic learning	Making and Using the material	Development of character and aptitude for teaching	Improvement about creativity/convergence ability	Communication (Language) /Developing sophistication	
			○				○		
Theme of the class 1) Orientation & Software book concept and type 2) Software education evaluation and analysis 3) Problem-solving & Unplugged computing 4) Algorithms 5) Programming language 6) Fusion Science and software 7) Information ethics and copyright									

GwangJu National University of Education, The class for undergraduate students

③共同研究ワークショップ

授業科目である「生徒指導の国際比較演習」のフィールド研究の一つとして、本プログラムの共同研究ワークショップに参加した。参加者は、鳴門教育大学側がプログラム受講者教職実践力高度化コース4名（現職教員）、引率大学教員2名、日本側通訳者1名（現地韓国人）、光州教育大学校側は、現職教員大学院生4名、大学教員4名、韓国側通訳者1名（日本への留学生）、コーディネーター1名であった。テーマは、「ネットトラブル（いじめ問題を含む・サイバー暴力）の現状と課題及び対策について」であった。進め方として、2つのサブテーマが設定され、それぞれ日韓双方のプレゼンテーション後にディスカッションが行われた。第一のテーマは、「現状と課題」第二のテーマは「対策」である。それぞれ、PCソフトを用いてスクリーンに資料を投影してプレゼンテーションを行った。双方とも事前の準備において資料を通訳者に通知していたため、非常にスムーズな発表とディスカッションが行われた（資料2）。内容については省略するが、ディスカッションの時間が足りなくなり、参加者からはもっと時間が多くても良かったという意見が出ていた。交流に関しては概ね満足に行くものになったと考えられる。参加者が日韓とも現職教員で大学院への派遣研修者であったことや教職経験年数もほとんど同じで、教職キャリアが同じような状況であることが推察され、生徒指導にかかわる状況理解やお互いの気持ちを

共感できる場面も多く見られた。



資料2 共同研究ワークショップの様子

④光州教育大学校関係者による歓迎会

光州教育大学校総長代理主催の歓迎会を開催していただき、本プログラム受講者全員が参加した。光州教育大学校側は総長代理をはじめ役職教員とコーディネーター職員に加えて共同研究ワークショップに参加した韓国の現職教員の方々も参加された。共同ワークショップの後の交流ということで、ワークショップについての内容についてさらに深める機会となったとともに、参加者個々の教育に関する関心事やそれぞれの文化などについて話し合うことができた。学生交流という意味では非常に貴重な会であった。

⑤全州韓屋村・慶基殿 文化施設見学（9月26日）

光州教育大学校のコーディネートで全州市の韓屋村の文化施設見学を行った。慶基殿を中心に全州は朝鮮王朝の発祥地であり、韓国の成り立ちと日本との関係について理解を深めるにはとても適した場所である。渡航前の金教授の韓国の文化に係る講義を踏まえて実際に訪れて見ることができ、韓屋構造やその歴史から現在の韓国の理解が深まったようである。訪問前の講義により事前の知識を得ていることにより、本プログラムの実施のための調査訪問で訪問時の興味関心の高まりと学びの深まりに違いが出ているように感じられた。

⑥附属小学校教員との交流会

夕方から、会食しながら学校長主催で附属小学校教員との交流会を開催していただいた。この場では、附属小学校での見学の感想や質問、韓国の教育事情、教育施策などについて聞かせていただくとともに、日本の教育事情についても話をさせていただき、活発な交流を行うことができた。訪韓してのここまでのフィールドワーク調査で得た情報を、さらに整理することに役立つ機会となった。

3. 光州教育大学校 訪問の成果

① いじめ問題をはじめとする生徒指導上の課題に関する情報交換・協議を行うことによる、日韓の生徒指導についての比較の成果

第一の成果として、受講者のポジティブな情動体験と達成感が得られたことである。ほとんどの受講者が外国人との本格的なディスカッションは初めてであり、通訳を介してではあるが外国の教師と教育現場について直接意見を交流するという体験自体がとても貴重な機会となったようである。

第二として、ディスカッションにより日韓双方のインターネットによるトラブル状況の異同が確認されたことである。生徒指導に関わる比較研究として、お互いの国の実情についての様子や意見を具体的に聴き合い、相手側の状況について質問をすることで理解が深まった。一例を挙げると、韓国では、SNS によるいじめ相談が教師により行われていることが示されたことなどは、自治体による「SNS いじめ相談」が試行的に開始され、文部科学省がワーキンググループで中間報告を行なっている状況にある日本においては、新しい知見として大変興味深いものが示された。

第三として、日韓双方の異同を認識し比較することにより、生徒指導に関わる自身の教育観の相対化が促されることにより、共通の事象や心理的背景などを実感し、教育の普遍性について改めて認識を深める機会となった。

② 光州教育大学校への短期留学を通じて、学校教育に対する考えを相対化して捉えなおし、グローバルな視点に立った生徒指導を展開する力の獲得。

本プログラムの目的である、韓国の学校教育の様子を実際に見ることにより、これまでの自身の学校教育に対する考えを相対化させ、日本の学校教育について改めて考える機会となった。単に、教育活動の調査やディスカッションによるものだけではなく、韓国の文化、教育観についてじっくり語り合う機会があったことが、実際に行われている教育活動の意味や教師の教育観など、共通する部分が理解され、グローバルな教師の視点の獲得に役立つことになった。

4. 課題

グローバル教員養成プログラム（光州教育大学校【韓国】・「生徒指導の国際比較演習」）は、事前に3回の実施前調査訪問と3回の学生受け入れを2年間かけて準備してきた。今回のプログラムの実施にあたっては、これまでの準備により、通訳の確保や連絡調整、渡航準備に係る担当組織による動きが効果的に行われた。サポートいただいた関係者の方々にはこの場を借りて御礼を申し上げたい。

その中でも、課題として下記の点を挙げる。

・プログラム参加費用について

本プログラムの参加者はオリエンテーションに参加した大学院生の約 1/4 程度の4名であった。興味があって参加したかったが、渡航費用が高く断念した院生が多かった。渡航費用に係る補助があれば参加者の増加は見込めるが、反面、通訳の増員や宿泊施設の確保、交通などの費用が高

くなることが予想される。プログラムの継続性と実効性を考えると、しっかりした見通しを持たなければならないと感じる。

また、旅程を含めたプログラムの内容について、さらに優れたものになるよう省察し、次回の実施のための改善を図りたい。

平成 29 年度 鳴門教育大学
グローバル教員養成プログラム 参加報告書

生徒指導の国際比較演習

鳴門教育大学大学院 学校教育研究科
高度学校教育実践専攻 教職実践力高度化コース
学籍番号 17843158
氏 名 田中 保子

人との出会いに心あたたまる韓国訪問

1 9月24日（日） 出発から光州滞在1日目

9月24日（日）の早朝より、10年ぶりに復活した淡路島洲本港から出る淡路関空ラインのフェリーを利用し、関西国際空港へと渡った。初めて利用するフェリーの乗船場では、係の方が親切に切符の買い方や待機場所などを案内してくださった。また、それなりの大きさのスーツケースも運んでくださり、人のご好意にありがたさを感じる研修旅行の始まりとなった。関空では先に到着された皆さんがベンチで歓談されていた。総勢7名での移動に、光州という初めての訪問地に対しての不安も和らぎ心強く感じた。



昼過ぎに金浦空港に到着、その後、国内線にて光州空港に移動。光州教育大学職員の方が空港まで迎えに来てくださっていた。特に、私たちを4日間アテンドしてくれた徐さんは明るく積極的でとても素敵な方で、英語を流暢に話し私たちにいろいろと説明してくださった。

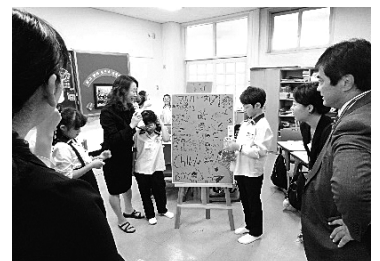


宿泊先の大学のゲストハウスに立ち寄り、その夜は近くのbuffetで韓国料理をいただいた。リーズナブルな値段でいろいろなものを食し大満足。宿舎へ帰着後も、徐さんは私たちに近くのスーパーやコンビニを案内してくれ、大学周辺の町の様子に触れることができた。

2 9月25日（月） 光州滞在2日目

光州訪問、初めての朝食は大学の食堂で頂くことにした。韓国語表記のみの自販機を前に食券の買い方も分からず戸惑っていると、職員の女性が身振り手振りで教えてくださった。キムチや海苔といった韓国ならではのメニューを約300円で頂けるとはありがたい。途中、責任者のような方が、鳴門教育大学から来ている私たちに気付き、特別にお茶をだしてくださった。

この日の午前中は、光州教育大学役員の方々への表敬訪問や附属小学校の授業・施設見学を行った。どの方もととてもにこやかに私たちを受け入れてくださり、光州という土地への親近感がわいた。附属小学校では英語、社会、生活の3つの授業を見学、その中でも小学6年の英語の授業での英語の使用率の高さに驚いた。





授業見学後の休憩時間に、中庭で韓国餅やサツマイモなどをふるまっていた。中庭の畑に植えてある白菜が話題に上り、それらは全生徒が一株ずつ育て、社会福祉施設で炊き出しをする奉仕に繋げるのだと校長先生から伺った。また、数学の時間には図形の学習を活かしてカバンなどに図柄を施し、バングラディッシュに送るなどの取り組みをしているそう

である。子どもたち一人ひとりの活動が誰かの役に立つという実感を与える素晴らしい取り組みに感動した。

午後は、多文化教育体験館や光州教育大学教育博物館などの施設見学やネットトラブルを中心としたいじめ問題についての意見交流会を行った。意見交流会では、韓国側から予防策を多く紹介していただき、有意義な時間となった。

※韓国の英語教育について

まずはウォーミングアップの Report Talk、週末の出来事について”What did you do yesterday?”を用いての友だちとの問答。その後、教員がその内容について数名とやり取り、全てが英語で行われている。

教科書の内容に関しても、ICT機器を利用して音声から入り、文字へとつなげていくという流れである。キャッチした英語やイラスト、ムービーなどを参考に、友だちと協力しながら理解を進めていく。まとめとして学んだ英文をノートに書き留めるという大まかな流れである。



教員もほぼ英語で授業を進めており、子どもたちも基本的なクラスルームイングリッシュに慣れている。インプット、アウトプットを繰り返すことで、英語の授業での英語の使用が当たり前になっているといった感じであった。韓国の家庭教育自体も、英語の習得に積極的で小さい頃から英語に触れさせようとする傾向が日本以上に強いという。国土や人口が少ないので、国外に目を向ける姿勢も強いということで、英語習得に対する興味関心が高いようである。日本の英語教育においても、今まで以上に子どもたちのモチベーションを上げることができるよう創意工夫をしていかななくてはならないと強く感じた。



※いじめ問題についての意見交流会

この交流会は徐さんの進行により、お互いの国の言葉を少しずつ混ぜながらの自己紹介で和やかな雰囲気の中スタートした。こちらの会場にもフルーツカップが各自に用意されており、大切に扱っていただいていることに改めてありがたく感じた。



まずは、両国のネットトラブルの現状報告を行った。ネットによる社会問題の状況は両国とも似た点が多く、韓国ではカカオトーク、日本ではラインなどの無料の SNS を中心に、誹謗中傷や個人情報の流出などでの被害が増加している。

次に、それらの問題への予防策の情報交換が行われた。日本からは情報モラル教育やネットパトロールなどの関係機関との連携による対策を中心に紹介した。韓国側からは問題の状況を教師が把握するための **CLASSTING** というアプリや望ましい言語環境をつくるためのプログラム、素直に謝罪するための **Apple Day** という取組などの未然防止策の工夫を紹介してもらった。学校が中心となっていて行っている取組が多く、大変参考になった。子どもたちの健全な生活環境が保障されるためにも、社会全体のネット問題へのより良い対策を考えていきたい。

3 9月26日（火） 光州滞在3日目

光州滞在の最終日となる3日目は、車で1時間半ほど離れた全州にある文化施設を訪問した。全州韓屋村ではせっかくなので、韓服をレンタルし、町歩きをした。思っていたよりも簡単に着脱でき、軽くて涼しく、また彩りも華やかで気分が少々高揚した。私たちのような観光客ぐらいしか着用してないのではと思いきや、地元韓国の多くの方々もグループやペアで着こなし、その姿を眺めて見比べるのも楽しかった。

この日は2日目から通訳として私たちをサポートしてくださった金さんのアテンドで、この施設の名所を案内していただいた。慶基殿や殿洞聖堂などを巡り、韓屋の町並みを堪能した。金さんは少しでも私たちを楽しませようと、時間を考慮しながら私たちの希望を聞いて考えてくれていた。彼女に出会えたことはこの研修での一つの幸運であった。

4 9月27日（水） ソウルへ移動

最後の大学食堂での朝食を終え、徐さんの見送りで光州空港から金浦空港へ向かい、ソウル入りした。4日間の私たちのアテンドでの疲れがあるにも関わらず、最後まで笑顔で見送ってくれた徐さんには感謝の気持ちでいっぱいである。韓国という国は食べ物が美味しく、日本からも近く、以前から好きな国ではあったが、徐さんのような方に出会え、またその人に会うために訪れたいと思えたことがこの韓国研修でのいちばんの宝物となった。

金浦空港からは金先生の案内でリムジンバスでの東大門への移動となった。今回の研修では、金先生が私たちの行動に不便が無いように、様々な点でご心配いただき、とても快適に過ごすことができた。金先生がいらっしゃらなければ、スーツケースを運んで何回か乗り換えしながらの移動となったであろう。その後も、ソウルでの昼食場所や夜のホテルへの帰着、荷物の管理までも気遣っていただき、まるで私たちの母のようにあたたかく見守ってくださった。



5 9月28日（木） 帰国

ホテルの目の前からリムジンバスに乗り、仁川国際空港へと向かった。空港に到着し、まず初めに向かったのが、2日目の休憩時に頂いた韓国餅のお店である。柔らかい餅に包まれた甘すぎない餡のバランス、この食文化にも今回のもてなしが無ければ出会っていないかもしれない。

飛行機の出発が30分ほど遅れ、帰りのフェリーも一本遅くなってしまったが、研修の満足感から疲れもなく、予定より2時間半ほど遅れての帰宅となったが、研修の充実感に包まれた帰国の夜であった。

6 最後に

この5日間、韓国研修をともにできた3人のクラスメート、そして、私たちを引率してくださった池田先生、金先生、森本さんに感謝の気持ちでいっぱいである。また、光州滞在中にお世話になった大学職員の皆さんや通訳などで助けていただいた皆さんのおかげで、気持ちよく研修をさせてもらった。特に、附属小学校長と金先生の以前からの親交のおかげで、私たちまでも手厚くもてなしていただき、人の縁のありがたさを感じた。様々な人との出会いを通して、たくさんの刺激を受けた充実の5日間であった。

人と直に触れ合うことから生まれる感動は何ものにも代えがたいものがある。今までの訪問ではそこまで味わうことができなかった韓国の方々とのつながりを今後とも大切にしていけたらと思う。そして、今後、鳴門を訪れる光州教育大学のみなさんへ、私たちが受けたもてなしの恩返しができればと思っている。

また、今回の研修で学んだいじめやネットトラブルに関しての韓国の実践の良い部分を参考に、今後の教育活動の中でできることを模索していきたいと思っている。

平成 29 年度 鳴門教育大学
グローバル教員養成プログラム 参加報告書

生徒指導の国際比較演習

鳴門教育大学大学院 学校教育研究科
高度学校教育実践専攻 教職実践力高度化コース
学籍番号 17843165
氏 名 田中 由賀里

1 附属小学校長の話より

(1) 教育方針について

児童を尊重すること、児童の思いを傾聴すること、合意形成の3つのことを大切にしているそうだ。児童を甘やかさず、指導すべきことは毅然と対応し、指導を続ける中で信頼関係を築き、児童が相談しやすい関係をつくっているとのことだった。教師は、児童に尊敬される教師となるべく、校長先生のリーダーシップのもと、研修に励んでいるそうだ。附属小学校では、学年ごとに相談室が設置されていたが、そんなに利用することがあるのだろうかとの疑問をもっていた。しかし、校長先生からの話から、児童が教師に相談しやすい関係にあり、相談できる場所として確保されているということが分かった。

また、学校園で育てている白菜の話題から、教育方針に関わる話を聞くことができた。収穫した白菜は、てっきり学校で調理して食べるのだと思いっていた。そうではなく、近隣の社会福祉機関や2つのカトリック教会に納めるとのことだ。また、算数で円を描く練習をする。その練習は、布製のエコバックに描く。その後、色を塗り、カンボジアの子どもたちにプレゼントとして送るとのことである。学習が学校の中で完結するのではなく、他者や社会の役に立ちたいという思いをもち、実際に行動に移す。その経験を積んでいく。校長先生の言葉で言うと、「ほどこしをするまでが大切」である。儒教の教えを大切にしていることが伝わってくる。おいしく食べてもらうために白菜を育てたり、美しく円を描いてプレゼントしたいという思いをもって練習したりしている児童の生き生きとした表情が浮かんできそうである。人の幸せを考えることのできる実践に心動かされた。

(2) 読書指導について

① 読書タイムについて

月曜から金曜までの8:30~9:00までを読書タイムとして設定し、全校生が読書をしている。日本では、1週間のうち、数回は読書タイムとし、それ以外はドリルタイムなど各学校で工夫して行われることが多い。附属小学校のように、朝の活動をすべて読書タイムにしてしまう実践は、あまり聞いたことがなかったので驚いた。ただ、最近、読書量が減り、語彙力の低下が叫ばれる中、毎日30分の日読書時間が確保されることで、望ましい読書習慣の形成や読解力の向上など、良い成果が出やすいと感じる。様々な実践を行うこともよいが、力を付けるために集中して実践する思い切った方法は、魅力的に感じた。読書タイムには、教師も児童と同じように読書を行うように呼びかけられるが、連絡帳のチェックをするなど、ついつい学級事務に充ててしまうことをよく聞く。しかし、附属小学校では、必ず教師も読書を行っているとのことである。その他の実践も共通理解・共通実践が徹底して行われているのだろう。

② 1年間に1人1冊の本の作成～ノーベル(novel)文学賞をめざして～

児童は1年間を通して国語科等で学んだ内容(詩・物語)などをまとめ、それぞれが本を2冊作成しているそうだ。1冊は持ち帰り、1冊は図書室に展示している。他学年の児童の作品を観ることは、友達の作品のよさを取り入れたり、次学年の学習の見通しをもったりできる。友達に自分の作品を読んでもらいたいという相手意識ももてる。最後には、学年で1人、「ノーベル文学賞」として表彰されるそうだ。学習に意欲を高めることのできるユニークな取り組みである。

③ 読み聞かせ

学期が前・後期に分かれており、前期は5・6年生が1・2年生に、後期は3・4年生が1・2年生に読み聞かせをする。読み聞かせの後には、クイズを出し、内容を確認合っている。

④ 本を読みたくなる工夫教師が10冊程度の本を選び、そこからクイズをだすことにする。

児童は、クイズに全問正解したいために、選定されている本を積極的に読むことになる。読まなくてはならないではなく、読んでみたいと思わせる場を意図的に作ることで、読書のおもしろさに気付き、自ら進んで読書するきっかけになるだろう。

(1) 6 年 英語科 “What do you think?”

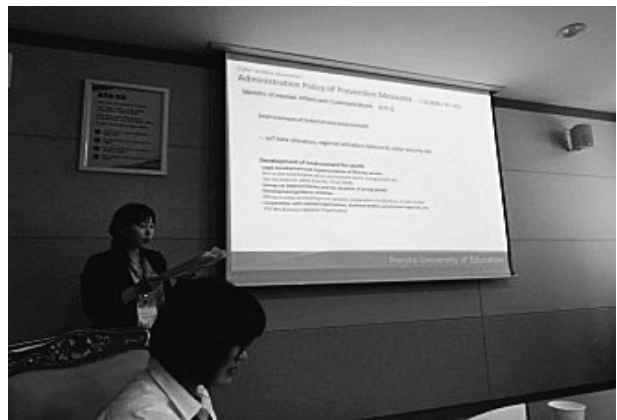
A black and white photograph of a classroom. A male teacher in a suit stands at the front, facing students seated at desks. The room has fluorescent lights, ceiling fans, and a chalkboard with text.



3 インターネットトラブルやその予防対策についての意見交流

私たちは、ネットいじめを含む日本の学齢期の子どもたちにかかわるインターネットトラブルの現状やネットトラブル防止のための取り組みが、行政、事業者、学校教育、保護者や地域の4者で行われていること、学校をチームの中心として児童の健全育成のためには社会総がかりで子どもを育てる社会にしていかななくてはならない状況にあることを報告した。光州教育大学の院生から、子どもたちが様々なストレスを抱え、匿名性を利用して解消することができない思いを書き込んでしまっているのではないかと発言があった。その点に関しては、日本も同じである。

韓国でも、よく利用されるカカオトークのグループチャットを通して深刻なサイバー暴力があるそうだ。予防するためのプログラム運営の事例が紹介された。教師との信頼関係がある前提での秘密相談所（生徒たちが教師と1対1で秘密のコメントをやりとりできるコンテンツ）は、インターネットの先進国らしい取り組みだと感じた。具体的な取り組みとして、教師や保護者が子どもたちよりも率先して使用する言語を改善する、メディアフリーデーの実施、Apple Day（普段から、勇気を出して友達に悪かったことを謝罪する時間をもつ）の実施、悪い言葉をなくす活動（自分の使用する悪い言葉を用紙に記入し、ゴミ箱に捨てる行為を通して、悪い言葉を使用しないと自分に約束すること）、シナフロプログラム（本を読み、好きな言葉を見つける。その後実際に使ってみる。美しい心をもち品性を高めたり、正しく言葉を使用したりできるようにする）、インターネット使用中の自分の言葉を確認することなどが行われている。ツールの正しい使い方ではなく、普段の生活の中で起こるとラブルを解決する力を育て、その力がインターネットトラブルを防ぐことにつながるように指導しているのは日本も同じである。教師はアプリケーションを利用したサイバー暴力に対して、関心をもち、知識を広げることはもちろん大切であるが、具体的な例のような取り組みを続けていくことで、学校暴力予防に効果があったとのことである。



情報ネット社会を生きるために情報モラルは必要であるが、それは心構えみたいなものだけではなく、情報の特質、メディア機器の特質など理解した上で適切に判断する力が求められると思う。インターネット上で友達に情報を発信すると、友達以外の人も存在する公開の場に書いているのと同じであるという想像力が働いていない。知識を身に付けて、使いこなす訓練や仕組みを理解し、「〇〇してはいけない」という対症療法ではなく、道徳教育や人権教育のなどを中心に、日々の教育活動を通して、行動だけでなく、それを支える心が成長できるように指導を続けることが必要だ。さらに、情報化社会では、様々な情報があり、素直に情報を受け取るだけでなく、内容をよく吟味する力が必要になる。批判的な思考を伸ばすような教育を進めなくてはならない。

4 異文化体験（全州韓屋村・ソウル市内）

全州韓屋村は約700件余りの韓国の伝統家屋が集落をなしている。1977年から韓屋保存地区に指定され、現在では全州を代表する観光名所になっている。また、ここで実際に生活している人もおり、生活と文化が共存している。伝統文化を見学、伝統衣装（チマチョゴリ）の試着・体験しながら散策を楽しんだ。慶基殿は景観が美しく、ドラマや映画の撮影がよく行われることが分かる。全州殿洞聖堂は、韓国と西洋との調和が楽しめた。

ソウル市内では、道幅が広くて車線が多いこと、高層のアパートが多いこと、道があまりよくないためか自転車が少ないことに気付いた。建物がライトアップされて、深夜までにぎやかであった。

韓国ならではの食事をいただいたり、施設を見学したりして、韓国の文化を満喫することができた。



5 まとめ

私たちの訪問を歓迎してくださっていることが様々なところから感じられた。空港までの送迎、笑顔でのお出迎え、児童の絵画を展示して、ウェルカムロードを作る、学校園で収穫した作物で手作りされた韓国の伝統のお菓子の振る舞い、短時間でも韓国の教育について理解できるよう、まとめられた説明や施設見学・授業参観での学び、異文化体験、文化施設見学、ゲストハウスの快適な空間。充実した時間が過ごせるように配慮いただいていることがとても伝わってきた。相手を大切に、一生懸命にかかわろうとするその思いは、大学や附属小学校の至るところで見かけることができた。



児童の外遊びを増やしたい。そのために、児童が遊びたくなる場を意図的に作る。児童机で作った卓球台、空きスペースのアスファルト部分におにごっこができるようにペイントするなどの工夫がされている。

授業でも、読書活動、体力作り、地域との関わりでも、児童の意欲を高めることのできる工夫がたくさん仕込まれており、熱心な教育がされていると感じることばかりだった。



韓国訪問では、一緒に参加した先生方やメンバー、スタッフの方、韓国の関係者の方々の心遣いに、本当に感謝している。インターネットの問題と学校教育についての意見交換では、金先生や通訳の方のおかげで、互いの意見を交流することができた。伝えたい思いが相手に伝わる喜びを感じることができた。また、通訳がない場合、韓国語や日本語を使っでの会話は成立しにくかったが、英語では意思疎通が図れる。教養として、英語をもっと学び、英語力を高める必要性も感じた。



平成 29 年度 鳴門教育大学
グローバル教員養成プログラム 参加報告書

生徒指導の国際比較演習

鳴門教育大学大学院 学校教育研究科
高度学校教育実践専攻 教職実践力高度化コース
学籍番号 17843194
氏 名 中野 美砂子

■光州教育大学を訪問して

① 光州教育大学附属小学校施設見学

光州教育大学附属小学校の校舎内を見学した時に感じたのは、児童の安全への配慮が行き届いているということである。体育館の壁は柔らかいものを採用し、ぶつかってもけがをしにくいようにしていたり、理科室には薬品がかかったときにすぐに洗い流せるシャワーが備え付けてあったりした。ランチルームの入り口には、エアダスターがあり埃が入らないようにしてあった。

子どもたちが体を動かせるように、外にはちょっとした卓球台が置いてあったり、地面にラインが引かれていたりして、すぐに遊べるような工夫があった。緑豊かな中庭、淡い色の教室やブラインド、心がしんどい子が休める教室もあり、ホッとできる空間が多くあったのも印象的だった。

②授業参観

【6年生英語 単元名：What Do You Think?】

韓国では、小学校3年生から英語学習が始まる。小学校3年生の授業を参観した時に、子どもたちが英語を使って昔の遊びの紹介をしてくれたことに驚いた。

実際に6年生の授業を見てみると、教科書だけでなく、デジタル教材を使ったり、いくつかのアクティビティを組み合わせたりして授業を組み立てているところは日本とよく似ていた。しかし、児童の英語力は日本と比べると高かった。授業参観した児童たちは、英語で簡単な会話ができたり、簡単な会話を聞き取ってフレーズや文を書いたりすることができていた。授業参観を通して日本の小学校との外国語教育の違いを2点ほど感じた。



遊び方を英語で説明する児童(3年生)

一つ目は、教育課程における文字指導の取り扱いである。韓国では、共通過程である「基本過程」のほか、基本過程の基準を満たしている児童に対してはさらに高度な「深化過程」を実施し、基準を満たしていない児童に対しては「補充過程」が実施されている。文字の学習に関しては、小学校4年生でアルファベットの認識、小学校5年生でアルファベット（大文字、小文字）や単語を書く、小学校6年生ではさらに口語練習で学んだフレーズや文を書く活動が教育課程の中に記されている。日本では、小学校の外国語活動の課題の一つとして、音声中心で学んだことが中学校での音声から文字の学習にうまくつながっていないということがあげられている。新学習指導要領では、小学校の中学年では「話す・聞く」を中心に、高学年では段階的に文字を読んだり書いたりすることが加えられた。韓国の音声言語を中心としながらも無理のな

い文字の導入が参考になった。

二つ目は教師の英語力である。授業の導入で、「What did you do yesterday?」を使ってクラスの友達と週末にしたことを聞きあう活動があった。教師は、英語を使って質問をするだけでなく、話題を広げたり、他の児童にも意見を投げかけたりしてコミュニケーションを広げる役割を果たしていた。児童は、英語でのやり取りにとっても慣れているようだった。韓国では、英語に対する親近感と自信を植え付け、英語に対する興味と関心を持続的に持たせることを重視しているそうであるが、このような雰囲気づくりを英語で教師が行えるのはとても大切である。日本の小学校教員も外国語活動の研修が行われているが、英語に対する親近感を持たせるという視点で英語を使った授業ができることが今後の課題だと感じた。



Listen and Play の活動

※参考資料「韓国における小学校英語教育の現状と課題」（文部科学省HPより）

【6年生社会 単元名：国家の仕事をつとめている機関】

「憲法に反する法律も守らなければならない」というテーマで、ディベートの授業であった。賛成側と反対側が向かい合うように机が配置され、討論の順番に沿って授業が進められていた。印象的だったのは、どの児童の声も大きく、のびのびと発表していたことである。また、グループごとに作戦を練り直すための話し合いでも、グループのメンバーがしっかりと意見を言っていた。日本でもディベートの授業を行うが、今まで学んできたことをまとめるだけでなく、自分がどう考えるのかという点を重視しているところが参考になった。



ディベートの授業

② 大学院生との交流

ネットいじめについての意見交流会を行った。子どもたちを取り巻くネット環境やそれによって生じるネットの問題は日本も韓国も同じ状況であった。また、具体的なネットいじめの例も、韓国と日本はとても似ていた。しかし、ネットいじめ対策には違いがあるように感じられた。

韓国では、サイバー暴力の原因を①だれでもインターネットにアクセスしやすくなっていること、②匿名性が保障されることととらえている。そのため、解決策の一つは匿名性をなくすことであった。韓国ではインターネットの実名制が部分的に実施されている。情報通信法と情報通信施行令により、公共機関と利用者が 30 万人以上のサイトの掲示板利用者に対して義務化されているそうである。解決策の二つ目は、ネット利用時のマナーについて学ぶことである。学校でもマナー教室を行うことでサイバー暴力が生じないように取り組んでいる。

具体的な学校でのプログラムを紹介してもらった。韓国は望ましいスキルを身に付け、行動を変えることでいじめをなくそうとしていることに重点が置かれていると感じた。また学校だけが教育を行うのではないという考えから、積極的に親も巻き込んで教育に取り組んでいる。日本は、情報モラルのような知識を与え、情報を正しく判断・理解することや道徳で心情を高めることを通していじめをなくそうとしている。

韓国も日本も抱えている問題はほとんど同じであった。それらの解決のために、韓国では責任の所在をはっきりさせているところが印象に残った。学校（先生）が行う範囲と家庭・地域が行う範囲がはっきりとしている。先生の精神的な負担が日本より少ないのではないだろうか。

③ 全体を通して

今まで、外国の教育施設や授業を参観する機会は何度かあったが、実際に教員(大学院生)と教育現場について意見を交換する機会はなかったので、とても有意義なものとなった。時代背景や文化は違うが、お互いの良さから学び合い、高め合うことが大切なのだと思う。今回の訪問に際してたくさんの方にお世話になった。感謝の気持ちを次の交流で返していきたい。

平成 29 年度 鳴門教育大学
グローバル教員養成プログラム 参加報告書

生徒指導の国際比較演習

鳴門教育大学大学院 学校教育研究科
高度学校教育実践専攻 教職実践力高度化コース
学籍番号 17843208
氏 名 西 由香里

1 附属小学校見学

大学の敷地内に小学校があり、教育実習など大学生が参加する活動が行いやすいのではないと思った。授業は6年生の英語、社会、3年生の総合的な学習を見学した。6年生の英語は、“What did you do yesterday~?”ということを互いに質問し合い、それを発表する活動から始まった。ほとんどの子どもが会話ができていて驚いた。後から伺ったお話によると、韓国は人口が約5100万人と日本の半分ということもあり、市場規模を考えても海外での活動なども視野に入れ、小学校から英語教育に力を入れているとのことだった。また、東南アジアなどの国々から短期で教員の派遣を受け入れているということで、小学生から異文化を身近に感じることができるととても良い機会だと思った。

3年生は、グループごとに調べた韓国の伝統的な遊びを、ポスターセッションの形で発表していた。そのときに遊びに使う道具も準備して、発表を聞いた後、実際に遊べるようにしていた。楽しそうに、生き生きと活動していたのが印象的だった。6年生の社会は、ディベートを行っていた。グループでの作戦会議では、話し合いに参加していない子どもがいなかったのに驚いた。



附属小学校ということもあるのかもしれないが、施設設備面でも充実していた。体育館にもエアコンがついていると聞き、驚いた。そして特に、中庭と学校菜園が印象に残った。中庭には水車や花壇があり、当日は子どもたちの描いた絵がたくさん展示されており、私たちを歓迎するために飾ってくださったということで、これだけ準備するのは大変だっただろうと思った。



また、ミニ卓球台が置かれ、校内のアスファルトの部分には図をペイントした場所が8カ所あり、休み時間には多くの子どもたちが遊んでいた。学校菜園では、クラスごとに白菜を栽培し、その白菜で作ったキムチを福祉施設に送っているということだった。日本でも、野菜を栽培し、調理して食べて食育につなげるという活動はしているが、この小学校では奉仕の心も養うと



いう意味でも、そのような活動を行っているということだった。

校長先生のお話も伺う機会があったが、教育方針として大切にしていることは「尊重（愛情）」「傾聴」「合意形成」ということだった。教師が子どもに愛情をもって接し、一人の人間として尊重することで、子どもは大切にされていると感じ、他の人を大切にすることなどを学んでいくということだった。教育実習に来た学生も、最初は附属小学校の先生方のそんな姿勢に驚くが、先生方は子どもたちのことを待つことを心がけているということだった。子どもに対応するときの心構えを改めて教えていただいたような気がした。

2 大学施設見学

光州教育大学校には、様々な施設があったが、特に感心したのは異文化をいろいろな方法で体験できる「多文化教育体験館」だった。言葉、食べ物、音楽、町並みなどを楽しみながら体感できるものだった。このような施設があると、異文化理解の入り口としてとても良いと思った。また、歴史博物館には、農作業に使われていた道具が展示され、韓国の歴史を学べるようなコーナーもあった。農作業の道具は日本と同じようなものもあり、興味深かった。中学校社会科の歴史の教科書には、4～7世紀ごろの朝鮮半島の国名が、漢字とハングル読みで出てくるのだが、博物館にはハングル文字での国名の表記があり、思わず写真を撮った。



3 ネットいじめ，インターネットトラブルについてのワークショップ

韓国，日本でのネットいじめを含むインターネットトラブルの現状や対策について，韓国の大学院生（小学校の教員）4人の方とワークショップを行った。韓国でも，ネットいじめの現状は日本と同じであるということがわかった。ネットでの様々ないじめや事件が起こっているため，教育より処罰を厳しくして防止するべきだという意見もあるということだったが，やはり教育の力で解決していけるように，学校や家庭での教育が重要であるという発表を聞いて，その点でも同じだと思った。

ネットいじめへの対策として，韓国の先生からいろいろな取り組みが紹介された。アプリを使って教師が子どもや保護者と対話したり，“Apple Day”という友だちに謝罪のメッセージを送る日を設定したり，話を聞いているだけでも興味がわいた。その中で，現場に戻ったら実践してみようと思った取り組みがある。それは，子どもたちが自分で使ってしまう悪い言葉を紙に書き，それをみんなの前でゴミ箱に捨てること

で、その言葉を使わないように意識させるというものである。実際に捨てるという行為をすることで、少しでも意識していくのではないかと思った。発表の中でも、子どもたちは自分との約束を守るために努力する姿が見られるようになったということだった。

ネットいじめの対策として韓国の先生方から紹介されたのは、学校で実際に取り組んでいる具体的な内容だった。私たちも、学校で行っている道徳や人権教育のなかでのネットいじめに関する内容のものや、エンカウンターのようなものを紹介できれば良かったのだが、そのときには思いつかず、警察や業者の方に来てもらっての携帯安全教室の紹介しかできなかった。もう少し考えておけば良かったと反省した。

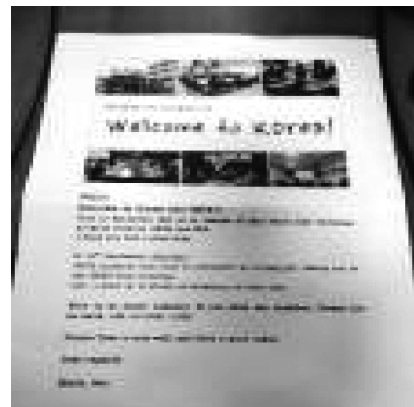
発表の後のディスカッションでは、ネットに悪口などを書き込む子どもの心理として、日常生活で自分の気持ちをうまく伝えられない子どもがネットに書き込みをするのではないかという意見や、昔は遊びやスポーツで発散していたストレスを、スマホで発散しているのではないかという意見、自分がいじめられないためにするのではないかという意見などが出された。スマホの使い方、ネットのマナー教育を行っていかねばいけないという点でも意見は一致していた。ネットの匿名性、道徳・人権教育の重要性などについても意見交換ができた。

教育全般ということではなく、インターネットトラブルとその対策という絞られたテーマだったので、意見交換をしやすかったと思う。時間があれば、教育相談や発達障害の子ども達の現状や対応、教科指導のことなどについても聞いてみたかった。限られた時間ではあったが、韓国の先生方と直接意見交換ができ、とても有意義な時間となった。

4 研修を終えて

韓国の教育大学や附属小学校への訪問ができ、大学院生の方との交流もあるということで、普通の観光旅行では絶対にすることのできない経験ができると考え参加を決めたが、本当に参加して良かったと思う。

理由の一つは、人の温かさを実感したことである。光州の空港に到着したときから、光州教育大学校の職員の方が、初めて会ったとは思えないほど親身に接してくださり、少し不安だった気持ちもどこかへ行ってしまい、光州で過ごすことがとても楽しみになった。その時の気持ちの通り、5日間の研修は本当に楽しく、有意義なものとなった。朝食の学生食堂では、私たちが韓国人ではないと知ると、食堂の方が、親切に取り方を教えてくださったり、海苔やお茶をサービスで出してくださったりして、その心遣いがとても嬉しかった。



た。

言葉の問題はあるが、伝えたいと思う気持ちが大切なのだと実感した。夕食のときには、韓国の大学関係者の方と同じ席だった。最初は、言葉もわからないし困るのではと思ったが、その方がスマホの翻訳アプリを使って、出されている韓定食の料理の説明をしてくださった。それから翻訳アプリを介してのやりとりだったが、楽しく過ごすことができた。少しだけ勉強している韓国語を試したりもして、言いたいことが伝わったときには嬉しかった。



韓国語でなく、英語の単語一言でも、“おいしい”“嬉しい”など自分の気持ちを伝えることはできる。私自身、感情表現は苦手なのだが、大切なのは、伝えたい気持ちとそれを素直に表現する少しの勇気だと思った。学校現場に戻ったら、子どもたちにもそのことを伝えたいと思う。

また、少しではあるが韓国の生活文化の一端に触れることができたことも良かったと思う。食文化、チマ・チョゴリ、スーパーマーケットなど、実際に経験しなければわからないことがあり、それを体験するのは楽しかった。この5日間、本当に貴重な体験をすることができた。大学関係者の方々、通訳の方、附属小学校の校長先生をはじめ先生方など、この研修に参加しなければこのような出会いもなかったと思うと、いろいろなことに前向きに参加することも大切だと感じた。関わってくださったすべての方に感謝し、この経験が無駄にしないようにしていかなければならないと思う。

平成 29 年度 鳴門教育大学

グローバル教員養成プログラム 実施報告書

社会科教育プログラム ～社会科における主権者教育の国際比較～

出張者所属・氏名

教員（1名）：	社会系コース	井上 奈穂
院生（1名）：	社会系コース	長瀬 多絵（L3）
学部生（3名）：	小学校教育専修 社会科教育コース	石畠みさき（G3）
	小学校教育専修 社会科教育コース	古屋 寛樹（G4）
	中学校教育専修 社会科教育コース	星出 諒太（G4）
用務地	：	大韓民国
用務先	：	光州教育大学校
出張期間	：	平成 29 年 11 月 23 日（木）～ 11 月 27 日（月）

1. はじめに

「グローバル教員養成プログラム（光州教育大学校【韓国】・社会科教育）」は、「主権者教育」の視点から、日本と韓国の社会科の授業を比較し、よりよい主権者の育成につながるための授業の在り方について検討するとともに、両国の懸け橋となるような主権者の育成につながる方略を考えることを目的としたものである。

「主権者教育」は単に学校の中だけで行われているものではない。当該国の歴史的な背景を踏まえた理解が必要となる。そのため、①小学校の社会科授業の見学・検討会、②韓国の民主化に関するフィールドワークの2つを活動の核と位置づけた。

2. 研修計画・内容

2-1. 参加者・研修日程

①参加者

本研修は、初年度ということもあり、当初は、全体での公募という形をとっていたが、主権者教育を中心においているため、主に社会系コースの特に社会科教育を専攻している学生、また、社会系コース内の韓国に留学経験のある院生を選出した。参加者は次のとおりである。

教員	(1名) : 人文・社会系コース (社会)	井上 奈穂
院生	(1名) : 人文・社会系コース (社会)	長瀬 多絵 (L3)
学部生	(3名) : 人文・社会系コース (社会)	石畠 みさき (G3)
	人文・社会系コース (社会)	古屋 寛樹 (G4)
	人文・社会系コース (社会)	星出 諒太 (G4)

②研修日程

光州教育大学校での研修は、平成29年11月23日から11月26日まで行った。なお、27日は移動日として設定している。全体的な日程は表1に示した。

表1 海外研修日程

日 順	月日 (曜日)	発着地 (滞在地)	内 容
1	11月23日 (木)	鳴門→関空 関空→ソウル ソウル→光州	移動 バス (松茂 6:00→関空 8:40) 移動 アシア航空 OZ1135 (関空 11:50→金浦 13:40) 移動 リムジンバス (6014) ・光明駅 KTX→光州松汀駅 移動 車 (→光州教育大学校) *18時までにつくように、セオさんに連絡。 ゲストハウス 泊

2	11月24日 (金)	光州 ＊詳細は別紙	光州教育大学校訪問 (授業見学, 学校訪問, 施設見学等) ゲストハウス 泊
3	11月25日 (土)	光州 ＊詳細は別紙	光州及び周辺の文化施設見学等 ○光州事件関係の施設 ゲストハウス 泊
4	11月26日 (日)	光州→ソウル	移動 光州教育大学校→光州松汀駅(車) 移動 光州松汀駅→ソウル中心部(KTX, 地下鉄) ソウル周辺文化施設見学等 ibis Budget Ambassador Seoul Dongdaemun 泊 (334 Toegyero, Jung-gu Jung-Gu Seoul, 100-411 大韓民国)
5	11月27日 (月)	ソウル→関空 関空→鳴門	移動 ソウル市内→金浦空港(バス) 移動 アシア航空 OZ1165(金浦発 17:45→関空 19:25) 移動 バス(関空 21:05→松茂 23:50)

2-2. 研修の内容

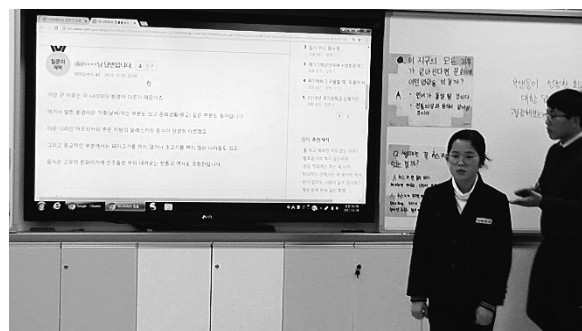
本学の窓口となった大学教員(社会系コース 井上奈穂)と光州教育大学の窓口である教員が事前に打ち合わせを行い、光州教育大学附属小学校における社会科授業の見学と大学内の施設見学及び光州事件についてのフィールドワークを行った。

3. 研修の実際

(1) 授業研究

光州教育大学附属小学校において、小学校6年生社会科「世界のいろいろな地域の自然と文化」と小学校3年生の社会科「アジアに住む人々」を見学した。見学に当たり、事前に指導案を送付いただき、授業内容の確認を行っている。

特に、小学校6年生では、ICTを活用した調べ学習の授業が展開していた。絵を見て、疑問



に思ったことを書き出し、その疑問をインターネットを通して調べ、発表するという方法(ハブelta学習)をとっていた。日本ではあまり行われていない方法であり、日本の学生も興味深く聞いていた。

①小学校6年生「世界のいろいろな地域の自然と文化」指導案

対 象	6-1, 2, 3, 4	単元(次時)	3. 世界の色々な地域の自然と文化
学習主題	問いをつくるハブルタ（※ハブルタ[chavruta]は年齢、階級、性別に関係なく二人がペアを組んで論争を通じて真理を探求することを意味する）で単元3の学習内容を予想すること		
準備物および資料、予習的課題	教 師	ミニホワイトボード、ボードマーカー	
	子ども		
核心能力	知識情報処理能力、コミュニケーション能力		
主題の概要 および 授業者の意図	この単元は世界の色々な国の環境と生活の姿を理解し、世界の色々な国と我が国との関係を理解することによって、世界市民としての基本的能力と態度を育てるところに主眼点を置いている。本時では大単元「3. 世界の色々な地域の自然と文化」を始める最初の時間として教科書の112～115ページを見て、問いをつくるハブルタで単元全体の流れと内容を予想しようと思う。		

評価の観点	授業の流れ	資料および注意点	反省および省察
	◎動機誘発 -112～115ページを見て、何が見えるのかを話しあう		
	〈学習主題〉 問いをつくるハブルタで単元3の学習内容を予想する 〈学習順序〉 -問いをつくる-パートナー討論をする -小集団討論する		
知識情報処理能力	◎問いをつくる -教科書112～115ページを見て、問いを3個以上つくる -問いは内容、想像、適用、総合の問いを少なくとも1個以上ずつは入れるようにする	-問いをつくる3分	
コミュニケーション能力	◎パートナー討論する -作られた問い6個(自身とパートナー含む)を持って互いに話しあい、討論する -良い問い2個を選抜する	-パートナー討論3分	

コミュニケーション能力	◎小集団討論する -パートナーが選んだ問い2個、他のパートナーが選んだ問い2個、あわせて4つの問いに対して討論する -最も良い問い1個を選抜する -最も良い問いと最も良い問いに対する答えをミニホワイトボードに整理する	-ミニホワイトボード、ボードマーカー -小集団討論3分 -最も良い問いの討論5分	
	◎確認する -最も良い問いに対する小集団で合意した答えが合うのかスマートパッドを活用して検索する -全体発表する	-スマートパッド	

②小学校3年生の社会科「アジアに住む人々」指導案

1. 学習デザイン

学年班	3学年4班(男12人、女10人)
学習主題	アジアの色々な国の人々の生活の姿について調べる
成就基準	我が国または、他の国の多様な生活の姿を調査してそれぞれの生活の姿の類似点と差異点について説明することができる。
学習目標	- 他国の多様な生活の姿が分かる。 - 他国の多様な生活の姿を調査して整理することができる。 - 色々な国の人々の多様な生活の姿に関心を持ってそれぞれ違う文化を尊重する態度を持つ。
主要学習活動	- アジアに住む人々の生活の姿について調べる（学習の場） - 我が国とアジアの他の国の人々生活の姿の類似点と差異点を探してみる
学習準備(物)	アジアの色々な国の紹介資料や服、おもちゃ、帽子、特産品など

過程		学習活動	資料(□) および注意点(○)
学びをたく(4')	学習主題を把握する	○学習主題を調べる <アジアの色々な国の人々の生活の姿を紹介する> -アジアの色々な国の紹介活動で注意する点を案内する	□ユネスコ アジア ツアー広報パンフレット (brochure) ○グループ別に調査した国々について案内する。
	アジアの人々の生活の姿を紹介して体験する	○アジアの人々の生活の姿の広報ブースを選択する -アジアの色々な国の人々の生活の姿について調べてみたいブースを選択する ○アジアそれぞれの国別の生活の姿を調べてみる -アジアの色々な国の人々の生活の姿について、紹介し、調べる「学習の場」活動をする	□イーゼル、ウッドラック ○「学習の場」活動により他の国の多様な生活の姿をみつけ、文化にともなう考えと行動の違いを把握できるようにする。
学びを広げる(21')	それぞれ違う生活の姿を比較をする	○我が国の人々の生活の姿と比較して共通点と差異点を発見する -互いに共通点と差異点を調べ、その理由を調べる	○地域ごとに固有の文化的特性があることを知り、我が国または、他の国の多様な生活の姿をみつけ、文化によって人々の考えと行動が異なることを理解し、文化の特質を比較することができるようにする。
	考えを共有する	○学習整理をする -多様な生活の姿をもとに文化の意味が分かる -さらに調べてみたい点を発表する	○それぞれ違う文化を理解し、受け入れる姿勢を持つようにする。
学びを確かめる(5')			

2. 学習確認

核心力量	確認観点	時期	方法
情報処理活用能力	・アジアの色々な国の人々の生活の姿に対する資料を調査して説明できるか?	学習を広げる	観察/質問
コミュニケーション能力	・アジアの色々な国の人々の生活の姿について分かる「学習の場」活動で積極的にコミュニケーションできたか?		

また、見学の後、授業検討会を行い、各授業について学生同士でディスカッションを行った。まず、授業者に授業の意図について説明した。それを受け、①事実の確認、②良い点・悪い点、日本の授業との違い、③日本から見た韓国の授業の特徴、④①～③を受けての議論を行った。

（２）光州事件に関するフィールドワーク

本研修では、「主権者教育」を考える際の題材として、1980年5月に光州教育大学校のある光州市で行った「光州事件」を取り上げた。

光州事件とは、ソウルでの全斗煥らの軍部クーデターに抗議した韓国南部の光州市の大学生・市民と軍が衝突した事件のことである。学生・市民は一時市の中央部を抑えたが、軍による全面的な弾圧によって多数の犠牲者を出した。死者は民間人で168人、軍人23人、警察4人、負傷者は4782人、行方不明406人という大きな犠牲をだして終結した（文京洙『韓国現代史』2005 岩波新書 p.142-147）とされるが、諸説あり歴史上の解釈が未だ確定していない。

また、光州事件の当時、軍事政権下に置かれていたため、市内での戒厳令と報道統制がしかれており、周辺の地域の人々は、光州市内でどのようなことが起こっているのか分からない状況であった。しかし、光州での出来事についての情報を得たドイツ人記者が戒厳令下の光州市内に入り、その様子を世界に報道したことによって、軍の非人道的な行為に対する世界的な批判が高まり、事態が収拾したとされる。

日本では、あまりなじみのない事件であるが、政府とジャーナリズム、そして主権について考える上で非常に興味深いテーマであるといえる。しかし、それゆえに、様々な政治的な思惑が重なり、学習の視点が定まりにくい。この問題への対処として今回は、映画を活用し、共通理解を図ることとした。

韓国で現在放映されている光州事件を題材とした映画「タクシー運転手」を視聴したのち、光州市内に残る事件の史跡を巡ることにより、「主権者とは」についての考察を深めた。



（チャン・フン監督「タクシー運転手-約束は海を越えて-」）

4. 終わりに

本研修では、授業見学・検討及びフィールドワークを通して、主権者教育について考えた。研修に当たり、光州教育大学校の学生との共通のものをみた上でのディスカッションを行ったことにより、より実りある交流につながったと考える。社会科は、当該国の歴史・文化と密接な関係があるため、単に授業を見るだけでは、日本から見た視点にとどまってしまう、グローバル教員に必要な資質・能力の育成につながらない。日韓で共通の教材を活用し、その見方の違いを通して共有することが必要といえよう。

最後に、今回の交流は、光州教育大学校からの支援と協力の上で成立したものである。今後、このような交流が単発で終わらないよう、光州教育大学校との連携をさらに、深めよりよい研修へと高める必要があるといえよう。

平成 29 年度 鳴門教育大学

グローバル教員養成プログラム 参加報告書

社会科教育プログラム ～社会科における主権者教育の国際比較～

鳴門教育大学大学院 学校教育研究科

教科・領域教育専攻 社会系コース

学籍番号 15815111

氏 名 長瀬 多絵

1. 本研修の目的

日本と韓国の社会科の授業を比較し、よりよい主権者の育成につながるための授業の在り方について検討するとともに、両国の懸け橋となるような主権者の育成につながる方略を考えることを目的としたものである。

2. 研修期間

光州教育大学校での研修は、平成 29 年 11 月 23 日から 11 月 26 日まで行った。なお、27 日は移動日である。

3. 研修内容

(1) 授業見学・検討会

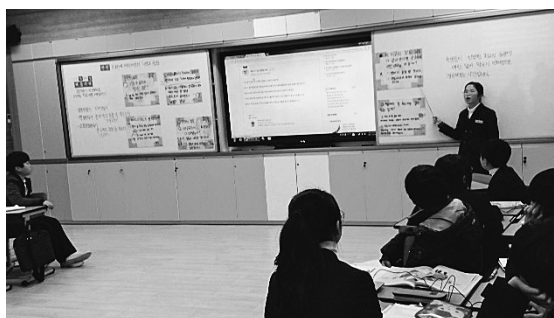
大学構内にある附属小学校にて 6 年生と 3 年生の授業を見学させていただく機会を得た。今回見学させていただいた授業はいずれも衝撃的で、これまでに描いていた「授業とはこういうものだ」といった形が自分の中で崩れていくのを感じた。

① 6 年生「世界のいろいろな地域の自然と文化」

6 年生の授業をされた先生は、教育で最も大切なのは会話であり、会話を通してあらゆる能力が上達していく。そのため、児童同士の会話を引き出すような問いかけをすることが重要だという考えをお話くださった。そして、6 年生の授業では実際に、言語活動の充実した生徒主体の授業が展開されていた。



授業には「ハブルタ」という手法が取り入れられていた。これは、年齢・階級・性別に関係なく 2 人がペアで論争し、それを通じて真理を探すといった活動である。ハブルタが始まると同時に教室は生徒たちの声で溢れかえり、一瞬、何が起きているのか分からなくなる程に激しく議論が交わされていた。

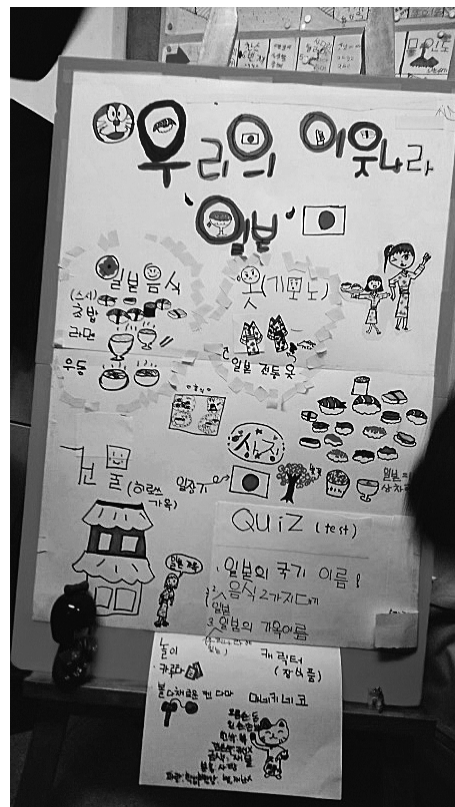


また、授業の終わりには、児童の立てた仮説が正しかったかどうかをインターネットで検索・検証させ、仮説を立てた理由・調べた結果・そこから考えたことなどを発表させていた。モニターに検索画面を表示してソースを紹介させており、適宜インターネット上の情報の信憑性など、情報の扱い方に関しても指導されていた。各班に1台ずつ与えられているノートパソコンや、ホワイトボードの後ろに収納されているモニター、パソコンと一体化した教卓など、ICTが充実しており、それを最大限に活用していることにも驚かされた。



②3年生「アジアの国の人々の生活について知ろう」

この授業では、いくつかのブースが用意されており、それぞれのブースで児童がアジアの国々に関する発表を行った。その際、各国の小物や食べ物などが展示されていたが、これらのほとんどは、授業をされた先生が旅行に行った際に買い集めてきたものだそうだ。



展示品の中には児童がベトナム人の母をもつ友人から借りてきたという伝統衣装「アオザイ」もあり、授業を通して、海外にルーツを持つ友人やその国に対する理解が深められているように

感じた。韓国では、多文化家庭の増加に伴い、多文化理解教育に力が入られるようになっていく。検討会では日韓の多文化児童・多文化教育の違いについても触れられ、非常に興味深かった。

韓国の附属小学校に通う児童は、選抜試験を受けて集まった児童たちではない。1年生から継続して行われる教育によって、どのような児童であっても今回見学させていただいたような生徒主体の、先進的な授業に参加することができるのだということを肌で感じる事ができた。今回お話を伺った先生方は皆、とても熱心な教育者であった。特に、6年生の授業をされた先生は「研究授業を1000回行い、それを本にして出版する」ということを目標にされていて、指導案や他の授業を観察したときのメモなどがまとめられていた。どの指導案もメモで埋め尽くされており、よりよい授業を作ろうとする熱い思いを感じ取ることができた。そして、熱意を持った教師を全面的に応援しようとする学校側の姿勢にも感動した。

（２）校内の施設見学

敷地内には校舎や図書館、食堂、寮、付属小学校、コンビニ、カフェ、資料館など様々な施設が整っていた。中でも資料館は地域の小学校が社会科見学の場所として利用しており、大学の一角にあるものとは思えないくらいに展示品、設備が充実していた。中には卒業生から寄付された資料も多く展示されていた。

図書館も設備もとても整っており、学習スペースの多さにも驚かされた。ここにも本の寄付スペースがあり、気になった本は自由に持ち帰って良いとされていた。

4. 研修の考察

6年生の授業では「ハブルタ」という活動に衝撃をうけた。検討会での韓国人学生の様子から、韓国において「ハブルタ」というのは特別な活動ではないように見受けられた。私は小学校の教育現場に関しては分からないことが多いので中学校の様子と照らし合わせて考えてみた。日本でもアクティブラーニングが重視され、生徒同士で話し合わせる場を設ける授業も多くあるが、相手の主張を聞くとそれに同調し、自分の意見を主張しない子どもが多いような印象を持っている。「ハブルタ」では自分の意見をしっかりと主張しており、どうやって相手を納得させるかといった熱い姿勢を見て取ることができた。これらの生徒が選抜試験を受けていないという事実も衝撃的である。1年生の時から継続して訓練を受けていけば、どのような生徒であっても高度な言語活動を行うことができると知ることが出来た。

3年生の授業では、小学生らしい元気な様子を見る事が出来た。授業のはじめに流されたミュージックビデオは子ども達が出演した自作のビデオだった。クラス全員で何かを作り上げることは、自分がクラスの一員であるということを実感させることができる素晴らしい活動だと考えている。その作成したビデオを授業の導入部分で流し、授業が始まるという意識付けを行っていた。授業の最後は全員でダンスを踊るという活動が入っており、これもまた「クラスでひとつになる」といった意図があるように感じた。

検討会では日韓の「グローバル社会」に関する教育の違いについて考える機会があった。日本では、自分たちの世界がグローバル化しているということを学習するが、韓国では周辺の国とそこに暮らす人々の生活自体を学習する。この違いはグローバル社会に関する教育で身に付けさせたい認識が異なることから生まれた違いであるように感じた。

韓国では多文化家族に対する世論を改善するため、多文化教育が国主導のもと進められている。この教育では、多文化家庭の子どもの背景について理解し、様々な文化を受け入れられる子どもを育成すること、また、多文化家庭の子ども自身がその文化を自分のアイデンティティとして受け入れられるようにすること等が目指されている。

自分の関心がある多文化に関する授業を見学することができ、とても学ぶところが多かった。今回見て感じることをできたことを修士論文の中でも活用できるようにしたい。

平成 29 年度 鳴門教育大学

グローバル教員養成プログラム 参加報告書

社会科教育プログラム ～社会科における主権者教育の国際比較～

鳴門教育大学 学校教育学部

学校教育教員養成小学校教育専修 社会科教育コース

学籍番号 15752012

氏 名 石畠 みさき

1. 本研修の目的

日本と韓国の社会科の授業を比較し、よりよい主権者の育成につながるための授業の在り方について検討するとともに、両国の懸け橋となるような主権者の育成につながる方略を考えることを目的としたものである。

2. 研修期間

光州教育大学校での研修は、平成 29 年 11 月 23 日から 11 月 26 日まで行った。なお、27 日は移動日である。

3. 研修内容

①授業見学・検討会

授業を見ていて、日本と違うなと感じた点は大きく分けて二つある。

一つ目は I C T の用い方だ。日本では電子黒板やパワーポイント作成で用いることが多く、また使用する頻度も多くはない。しかし韓国の授業では、意見の根拠をインターネットで探し、その画面を全体に共有する、など自然かつ効果的に I C T が授業の中に用いられていた。また、インターネットから資料を探してくる場合には、NAVER など情報源が曖昧なものは根拠としてはあまりよくない、メディアリテラシーの意識づけもしっかりとされていた。

二点目は主体的に参加できる授業であった、という点である。自分の班の意見や、調べたことをホワイトボードや紙を用いてまとめるだけでなく、まとめたと自分の言葉で発表していた。



また、その意見に対する質問なども積極的に行われており、全体的な印象として、非常に児童が積極的に参加しているという印象をうけた。机、いすの配置も話し合いや発表を前提とした形であり、日頃から話し合いの多い授業をしていることが垣間見えた。

検討会ではこれらの授業を踏まえ、日本と韓国の教育の違いについて、授業の構造や指導要領についてなど、様々な意見を聞くことができた。特に多文化教育についての考え方については、その後の資料館見学でさらに深く学ぶことができた。

②フィールドワーク

今回は文化ということで、「食」に焦点を当ててまとめる。

(1) 品数の多さ…「前菜（ミッパンチャン）」

韓国料理の特徴としてまず感じたのが、その品数の多さである。席に着くなりいくつもの小皿が並べられ、食べ終われば新しいものと交換される。この小皿にもられたキムチやナムルなどのおかずのことを「ミッパンチャン」と呼ぶ。ミッパンチャンは韓国の伝統的なご飯膳の組み方である飯床（パンサン）では必ず供されるものであり、お代わりも無料である。一般家庭では三～五皿が出され、七～九皿となるとかなり豪華な食事であり、宮廷料理では十二皿つくそうだ。実際、滞在中には、少なくとも三皿、多いときは十皿近くが並んだ。ミッパンチャンの例としては、キムチ（白菜・きゅうり、大根、にんにくの葉など複数並ぶことが基本）、大根の甘酢（辛くない）、にんにくの葉のしょうゆ漬（辛くない）、卵豆腐、葉野菜のおひたし、ビーフンなどが挙げられる。

▽ 光州での食事の様子



(2) 辛さ

どの料理も基本的に非常に辛かった。韓国には十七世紀ごろ唐辛子が持ち込まれたため、それ以前の宮廷料理は辛くないものも多かったそうだが、十七世紀以降の韓国料理には基本的に唐辛子が用いられているため、全ての料理が辛いと思って間違いない。

別の容器に入った葉物野菜に米とおかずを巻いて食べる。赤色をしているものはすべて辛い。



一番辛くないものでも、鳴門教育大学のカレー程度の辛さであり、一番辛いものになると、食べ終わってから小一時間ほどのあいだ舌がピリピリと痛み続ける。問題なく辛くないのは、米と右下のネギ入りの卵焼き、左下の黒豆のみである。

△光州教育大学でいただいたお弁当

また、日本人の多くは「赤い＝辛い」と考える人が多いだろうが、韓国では、一見安全な色をした食べ物が辛い、ということが非常に多かった。



初日の夜、見るからに辛そうなキムチなどの赤色の類を避け、中央の鍋に浮かぶネギを、私はうっかり口にした。すると数拍置いて、辛さを通り越した、指すような痛みと熱さが口の中を襲い、息をするだけで舌と喉が刺すように痛んだ。その後丸一日舌の感覚はほとんどなかった。また、それから三日間胃が荒れた。

このことから、「赤くないものでも辛い」という教訓を得て、私は食事の際にはいきなり多く口に含むのではなく、少し口に入れて、確かめてから食べるようになった。また、初日の夜に食べた青い唐辛子は、気を付けて探してみると、みそ汁やサラダの中にも多く紛れ込んでいた。しかしこれは一見ピーマンと見た目の区別がつかないため、注意が必要である。

また、上記の内容からだと「韓国の人は辛いものが平気である」と導くこともできるが、一概にそうであるとは言い切れない。なぜなら現地の大学生によると「青い唐辛子を少しずつつかじっていく」ロシアンルーレットのような遊びもあるそうで、これは「辛い」ということが罰ゲームになりうるということである。しかし学生食堂のみそ汁に青い唐辛子が入っている時点で、日本人よりは辛いものに対する耐性があるのではないだろうか。

（３）マナー

器を持つてはいけない、目上の人より先に箸を付けず、目上の人と酒を酌み交わす際には左手をひじや胸に添える。また目上の人の前で飲酒をする場合、目下の者は目上の人から顔を背け、手で口元を隠して飲まなければならない。また女性は、酌をしてはいけない。食事中的喫煙は目上の人の前では許されない、など、儒学に基づいた数多くのマナーが存在した。マナーそのものに差はあれど、一緒に食事をする相手が不快にならないようにする、という点では同じであり、本質に差異はないのだということを感じた。

4. まとめ

今回の光州教育大学での授業研究、研究会において、韓国で行われている授業の一例を見ることができた。児童が主体となった授業形態や、学級図書などからつくっていく多文化教育に向けた教室づくりなど、様々な学びを得ることができた。この学びを自分の目指す教師像へと繋げていきたい。

平成 29 年度 鳴門教育大学

グローバル教員養成プログラム 参加報告書

社会科教育プログラム ～社会科における主権者教育の国際比較～

鳴門教育大学 学校教育学部

学校教育教員養成小学校教育専修 社会科教育コース

学籍番号 14752109

氏 名 古屋 寛樹

1. 本研修の目的

日本と韓国の社会科の授業を比較し、よりよい主権者の育成につながるための授業の在り方について検討するとともに、両国の懸け橋となるような主権者の育成につながる方略を考えることを目的としたものである。

2. 研修期間

光州教育大学校での研修は、平成 29 年 11 月 23 日から 11 月 26 日まで行った。なお、27 日は移動日である。

3. 研修内容

①授業見学・検討会

光州教育大学附属小学校の授業を見学して私が感じたことは、とても早い段階で異文化に触れる学習をしており、とてもグローバルな意識が高いということを感じた。そこでは小学校三年生と六年生の授業を見たのだが、その両方の学年で、異文化に積極的に関わろう、異文化の理解を積極的に行なっていこうという子どもの意志や、常にグローバルな視点を持った教師の指導を見ることができた。今回の報告書では、六年生の授業を見た感想を中心に書いていく。

まずは小学校六年生の授業を見た。そこでは異文化理解の導入の部分で、教科書の絵を見た児童が、これからこの単元でどのような学習をしていくのかという問いを立てて、それからその問いを班で共有し、どの問いが一番よいのかを議論し、その問に対してインターネットなどで情報を集め、答えを探し、発表するという授業だった。そこでまず驚いたことが、児童が教科書の絵を見ただけで数多くの疑問を自分の中から考えられるという点である。私は、教科書の絵を見て問いを考えるということを聞いた際に、全く想像ができず、どのような問いが生まれるのだろうという疑問を感じていた。しかし、実際に児童の様子を見てみると、いくつも問いが児童から出てきており、それをとても活発に議論しており、附属小学校の児童のレベルの高さに驚いた。また、その出てきた問いに対しての答えを探す場面でも、インターネットを用いて積極的に調べていたので、授業や疑問に対しての児童の積極性の高さに驚きを感じた。



写真 1： 問いに対して積極的に議論を行なう児童たち

さらに、その答えを発表する場面でも堂々と発表しており、それだけのことができる児童や、それまでの普段の教師の指導をどのようにしているのだろう、自分も見習わないといけないというように感じた。

②フィールドワーク（光州民俗博物館）

大学を出て私たちはまず、「光州民俗博物館」を訪問した。光州民俗博物館では、光州地区の19世紀末から20世紀初頭をベースとした、伝統村落の構造や衣食住、観光総裁の様子などを見学することができた。



写真2： 光州民俗博物館

入り口を入るとまず目に入ったのは壁に作られた巨大な彫刻だった。係員の説明を聞くと、それは光州の祭りで昔から行なわれているもののひとつだという。あまりの巨大さに驚くとともに、日本の文化と全く異なる文化を目の当たりにして、日本との文化の差に非常に興味があった。



写真3： 韓国の祭りで行なわれていたものの彫刻

それから博物館内を進んでいくと、光州の昔の村の様子を表した模型や、身分によって変わる家の構造などが展示されているスペースや、その村の中の学校や漁村、農村のそれぞれで異なった文化の様子や船、農耕具などの実物や模型などが展示されていた。日本と似たようで少し異なるそれらに、韓国と日本の歴史の共通点を感じた。それから少し進むと、次は韓国の伝統料理の食品サンプルの展示スペースだった。キムチをメインとして、日本の伝統料理とは異なり、自分

も別の日に韓国の伝統料理を食べる機会もあったのだが、それに似たものや、見たことのない料理までたくさん展示されており、もっと韓国の伝統料理を食べてみたいと感じた。



写真4 韓国の伝統料理

その先からは、韓国の冠婚葬祭の展示がされていた。結婚式の様子や、男児が生まれてくることを願うためのものや、還暦などのお祝いの様子、葬式の様子や法事でどのような式を執り行うのかというような展示だった。日本とは全く異なる文化もあったため、見ていてとても興味深く、新鮮に感じた。

また、光州の昔の様子を写した写真が展示されているコーナーや、博物館の外に出ると、韓国の伝統的な遊びを体験できるスペースも用意されており、大人も子どもも非常に楽しめるようになっていた。自分も体験したのだが、日本のすごろくに似たような遊びも微妙にルールが異なっていたので、文化の違いを肌で感じる事ができた。

4. まとめ

韓国では、近年でグローバル化が急激に進んでいるというようなことを聞いたが、この授業や三年生の授業などで早い段階で異文化理解を進めていくことで、韓国の高いグローバル化の意識が生まれるのではないかと考えた。また、日本でも、これからグローバル化が進んでいく中で、早い段階での異文化理解学習を進めていく必要性を感じた。

平成 29 年度 鳴門教育大学

グローバル教員養成プログラム 参加報告書

社会科教育プログラム ～社会科における主権者教育の国際比較～

鳴門教育大学 学校教育学部

学校教育教員養成中学校教育専修 社会科教育コース

学籍番号 14752116

氏 名 星出 諒太

1. 本研修の目的

日本と韓国の社会科の授業を比較し、よりよい主権者の育成につながるための授業の在り方について検討するとともに、両国の懸け橋となるような主権者の育成につながる方略を考えることを目的としたものである。

2. 研修期間

光州教育大学校での研修は、平成 29 年 11 月 23 日から 11 月 26 日まで行った。なお、27 日は移動日である。

3. 研修内容

①授業見学・検討会

(1) 6 年生の授業

6 年生の授業は、「世界の色々な地域の自然と文化」の単元の導入であった。授業は、イラストを見て疑問に思ったことから、子どもたち自身に問いを作らせ、グループ内で討論を行うという流れになっていた。そして、問いに対する答えを作らせ、実際にインターネットで調べ、発表し、クラス全体で共有するという授業展開であった。「ハブルタ」と呼ばれる年齢・階級・性別に関係なく二人がペアを組んで論争を通じて真理を探す手法を用いて授業が行われていた。このハブルタというものは、韓国の授業内では多く使われる学習手法であるようだ。教師は、授業内での子ども同士の対話を非常に重視していた。対話を通じて思考を高めることができ、常に対話を行うことのできる授業を意識していると授業後に先生はおっしゃっていた。日本でも次期学習指導要領では、アクティブ・ラーニングという学習法が示されるが、ハブルタは子どもたちを主体的・対話的で深い学びに誘うことができる学習法の一つなのではないのかと考えた。今後、日本においてもハブルタが学習法として示され、授業内において活用されることがあるのではないかと考えた。



写真 1：グループワークの様子

ここからは、授業の感想について述べていく。まず、1 番感じたことは、韓国は ICT が非常に発達しているという印象を受けた。授業内において、インターネットを有効に活用し、子どもたちは情報通信機器の扱い等に慣れているようであった。日本でも授業内において ICT は多く活用されていると思うが、それ以上に光州教育大学附属小学校では ICT が発達しているように思えた。

前に出て意見を発表する場面があったが、その際のプレゼンテーション能力の高さにも驚いた。どの子どもも堂々と発表しており、日本の子どもとの違いを感じた。ただ、日本の授業との共通点も感じた。例えば、導入の段階において、文字資料を活用するのではなく、写真やイラストなどの資料を活用することによって子どもたちの興味や関心を引くように心掛けているようであったが、この点は日本とも共通した考え方なのではないかと思った。また、子どもを主体としながら授業を展開しようとしていた点も共通している点なのではないだろうか。



写真 2 : クラス全体での共有の様子

(2) 3年生の授業

3年生の授業は、「アジアの色々な国の人々の生活の姿について調べ、発表する」ものであった。6年生も3年生も多文化教育に重点が置かれているものとなっていた。多文化教育は、一回で理解できる・完成するものではなく、「学習の積み重ね」が大切であると学んだ。日本における小学校社会科では、第3学年で身近な地域を学習する内容となっているが、韓国では、グローバルな視点を早期にもたせる教育が行われているのだと知り、非常に新鮮であった。



写真 3 : 授業導入の様子

今回は、ユネスコアジア広報大使に指定されていることもあって、第3学年という比較的早い段階でグローバルな視点を育ませる授業を行っていたそうだが、実際には身近な地域の学習も行っているということも分かった。3年生の授業でも6年生の授業と同様、子どもたちの対話が重視された授業展開となっていた。プレゼンテーションを通して、様々な国の文化について知り、

韓国の文化との共通点や相違点を子どもたちは見つけ出すことができていた。

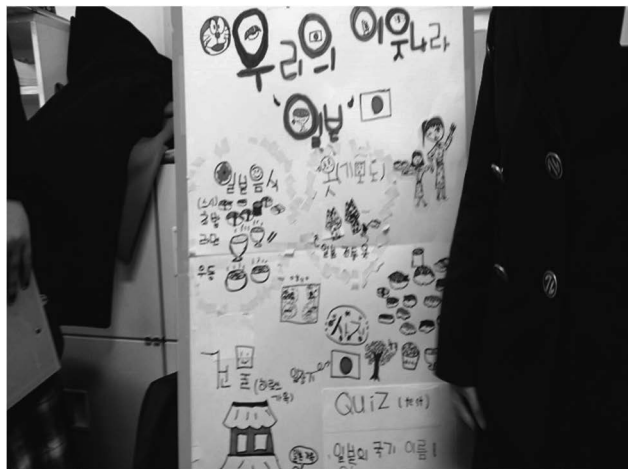


写真 4：児童作成パネル

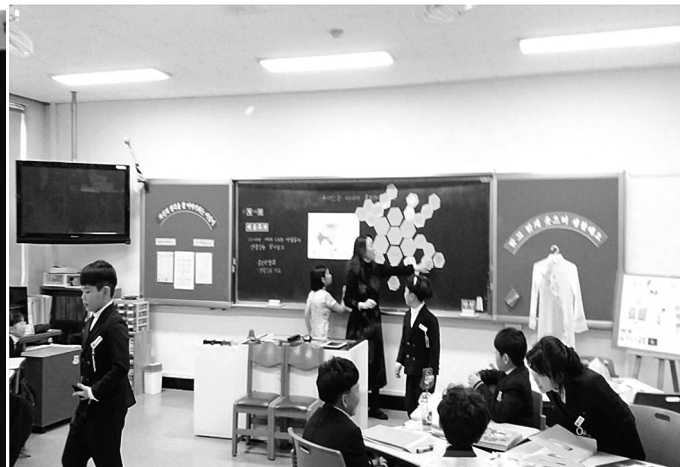


写真 5：授業まとめの様子

②フィールドワーク

（１） 5. 18 民主化運動記録館

まず、私たちは「5. 18 民主化運動記録館」を訪問した。5.18 民主化運動とは、1980 年 5 月、軍部勢力の執権への陰謀と虐殺の蛮行に抵抗した光州市民による抗争のことである。外部からの徹底した孤立の中で、無残に鎮圧された 5.18 民主化運動はその後、真相究明と責任者への処罰、被害者の補償、記念事業などへの要求は絶えず、全国的に 5 月運動によってついに勝利の歴史としての復活を遂げ、2011 年 5 月にはユネスコ世界記録遺産に登録された。アジアの様々な国の民主化運動に多大な影響を与え、民主化の過程で実施した真相究明や被害者の補償も他の国々の良い例となったという点で評価されている。



写真 1：5.18 民主化運動記念館

この施設では、今まで散乱していた 5.18 に関する記録物が統合的に収集・保管されている。5.18 の勃発と鎮圧を初め、基礎資料から文書、音響、口述、学術、文化的再現物、政府機関と軍事司法機関の資料、市民たちによる証言や記録、記者の写真と取材手帳、被害者たちの病院診療記録など、約 4200 冊、写真フィルムカット 3700 あまりの記録物が所蔵庫に永久に保存されている。5.18 民主化運動記録館は、人類の遺産である 5.18 記録物の保存だけでなく、研究や展示を通じて民主主義と人権教育の資料としても活用されており、5.18 の歴史的な価値と精神の共有にも取り組んでいる。



写真 2・3：パネル写真

今や私たちにとって、「民主化された社会」というのは当たり前のものという認識がなされている。写真等の資料から、私たちと同年代の若者や大学生が自由や平等・民主化を求めて命がけで運動した姿をリアルに伺い知ることができ、非常に心が痛んだ。このような歴史が韓国には存在しているということを日本人はあまり知らないのが現実なのではないだろうか。社会科教師になるものとして、日本の歴史だけではなく、世界の歴史にも興味や関心を子どもたちにもたせ、考えさせることが大切になるのではないかと改めて実感した。「民主主義」という概念について改めて考える良い機会になった。

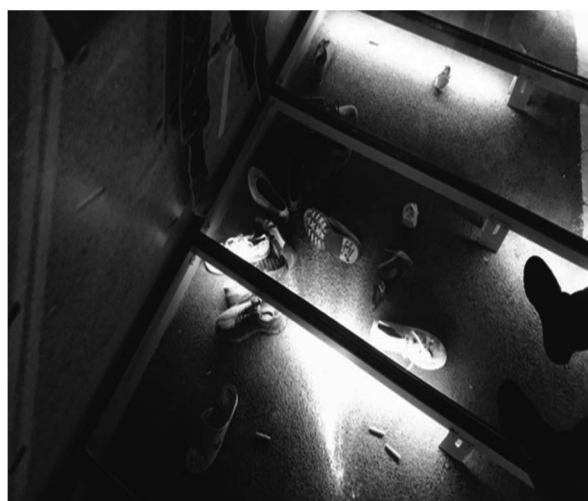


写真 4：現場再現展示



写真 5：道中にある展示写真

（2）旧全南道庁

1980年5月18日から27日にかけて軍部独裁の銃刀に立ち向かった光州全南の愛国市民らが自由と憲政守護を旨に、徹底した血の構想を繰り広げた場所である。



写真 6：旧全南道庁

（３）国立アジア文化殿堂

この施設は、民主平和交流院，文化情報院，文化創造院，子供文化院，そして芸術劇場の５つの施設から成る複合施設である。ここでは，美術だけでなく，音楽，デザイン，建築，映像・映画，パフォーミングアートといった多岐にわたったジャンルを網羅し，かつ，それらの展示・公演，作品収集，ワークショップやレクチャー，リサーチ，そしてアーカイブズ事業を行っていく。敷地も建物の面積もアジアで一番大きな文化施設であると言われている。

光州は歴史的にも文化的にも学ぶ場が多く，非常に勉強になる場所であることが分かった。



写真 7 ～ 9：国立アジア文化殿堂

4. まとめ

韓国では，近年でグローバル化が急激に進んでいるというようなことを聞いたが，この授業や三年生の授業などで早い段階で異文化理解を進めていくことで，韓国の高いグローバル化の意識が生まれるのではないかと考えた。また，日本でも，これからグローバル化が進んでいく中で，早い段階での異文化理解学習を進めていく必要性を感じた。

タイ王国

平成 29 年度 鳴門教育大学

グローバル教員養成プログラム 実施報告書

算数科・数学科教育プログラム

～ グローバルな視野を持つ算数科・数学科担当教員の養成を目的とする海外研修～

出張者所属・氏名

教員（2名）：	自然系コース（数学）	秋田 美代
	自然系コース（数学）	早田 透
院生（5名）：	自然系コース（数学）	大島 弘子（M1）
	自然系コース（数学）	茅野 友郎（M1）
	自然系コース（数学）	谷口 誠崇（M1）
	自然系コース（数学）	住田 幸平（L1）
	自然系コース（数学）	三木 崇正（L3）

用務地： タイ王国

用務先： コンケン大学

出張期間： 平成 29 年 12 月 4 日（月）～ 12 月 10 日（日）

1. はじめに

グローバルな視野を持つ算数科・数学科担当教員の養成を目的とする海外研修においては、本学と大学間交流協定を締結しているタイのコンケン大学との協働によって、両校の大学院生の教育・研究能力を向上させ、グローバルな視野を持つ算数科・数学科担当教員の養成を図る。

表1は、本海外研修のねらいを表す。

表1 本海外研修のねらい

国が異なっても学習内容の概念に違いはないという算数・数学の特性を生かし、タイの学生と日本の学生に協働で小学校算数科の授業を計画させて、タイの小学校で授業実践させることにより、算数科・数学科担当教員を目指す大学院生の「指導内容の本質を理解する力と授業実践力を向上させる」こと、「異なる言語や文化を持つ人々と協力して目標を達成する力を身に付けさせる」ことを目的とする。
--

2. 研修計画・研修内容

2-1 参加者・研修日程

①参加者

本研修は、自然系コース（数学）として実施するプログラムである。したがって、参加者について、教員はコース会議での相談、大学院生は自然系コース（数学）に所属する大学院生を対象として公募し、応募者に対して参加の目的等に関する英語による面接を行い決定した。

参加者は、次の通りである。

教 員：自然系コース（数学）・秋田美代
自然系コース（数学）・早田 透
大学院生：自然系コース（数学）・大島弘子（M1）
自然系コース（数学）・茅野友郎（M1）
自然系コース（数学）・谷口誠崇（M1）
自然系コース（数学）・住田幸平（L1）
自然系コース（数学）・三木崇正（L3）

②研修日程

コンケン大学での海外研修は、平成29年12月4日（月）から12月10日（土）の期間に行った。

表2は大学院生の海外研修日程、表3は教員海外研修日程を表す。

表2 学生の海外研修日程

順	月日(曜日)	業務地	業務内容
1	12月 4日 (月)	鳴門→関空 関空→沖縄 沖縄→バンコク (機内泊)	移動 高速バス 移動 MM217(関空発15:40→沖縄着18:05) 移動 MM989(沖縄発21:45→バンコク(スワンブーン) 着00:35)
2	12月 5日 (火)	空港間移動 バンコク→コンケン	移動 シャトルバス(スワンブーン→ドンムアン) 移動 FD3254(バンコク(ドンムアン) 発10:55→コンケン着12:00) 13:30-15:30 コンケン大学の院生との授業検討・模擬授業の実施
3	12月 6日 (水)	コンケン	9:00-10:30 コンケン大学附属サティット小学校における授業参観 10:30-12:00 コンケン大学で授業改善 13:00-15:00 コンケン大学の院生との授業検討・模擬授業の実施
4	12月 7日 (水)	コンケン	9:00-10:45 コンケン大学附属サティット小学校での授業実践・附属小学校教員との授業研究会 11:00-12:00 コンケン大学院生との授業研究会 14:00-17:00 交流活動(市内見学等)
5	12月 8日 (木)	コンケン	11:00-12:00 コンケン大学教員との本海外研修についての検討会 12:00-17:00 交流活動(市内見学等)
6	12月 9日 (金)	コンケン→バンコク (機内泊)	移動 FD3251(コンケン発08:45→バンコク(ドンムアン) 着09:35) 11:00-17:00 バンコク市内見学
7	12月10日 (土)	バンコク→関空 関空→鳴門	移動 XJ612(バンコク(ドンムアン) 発 01:15→関空着 08:45) 移動 高速バス

表3 教員の海外研修日程

順	月日(曜日)	業務地	業務内容
1	12月 4日 (月)	【秋田】 鳴門→関空 関空→バンコク	移動 高速バス 関空で院生の搭乗手続き確認 移動 TG673(関空発17:25→バンコク着22:00) バンコクで院生の到着確認
		【早田】 関空→羽田 (機内泊)	(北京から関空へ) 移動 TG6032(関空発21:05→羽田着22:15)
2	12月 5日 (火)	【早田】 羽田→バンコク	移動 TG661(羽田発00:20→バンコク着05:25)
		バンコク→コンケン	移動 TG2042(バンコク発10:15→コンケン着12:00) 13:30-15:30 コンケン大学の院生との授業検討・模擬授業の実施
3	12月 6日 (水)	コンケン	9:00-10:30 コンケン大学附属サティット小学校における授業参観 10:30-12:00 コンケン大学で授業改善 13:00-15:00 コンケン大学の院生との授業検討・模擬授業の実施
4	12月 7日 (水)	コンケン	9:00-10:45 コンケン大学附属サティット小学校での授業実践・附属小学校教員との授業研究会 11:00-12:00 コンケン大学院生との授業研究会 14:00-17:00 交流活動(市内見学等)
5	12月 8日 (木)	コンケン	11:00-12:00 コンケン大学教員との本海外研修についての検討会 12:00-17:00 交流活動(市内見学等)
6	12月 9日 (金)	コンケン→バンコク (機内泊)	空港で大学院生の搭乗手続き確認 移動 TG2042(コンケン発08:45→バンコク09:35) 11:00-18:00 バンコク市内見学・院生の搭乗手続き確認の後スワンナプーン空港へ
7	12月10日 (土)	バンコク→関空 関空→鳴門	移動 TG622(バンコク発 23:15→関空着 06:25) 関空で院生の到着確認 移動 高速バス

2-2 研修内容

①コンケン大学での海外研修のための準備

本学の大学院生は、10月初旬からタイで実践する教材の検討を始めた。タイと日本の教育課程の違い及び1時間だけの授業であることを考慮して、前提とする知識をあまり必要とせず、先の数学で役に立つ概念を獲得するための基盤をつくることができる教材を扱うことにした。

本学の窓口である大学教員とコンケン大学の窓口である教員が事前に打ち合わせを行い、コンケン大学大学院数学教育専攻において、コンケン大学教員が本プログラムに参加する学生を選考した。

本プログラムに参加したコンケン大学の大学院生は、次の10名であった。

Miss Chompoo Lunsak

Miss Nattida Nambuddee

Mr. Kumram Dechma

Mr. Apisit Suwannawong

Mr. Tanusak Binsri

Mr. Nipitphon Klawkrathok

Miss Natcharida Nararuk

Miss Watthana Thanomdee

Miss Phatcharida Laodim

Miss Duanpen Ardsom

コンケン大学の窓口である大学国際交流係ジャカラポン・トンパイ氏から10名の大学院生の紹介があり、本学大学院生は、メールでコンケン大学の大学院生に協働で授業小学校算数科の授業実践を行うことを依頼し、了承を受けた。

本学の大学院生5名とコンケン大学の大学院生10名は、11月初旬からコンケン大学での海外研修を行うまでの約1ヶ月間に、eメール又はskypeでのミーティングを重ねて情報交換、授業検討を行った。本学の大学院生は、コンケン大学の大学院生との協議に向け、週2回から3回のミーティングを行い、コンケン大学附属サティット小学校でどのような授業を行うと児童に算数を深く理解させることができるか、自分達の考えをどのようにすればコンケン大学の大学院生にうまく伝えることができるかを検討した。自主的ミーティングの結果を基に、コンケン大学の大学院生とeメール又はskypeで情報交換、授業検討を行うことで、機器を介していても指導内容・方法について共通理解できているようであった。skypeを用いたミーティングは4回を行い、その内容は、概ね次のようであった。

1) 第1回

まず、挨拶とお互いの自己紹介を行った。その後、本学の大学院生が、授業の目的を「数学において自律的に問題解決をするための素地を育成する」とし、題材として「図形の面積を求める際に重要な見方・考え方を獲得させることができる教材」を扱うことを提案した。

3年目の交流であり、本学の大学院生は過去の参加者からのアドバイスを受け、自己紹介

では各自の名前をプラカードに書いて映し、分かりやすくする工夫があった。授業の目標・内容は、本学の大学院生の説明がコンケン大学の大学院生にすぐには理解してもらえないところもあったが、授業で子どもたちに問うことを、コンケン大学の大学院生に質問しながら流れを説明することで、理解を促していた。互いに、分からないことは何度も聞き返したり、質問したりすることで、内容の共通理解を図っていた。

タイでは、面積に関連して、小学2年生で敷き詰めを学び、小学5年生で面積を学ぶというのを聞いて、実践を小学3年生で行うことにした。

2) 第2回

授業の準備物の確認とタイでのスケジュールを中心に検討した。授業の時に使う磁石等、コンケン大学又はコンケン大学附属サティット小学校で借りることが可能なものと日本から持参する必要があるものの確認を行った。

本学の大学院生が英語の学習指導案とワークシートを準備して、メールでコンケン大学の大学院生に送付した。送付した学習指導案は、大学院生同士の打合せで使用するものなのでタイ語に翻訳しなくてよいこと、ワークシートは小学生に配布するものなのでタイ語へ翻訳することを確認した。翻訳の作業をコンケン大学の大学院生に依頼した。

コンケン大学の大学院生から、コンケンでの滞在時間に行きたい所についての質問があり、コンケンでの日程を確認した。

3) 第3回

本学の大学院生は、事前に英語で作成した学習指導案をメールで送付し、それらを基に、授業で使用する教材と授業の内容、授業の流れを協議した。本学の大学院生とコンケン大学の大学院生は、いずれも英語は母国語としないけれども、英語で会話をしなければ意思疎通できないため、よりよい授業を実践するために、できるだけ授業内容や方法をシンプルにして話し合いをしようとしていた。それでも相手に自分の考えていることを相手に理解してもらえるように説明できない場面があり、コンケン大学の大学院生の中には英語が堪能な者が複数名いたことから。本学の大学院生は、授業の内容についてしっかりと話し合うために英語を身に付けておくことの大事さを痛感しているようであった。訂正した指導案は、次回のSkypeまでに送ることにした。

授業に関する話し合いの後で、本学の大学院生の詳細な日程・コンケンでの服装等についての確認を行った。詳細な日程、宿泊場所はメッセージで、コンケン大学の学生に送ることことにした。

4) 第4回

本学の大学院生は、事前に英語で作成した学習指導案と板書計画をメールで送付し、それらを基に、内容を協議した。学習指導案の変更点について確認をした。板書計画について説明し、板書の内容をタイ語に翻訳することを依頼した。また、ワークシートの印刷がタイでできるかについて相談をした。

コンケンについてからのスケジュールを確認し、本学とコンケン大学の大学院生が集まって研究討議と模擬授業を行う日程について調整した。本学の大学院生は、事前に英語で作成

した学習指導案と板書計画をメールで送付し、それらを基に、詳細に指導目標と授業の内容を協議した。訂正した指導案は、次回のSkypeまでに送ることを伝えた。

また、本学の大学院生の詳細な日程・コンケンでの服装についての確認を中心に行った。詳細な日程、宿泊場所はメッセージで、コンケン大学の学生に送ることとした。

skypeを用いた4回のミーティングを通して、本学の大学院生は、国による教育課程の違いはあるが、学ぶ概念の違いはなく、子どもが新しい内容を理解するためには、既習の内容を根拠にして正しさを説明しなければならないという手法にも違いはないことを実感しているようであった。また、授業では、教員が目標に照らして、子どもから引き出す考えを明確化しておくことが必要であると意識している様子が見られた。これらのことは、分かりやすく内容を伝えようとする態度や指導内容の本質を理解しようとする態度に表れており、算数・数学科担当教員として必要な資質を向上させることに繋がったと考えられる。

②コンケン大学での海外研修

1) 授業検討会

コンケン大学訪問前のskypeによるミーティングでは、実践授業のアウトラインのみの確認であったため、教材の使い方、発問と引き出したい児童の考え等について、本学の大学院生とコンケン大学院生で詳細な協議をして共通理解を図った。Skypeによるミーティングの場面と共通するが、意思疎通が難しい状況の中で、できるだけ相手に納得してもらえる意見を考えることが、本質を探り出そうとする意識にうまく繋がっているように思えた。価値観の違いがあり、多様な視点から授業内容についての意見交換がなされたが、子どもに何を理解させればよいか、どうすれば子どもに分かりやすいかという観点で一つの結論を出そうとしていた。多くの考えを基にして、皆が納得できる最善策を見出そうとする思考は、教員に必要なグローバルな視点であると考えられる。

2) 模擬授業

模擬授業を行い、授業展開や児童の活動についての詳細を決定した。授業を中心となっていく本学の大学院生と通訳を担当するコンケン大学の大学院生が教員役、それ以外の大学院生が児童役になり、模擬授業を行った。児童役の大学院生は、児童がもつだろう様々な反応を想定して、教員の質問に応えたり、活動を行ったりした。教員役の大学院生は、子ども役の大学院生から想定していなかった反応が返ってくると、とっさに対応できないこともあった。しかし、その反応は日本の児童であるから、あるいは、タイの児童であるから生じるものではなく、同じことで疑問や課題をもつのだと理解していた。タイの大学院生からは、タイの子どもたちの視点から、子どもたちが目標を達成できるか、発問の意図が子どもに伝わる表現かという点について、重点的に意見が述べられた。その、意見を全員で協議することで、授業の細かい点での修正が行われた。子ども役の大学院生述べる意見をうまく使いながら、授業の目的が達成できるように授業を修正し、児童に根拠をあげながら自分の考えを説明させることで、児童のより深い理解をつくろうとする様子が見られた。

模擬授業を通して、大学院生は算数の理解において国の違いはほとんどないことに気が付

いたようであった。このことは、算数・数学担当教員が指導を行う際に、概念形成を中心にした授業構築のために、重要なことである。

3) 授業参観

コンケン大学附属サティット小学校を訪問し、翌日、授業実践を行う第3学年の算数の授業を参観した。授業の題材は、あまりのある割り算であった。授業はタイ語で行われているので、タイの大学院生がタイ語から英語への通訳をしてくれた。教員が何を発問しているか、児童が何を応えているか質問しているかは正確には分からないところはあったが、黒板やノートに記述される数や式を見ると、授業の大筋は理解できることから、本学の大学院生は、数学は世界共通であることを実感していたようであった。その上で、本時の授業がどのような目標を持って行われているか、子どもの発言や記述内容から目標を達成できたといえるかを、検討していた。

4) 授業実践

コンケン大学附属サティット小学校の第3学年において、「図形の面積」を題材として、数学において自律的に問題解決をするための素地を育成する授業を実践した。タイの児童は、まだ、面積について学習していなかったが、正方形のいくつ分かを問うことで、単位面積のいくつ分かという面積の基本概念は学ぶことができるので、授業に支障はなかった。

授業では日本の大学院生が英語で授業を進めたが、児童が理解できるようにコンケン大学の大学院生がタイ語で通訳して授業を進めた。児童は小さな正方形を1として数えることは問題なく行えたが、大きな正方形全体を1と考えることができにくい様子が見られた。何を1として見るのかということについて、クラス全体で共有する等の丁寧な指導があると、子どもに分かり易かったと考えられる。図形の形が複雑になるにつれ、比べたい図形のいくつ分かを自分で思考できにくい児童が増えた。前の問題で使ったことを次の問題に活用することができる児童は少なかった。前の問題と現在解決する問題の共通性を意識させる場面をどのように構成するかが課題である。

授業者以外の大学院生が助言や指示を与えてサポートすることができていた。授業の目標達成のために協働して取り組めたことは、教員になったとき組織の一員としての自覚を持つことに繋がると考えられた。責任感をもって主体的に取り組むための強い動機となっていた。授業の目標・内容はよくても、問いが適切でなければ児童に分かりにくい状況をつくってしまうということを、メンバー全員が意識したようであった。言葉の壁があるからこそ、教えたいことの焦点を明確に捉えなければ、目標は達成できないことに気づきやすかったと考えられる。数学という世界共通の言語を扱う教科は、グローバルな視点を持った教員の養成という観点から、海外で授業実践を行うことの意義が大きい教科であると考えられる。

5) 授業研究会

コンケン大学附属サティット小学校教員、コンケン大学の大学院生とそれぞれ授業研究会を行った。目標の達成、授業における問題点、問題点の解決策、授業の発展、今回の協働的な取り組みという5つの観点について、院生、教員が各々の意見を述べ合った。

目標の達成については、児童の活動の様子から、図形の面積の概念の素地を身に付けるこ

とができ、概ね達成できていたと判断された。授業における問題点としては、教員が教えずぎる場面、授業の内容についてコンケン大学附属サティット小学校教員と共通理解ができていない点があり、こちらの意図とは違うアドバイスが児童に与えられていたことが話し合われた。また、もう少し明確な指示があれば、児童自身の発見や創造が増えたのではないかという意見があった。教員は児童に分からせたいという思いから、つい児童にじっくりと考えさせる前に自分が話してしまうことがあるので、教員は必要最小限の発言にとどめ、できる限り児童に発言させるということを意識しなければならないという意見があった。

6) 院生同士の交流

昨年・一昨年と同様に、コンケン大学で本プログラムに参加した大学院生が、空港での出迎えから最終日の空港での見送りまで、日本の訪問団が快適に動けるように、手厚くサポートをしてくれた。コンケン大学訪問前のeメールやskypeによるミーティングを通じて交流してからの訪問であるため、出迎えてくれた時点で大学院生同士は打ち解けた間柄になっている。さらに、協働で授業実践をすることにより、同じ目標を協力して達成しようとする意識が益々高まり、密度の濃い交流が実現できた。

3. 海外研修プログラムの効果

海外研修プログラムを実施した成果として次のことが確認できた。

- ・授業で最も重点を置かなければならないポイントに照らして、教具は数学として何を理解させるために使うかをしっかりと思考できるようになった。
- ・分かりやすく内容を伝えようとする態度や指導内容の本質を理解しようとする態度が育成された。
- ・算数の授業で学ぶ概念は国による違いはなく、児童に理解させるべきことは共通であると認識できた。

これらのことから、双方の大学院生が協働で算数の授業を計画し、コンケン大学附属サティット小学校で授業実践を行うことを通して、双方の大学院生とも算数・数学の指導内容、教材、指導方法等について深く考えることができること、日常で使う言語が異なる国の大学院生が協働で算数の授業を構築しなければならない状況の中で、双方の大学院生とも算数科・数学科の指導内容の本質を理解することの重要性に気付くことができることが分かった。

コンケン大学側からは、国際的な授業研究・事業実践であり、今後の継続についての確認があった。大学院生の発言からは、算数・数学の授業においては、学習者の学習活動の中でどのような性質に焦点を当てなければならないのかは、国が違っても同じであることに気が付いていることが分かった。外研修プログラムは、グローバルな視点を持った教員を養成するうえで効果が高いと判断できた。

4. 今後の課題

- ① コンケン大学からの要望について

本年で本海外研修プログラムが3年目を迎えた。これまでは、本学の大学院生がコンケン大学を訪問してきたが、コンケン大学から大学院生を派遣したいという申し出があった。日本とタイの物価の違いから、高島会館への宿泊に関する鳴門教育大学からの資金補助について依頼があった。コンケン大学は、数学コースの本プログラムだけではなく、日本語コースのプログラム、学部生2年生の海外実習等を受け入れてくれ、本学の教育活動に多大な貢献の実績がある。金額的にはあまり大きなものではないので、持続可能な国際教育協力を行う意味から、コンケン大学の要望を叶える方向で検討することが望ましいと考えられる。

② 海外研修プログラム参加費の補助について

本年度、海外研修プログラムに参加する大学院生に対して、5万円の補助を付けていただいた。参加した大学院生の中には、学修時間の確保のためにアルバイトをしていない者もいたため、院生はLCCを利用した移動であった。安全面のことを考えると、引率教員と同じレガシーキャリアに搭乗して欲しいが、無理は言えないため、空港で大学院生の搭乗手続きが完了したことや到着確認を行った。自前で旅費・宿泊費等を用意することでよいが、大学の中で自己の教育能力・研究能力を高めながら研修資金を準備できるような補助業務制度の確立が望まれる。

③ 組織・事業の整理

現在、社会や学生のニーズに合わせるということで様々なプログラム・事業が実施されている。人的・予算的に限りがある中で、効率的な教育・研究活動ができるように検討することが必要である。

平成 29 年度 鳴門教育大学

グローバル教員養成プログラム 参加報告書

算数科・数学科教育プログラム

～ グローバルな視野を持つ算数科・数学科担当教員の養成を目的とする海外研修～

鳴門教育大学大学院 学校教育研究科
教科・領域教育専攻 自然系コース（数学）
学籍番号 17817042
氏 名 大島 弘子

1 本研修の目的

コンケン大学院生と協働で、算数科授業実践を行い、院生同士の研究交流を深めることにより、グローバルな視点をもった人材としての資質を養うこと。

2 研修期間

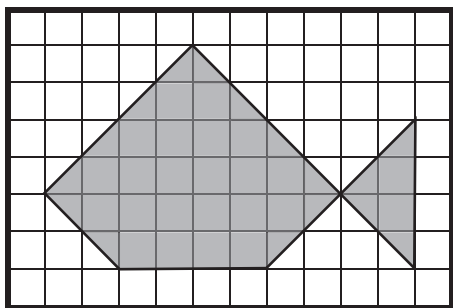
平成29年12月4日（月）～12月10日（日）

3 タイに行くまでの活動

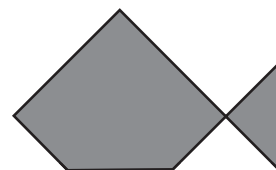
3.1 教材開発

今回の授業では、子どもたちが自律的に問題解決できる授業を考察し、実践した。題材は、子どもたちが図形の面積を考える上で素地となる見方を獲得するための授業を目指し、次の教材を開発した。敷き詰めを2年生で学び、面積を5年生で学ぶので、対象学年は3年生とした。

問題1 外側の大きな長方形は、色がついたところのいくつ分ですか。



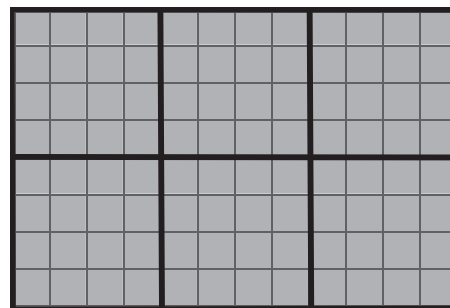
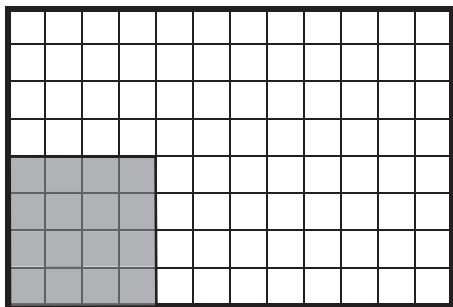
課題は、左の問題1「外側の大きな長方形は、色がついたところのいくつ分ですか。」である。子どもたちは、この



(図1: 子どもの捉え方)

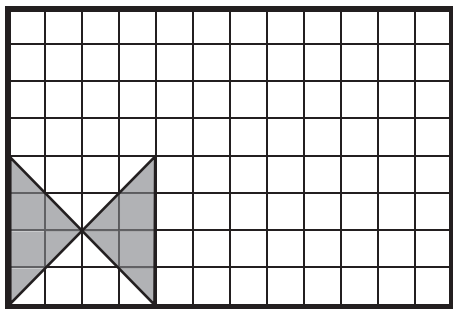
問題を図1のように、魚のような図形と認識し、答えがすぐに分らないと予想できる。そこで、子どもたちが既習の知識を認識するための問題2を設定した。問題2は色がついた図形がそのままの状態、外側の長方形と比べられる形であるため、子どもたちはすぐに答えが分けると予想できる。(図2)

問題2 外側の大きな長方形は、色がついたところのいくつ分ですか。

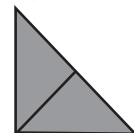
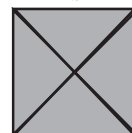
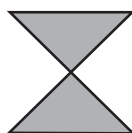


(図2: 子どもの捉え方)

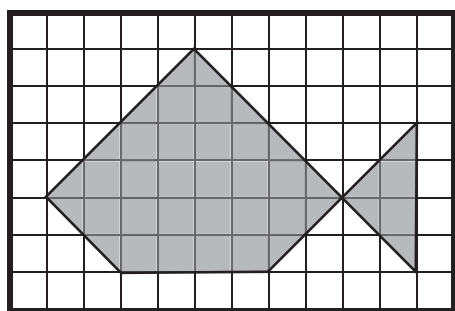
問題3 外側の大きな長方形は、色がついたところのいくつ分ですか。



次に、問題3として左の形を提案した。この形は、そのまま、並べるだけでは答えが分らない。しかし、子どもたちは、向きを変えて並べたり、問題2の正方形を作ったり、正方形の半分の三角形を作ったりすることによって答えを出すことができる。このように、様々な捉え方をしやすい図形を設定する。(図3)

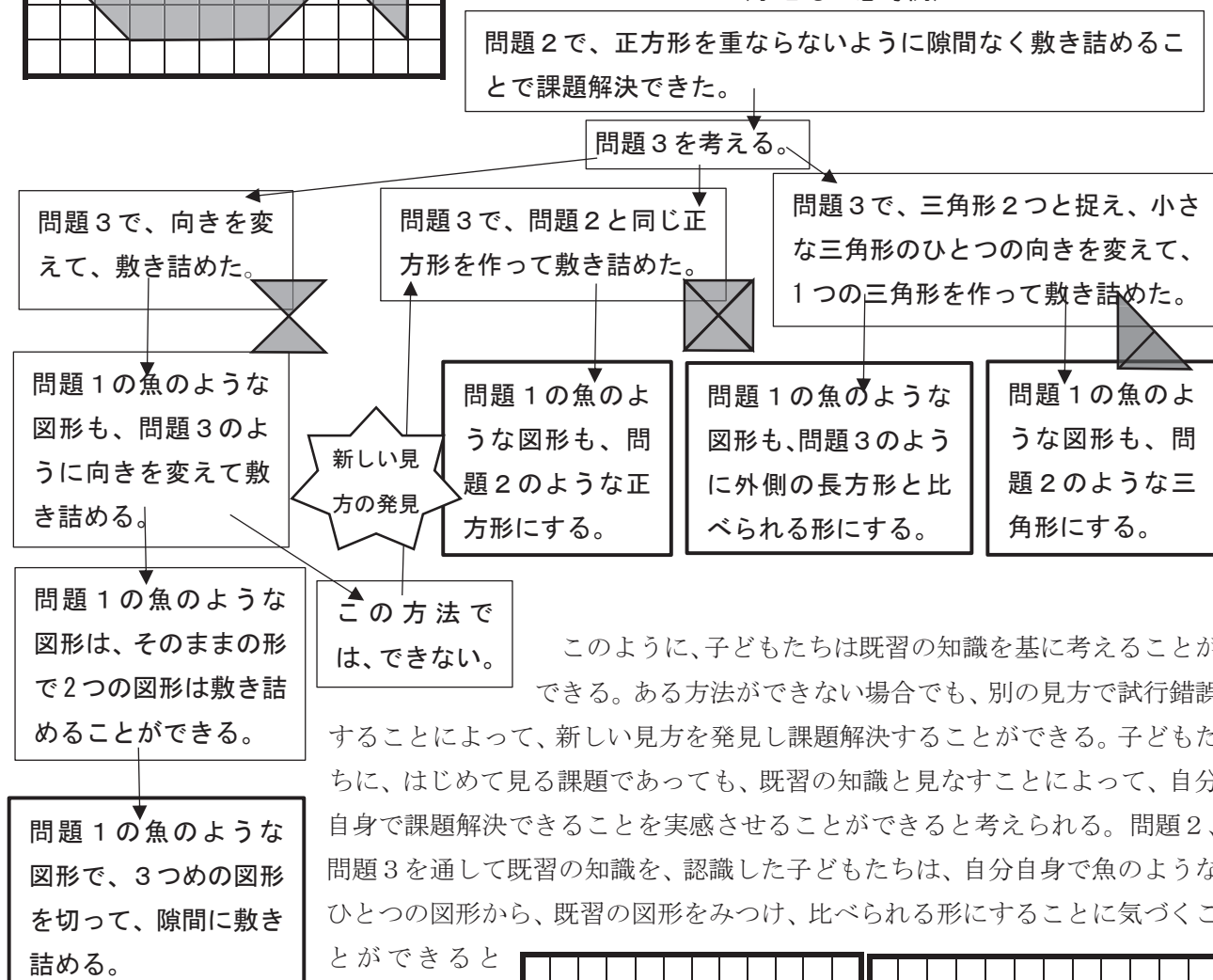


(図3: 子どもの捉え方)

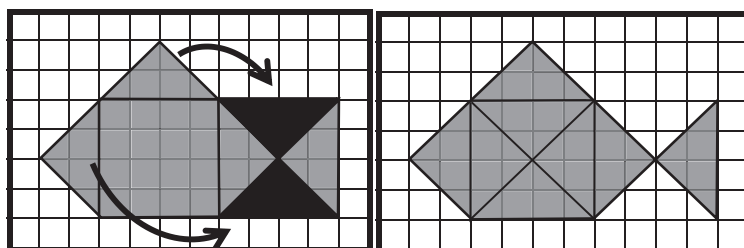


問題 2、問題 3 を解いたあとに再び問題 1 を考えさせる。問題 2、問題 3 で既習の知識を引き出しやすい状態になっている子どもたちは、問題 2、問題 3 は、なぜ解くことができたか、自分自身で試行錯誤し、考えることができる。

(子どもの思考例)



このように、子どもたちは既習の知識を基に考えることができる。ある方法ができない場合でも、別の見方で試行錯誤することによって、新しい見方を発見し課題解決することができる。子どもたちに、はじめて見る課題であっても、既習の知識と見なすことによって、自分自身で課題解決できることを実感させることができると考えられる。問題 2、問題 3 を通して既習の知識を、認識した子どもたちは、自分自身で魚のようなひとつの図形から、既習の図形をみつけ、比べられる形にすることに気づくことができる。授業後には、子どもたち図 4 のように魚のような形を自分の知っている比べられる形を見出すことができることを期待できる。



(図 4 : 授業後の問題 1 の子どもの捉え方)

3.2 タイに行くまでの活動スケジュール

10月18日	教材決定	11月21日	教材検討、模擬授業
10月21日	日程決定	11月22日	スカイプ会議（小学校での服装について、指導案、飛行機のスケジュールを送る）
10月24日	研修の目的について	11月24日	黒板用教材制作、板書計画

10月25日	航空券購入	11月25日	
10月31日	授業内容について	11月28日	スカイプ会議（授業で使うものについて、指導案の変更、板書計画の翻訳、タイでのスケジュールワークシートの印刷について）
11月1日	教材検討、タイでのスケジュール	11月29日	模擬授業、教材検討、教科書での確認、教材の英語表現について
11月7日	対象学年の決定、教材検討、指導案、ワークシート作成、スカイプ会議（あいさつ、自己紹介、教材紹介、学年、人数）	11月30日	模擬授業
11月14日	教材検討、ワークシート作成	12月1日	模擬授業
11月15日	教材検討、スカイプ会議（授業の詳細について、授業時間について、ワークシートタイ語翻訳）	12月4日	出発

3.3 スカイプ会議

鳴門教育大学、数学コースの院生室とコンケン大学をスカイプでつなぎ、授業などについての話し合いを行った。私は、英語が苦手なので初日は特に緊張したが、はっきり、ゆっくり、何度も繰り返し伝えることで、なんとか意思疎通ができた。コンケン大学の院生のみなさんも、優しく、そして根気強く聞こうとしてくださったので、次第に緊張もほぐれ会話できるようになった。お互いが、聞こうとすることと、伝えようとするのが意思疎通において何より大切だと感じた。タブレットの画面に映っている画像は、映らなかったり、反転したりするので、スライドをスカイプで活用する工夫などをする必要があると感じた。また、Facebook の Messenger も活用し、コンケン大学と鳴門教育大学の院生全員で情報共有を行った。

3.4 準備物

・黒板に掲示する教材（変更に対応できるように多めに用意） ・はさみ ・のり ・セロハンテープ ・紙に貼るマグネット・USB（ワークシートのデータ）・チョーク ・ペン

そのほかにも、お土産や感謝の気持ちを伝えるための色紙を作るための準備を持参した。授業内容をより正確にタイの学生に共有していただくためにも、授業で扱う内容の書かれた英語の教科書のページを印刷し持参したほうがよい。

4 現地での活動

4.1 活動詳細

12月5日（月）1日目〈コンケンに到着〉

12:00 コンケン空港到着。
コンケン大学へ。軽食を済ませる。
13:30 模擬授業、ディスカッション。
15:30 ホテルへ移動
20:00 ホテルにて授業について検討会

4日の15:40に関空を出発し、沖縄とバンコクを経由して5日の12:00にコンケンに到着した。コンケン空港では、コンケン大学の院生が出迎えてくださった。13:30から、あいさつと、自己紹介の後、日本からのお土産を渡す。模擬授業で流れを確認しあった。ワークシートの問など、子どもたちが誤認識しないような発問であるか、確認をとった。

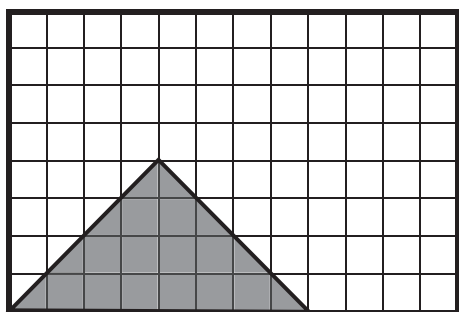
しかし、授業の意図を伝えることはかなり難しかった。「敷き詰める」という言葉を理解してもらえなかった。関連する英語の教科書などを準備しておくなど、できる限りの伝える工夫が必要だと感じた。また、どこが最も重要ポイントであるかを伝えられるようにしておくことも必要だと感じた。ホテルで、私たち鳴門教育大学の院生で再び授業の流れについて検討した。

12月6日（火）2日目〈附属小学校を視察〉

8:40 ホテル出発
9:00 コンケン大学附属サテライト小学校へ。
小学校の先生方にあいさつと自己紹介。学校紹介の後、翌日授業する3年生の算数の授業の様子を視察。
10:30 日本の学生だけで授業改善。
12:00 昼食
13:00 コンケン大学の院生とディスカッション。
15:00 ワークシート、教具の最終確認。
20:00 ホテルにて教具の作成。授業の最終確認。

コンケン大学附属サテライト小学校を訪問し、小学校の先生方にお会いし、タイの教育についてのお話を伺った。サテライト小学校の学力はフィンランドの学力と同じぐらいで、タイの中では、かなり高い水準にある学校であるということ伺った。今回の私たちの授業に対する期待の強さを感じた。私たちからは、今回の授業の目的と、授業の流れについての概略を説明させていただいた。授業の目的や授業の流れについて、先生方や学生たちに、しっかり説明できることが必要である。そのためにも、目的や意図をしっかり認識しておくことが重要であると感じた。

問題3（変更後）



小学校の視察では、子どもたちはとても元気が良く活発な様子がうかがえた。視察した算数の授業は、わり算のあまりについてであった。

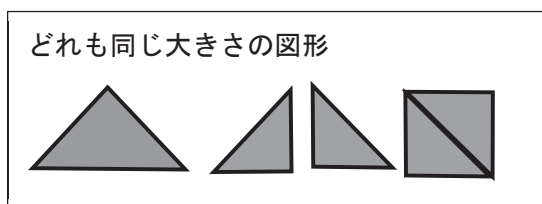
授業改善では、問題3について、より子どもたちが「知っている形に見なす」ことを意識できるようにするために形を再考した。また、問題の誤認識が起きないようにすることを念頭に授業の流れを再検討した

1 2月7日（水）3日目〈授業本番〉

8:15 ホテル出発
9:00 授業本番
10:00 小学校でリフレクション
11:00 大学でリフレクション
午後から昼食・観光（モール・寺院・お土産屋）
20:00 色紙作り

小学校3年生、36人の子どもたちに授業を行った。自己紹介後、さっそく問題1の魚のような形を子どもたちに見せ「外側の大きな長方形は、色がついたところのいくつ分ですか。」と質問し、子どもたちに予想させた。「2, 3, 4, 5, 6…」と様々な予想が出た。次に問題2をみせた。問題の誤認識を防ぐために、図形が重なった状態や、図形の間に空白がある状態では、長方形と比べることができないことを子どもたちと

確認したあとに、子どもたちにワークシートを配布した。子どもたちはワークシートに書き込み、実際に手を動かし確認しながら問題を解いた。想定外だったことは、問題2で間違えている子どもが予想より多かった。間違っている子どもに対しては、私たち日本の院生やコンケン大学の院生や、先生が個別に問掛け、問題をしっかり認識させ再び子どもたちに考えさせた。その後、全体で考えを共有した。問題3では授業者が、問題2のときのように図形を敷き詰めようとしたが、そのままの状態では敷き詰めることができなく困った様子を見せた。その様子をみて子どもたちが助けるという形ですすめた。このときに、子どもたちが形を切ることによって比べられる形にできることに気づき認識する。このときし、何人かの子どもたちから「形を切ってもいいのか」という質問が出てきた。ここで、授業者は子どもたち全員に



(図5)

形を切ってもいいのかを訪ねた。半分より少し少ない人数の子どもが形を切ってはいけないうに賛同した。ここで、切ってもいいと手を挙げた子どもが、前で全体に説明した。(図5)そして形を切って、異なる形になっても大きさは同じであることをクラス全体の子どもに共有した。その後、問題2を別の方法で解くことを考えさせた。想定外だった

ことは、他の方法を考えることができていた子どもが少なかったことである。それでも、クラスの3分の1程度の子は、他の方法を見つけていた。いくつかの方法を子どもたちが発表し、切って形を変えても同じ大きさであることをクラス全体で再認識した。子どもたちは、問題2、問題3を通して既習の知識を認識した後、再び問題1を考えた。予想以上に問題1を解けていた子どもは少なかった。

リフレクションでは、授業を見てくださった小学校の校長先生や教員らから、今回の授業についてのコメントをいただいた。「数学教育の課題に立ち向かう挑戦的な授業だった」とコメントを頂いた。授業を通して、数学教育の国際的な課題である「教員が与える数学教育」から「子どもが自分で考える教育」の在り方について、共有し理解が深められたと思う。

1 2月8日（木）4日目〈振り返り・観光〉

10:40 ホテル出発
11:00 授業・プログラム振り返り（教授たちと）
午後～昼食・観光
（タイ料理・博物館、寺院、お土産屋）
夕方～日本語コースの学生と数学コースの院生と
ナイトマーケットへ（Ton Tam Market）

午前中は、コンケン大学の教授たちと今回の授業に関してと、数学教育などに関して話し合った。日本の教育課題も世界の教育課題も同じであると感じた。午後から、コンケン大学附属の博物館と寺院を視察した。夕方から、コンケン大学の教育学部日本語コースの学生と数学コースの院生とTom Tam Marketで食事をした。タイの食べ物や

屋台、その他様々な話ができタイの文化に触れることができたとともにタイの学生や院生と仲を深めることができた。

12月9日（金）5日目 バンコクへ

コンケンからバンコクに移動し、帰りのフライト時間まで、バンコクを散策した。

4.2 授業の課題と改善方法案

今回は、私たち授業者が図形を「切る」という方法を見せることに集中しすぎた可能性がある。そのため、子どもたちは問題2と問題3の関係性を見出すことはできず、全く別物の問題であると捉えた可能性が高い。問題3で解くための方法を見せるのではなく、「比べられる形を見出す」ことをもっと意識させる必要があった。そのために、問題2の正方形と、問題3の三角形には、どのような関係があるか、子どもたちにつかませることが重要である。子どもたち自身で課題解決できる授業を作るためには、子どもたちが初めて見る課題の前に、既習の知識をつかませるための課題を設置する。この既習の知識をつかませるための課題で、子どもたちが自分自身で数学の関係性をつかむことのように設置することが重要である。そのためには、教員が、子どもたちに授業でつかませたいことは何か明確に認識しておく必要がある。

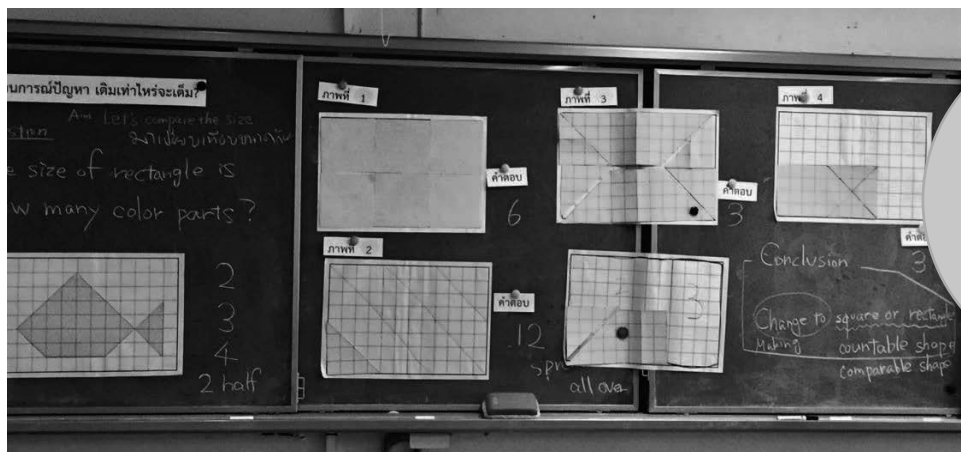
また、子どもたちにとって図形を頭の中だけで動かすことは、少し難易度が高かったように思われる。児童観を意識して、教材を作る必要がうると感じた。特に、今回はワークシートに形の動く様子を書き込めるようにするなど、子どもの理解度をできる限り予測して作成する必要があったと感じた。私たちは現場での授業の経験の少ないので、できるだけたくさん模擬授業を行い、児童観に気付けるようにできればより良かったと思う。黒板の教材は、実際に切るなどできたので、子どもたちは図形を変形した後の形をととても認識しやすかったと思う。以上のことを活かして、これからもよりよい授業をつくっていく。

4.3 学生との交流について

スカイプでの交流を通して、実際に会うのがとても楽しみになっていった。はじめは、どちらの院生も少し緊張ぎみではあったが、積極的に話かけていくことで、徐々に打ち解けていった。来年も、よりよいものを一緒に作っていくことを約束した。

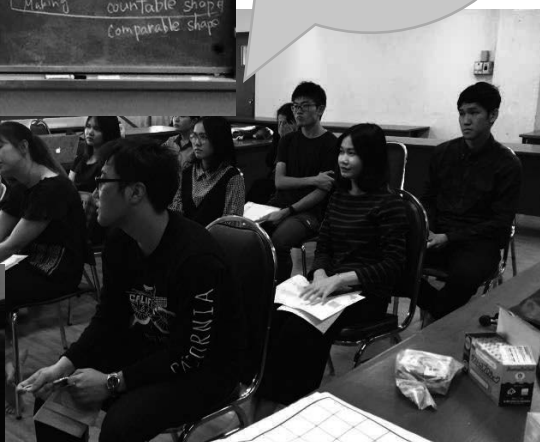
5 研修のまとめ・感想

日本語に頼ることのできない環境であったからこそ、世界共通言語である数学の本質を子どもたちに理解させるためには、子どもたちが数学の何をつかむ必要があるのか、はっきり理解することができた。どのような環境であっても、教員は授業の中で、子どもの中の既習となるモデルをしっかり認識し、子どもたち自身で既習の知識で新しい課題解決できることを意識させる必要があることを学んだ。また、子どもたちが既習の知識を認識していけるようにするためには、子どもたちの様子をみて臨機応変に対応することも大切なことだと学んだ。今回の授業のように、子どもたち自身が数学の本質的なおもしろさである「既習の知識で、新しい課題を自分自身で解決する」ことをつかむことによって、自律的に問題解決できる力を育成する数学が実現できる。この経験を今後の研究や授業に役立てていき、数学で子どもたちにとって変化の激しい時代を生き抜くための力を育成していきたい。

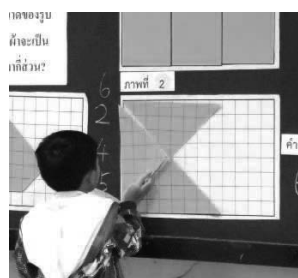
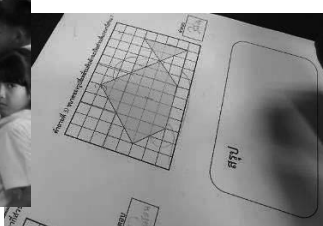


コンケン大学院生と
鳴門教育大学院生で
授業について
ディスカッション

小学校の先生方と数学教育についての情報共有



授業本番



平成 29 年度 鳴門教育大学

グローバル教員養成プログラム 参加報告書

算数科・数学科教育プログラム

～ グローバルな視野を持つ算数科・数学科担当教員の養成を目的とする海外研修～

鳴門教育大学大学院 学校教育研究科
教科・領域教育専攻 自然系コース（数学）
学籍番号 17817067
氏 名 茅野 友郎

1. 本研修の目的

コンケン大学生と協同で、算数科授業実践を行い、院生同士の研究交流を深めることにより、グローバルな視点をもった人材としての資質を養うこと。

2. 研修期間

平成 29 年 12 月 4 日(月)～平成 29 年 12 月 10 日(日)

3. タイに行くまでの活動について

3.1 日本での授業作り

タイで授業をする上で注意した点は 2 点ある。1 つ目はできるだけ題材はシンプルであること。2 つ目は何を学ばせたいかを明確にした授業。タイで授業をする上で言語や文化の違いがあるので言葉で伝えることは難しいと考えた。そこで言葉の説明の少ない図形での授業作りを考え始めた。私たちは図形を用いて「見えないものを見えるようにする。」ことをタイの子供たちに身に付けてもらいたいと考え授業作りを行った。

まず、私たちは最終問題を「この魚の形いくつ分で大きな長方形をぴったりと埋めることができるか。」として授業作りを行った。魚の形を敷き詰めて問題を解決することは難しい。そこで子供たちが問題の図形を切ったり貼ったり動かしたりし、知っている図形を作ることで問題が解決できることを授業の中で身に付けてもらいたいと考えた。

いきなり魚の図形を考えるのは難しいのでこの問題を考える上で必要な操作、動かす、切る、貼るを最終問題までに身に付けてほしいと考え授業の流れを考えた。一問目は同じ図形をそのまま敷き詰めると問題が解決できるような問題にした。

二問目以降は敷き詰める方法で問題を解決できない問題を出すことで、動かす、切る、貼るを考えさせ、最終問題を解くための素地を作ろうと考えた。この問題作りは特に苦勞し、議論した。

また、指導案、ワークシートを作る上で日本語から英語への翻訳も特に苦勞した。英語版の算数の教科書を参考にしたりし議論を行った。

3.2 コンケン大学の学生の方との打ち合わせ

コンケン大学の学生の方と自己紹介、授業に対する共通理解、授業の構成・準備、タイでの予定の確認等を事前に行った。事前の打ち合わせは、Skype、メッセージ、メールを使用した。主に Skype で行った。Skype を行った日程と内容を以下に示す。

・平成 29 年 11 月 7 日(火) 第 1 回目

第 1 回目の打ち合わせはコンケン大学、鳴門教育大学の学生の自己紹介、授業の目標、おおまかな授業の流れを説明した。自己紹介は自分の名前を英語で書いたプラカードを作っておいたのでスムーズに行えた。授業の目標を伝える際、なかなか相手に伝えることができ

ず苦勞した。何度も話す人を変えゆつくりと大きな声で伝えることで伝えることができた。授業の流れは問題を出してコンケン大学の学生の方に答えてもらう方法で説明を行った。授業をする学年も伝え共有した。今回の **Skype** までに指導案を送るなどして授業の詳細を伝えることをした。分からないことは何度も聞き返したり何度も質問したりすることでうまくコミュニケーションが取れることができた。

・平成 29 年 11 月 15 日(水) 第 2 回目

第 2 回目の打ち合わせは授業で使用する物の確認とタイでのスケジュールの確認を行った。授業で使用する物を貸していただけるかのお願いをした。指導案とワークシートを今回の **Skype** までに送ったものを指導案はタイ語に翻訳しなくてよいことと、ワークシートはタイ語への翻訳してもらうことをお願いした。またタイでの滞在時間、タイで行ってみたいところなどを聞かれ、タイでのスケジュールの確認を行った。

・平成 29 年 11 月 22 日(水) 第 3 回目

第 3 回目の打ち合わせは鳴門教育大学の学生の細かいスケジュールと服装についての確認を行った。スケジュール、ホテルの場所をメッセージで送ることを確認した。また訂正した指導案を次の **Skype** までに送ることを伝えた。

・平成 29 年 11 月 28 日(火) 第 4 回目

最後の打ち合わせはワークシート、指導案の変更と翻訳のお願い、詳しいタイでのスケジュールの確認を行った。指導案の変更とワークシートを送ることを伝え、ワークシートをタイ語に翻訳することをお願いした。またタイでの詳しいスケジュールを伝えてもらったので、現地での活動の流れを確認できた。

授業に関する指導案やワークシートは主にメッセージを用いてやり取りを行った。指導案を送るのを忘れたり、**Skype** の日時を間違えたりし、迷惑をかけることが多々あった。**Skype** を通して、私自身の英語能力の低さを実感した。しかし、顔を見て身振り手振りなどでお互いにコミュニケーションをとることで現地でスムーズなやり取りをすることができたので大変貴重な打ち合わせであった。コンケン大学の学生の方は 10 人いたので **Skype** で全員とはやり取りはできなかった。

4. 現地での活動

4.1 タイでのスケジュール

・研修 1 日目 平成 29 年 11 月 5 日(火)

模擬授業

授業についてのディスカッション

・研修 2 日目 平成 29 年 11 月 6 日(水)

小学校訪問・授業見学

授業についてのディスカッション

教具作成

・研修 3 日目 平成 29 年 11 月 7 日(水)

授業実践

小学校の先生方と反省会

タイの学生方と反省会

コンケン観光

・研修 4 日目 平成 29 年 11 月 8 日(木)

コンケン大学の教授の方と懇談会

コンケン観光

4.2 授業についてのディスカッション

研修 1 日目 コンケンに到着してすぐにコンケン大学で模擬授業を行った。Skype や指導案で十分伝えきれなかったため様々な質問や疑問があった。日本語と英語という言語の壁もありコンケン大学の学生の方にこちらに意図を伝えることは難しいと実感した。模擬授業をする中で今までの話し合いの中で出てこなかった問題点が出てきた。模擬授業を通し、時間配分や質問、私たちが最終的に身につけさせたい目標を再確認する必要があると認識することができた。ディスカッションにより問題と最終的に身につけさせたい目標を少し変更した。

研修 2 日目 最終的な授業の流れを確認した。その中で最終的に身につけさせたい目標が少し変更したため変更点をコンケン大学の学生の方に理解してもらうのに苦労を感じる場面もあった。問題を変更したため教具も新しいものを作製を行った。英語からタイ語への翻訳を考える中で言葉の違いの難しさを感じた。

4.3 授業実践

研修 3 日目 授業の雰囲気も良く、楽しくスムーズに授業を進めることができた。子供たちは元気がよく、多くの子が発言をしてくれた。私は、子供たちにワークシートを配ったり、子どもたちのサポートを行った。授業の様子は前半は積極的に手をあげ発言する場面があった。サポートをする中でアドバイスをしたつもりが間違っているとえられてしまいミスリードをしてしまった場面があった。アドバイスの仕方も改善する必要があると感じた。前に座っている子供たちは最後までしっかり考えてくれる子が多くいたが後ろに座って

いる子供たちは最後には集中力がなくなっている子がいた。今後の課題としては、ワークシート、具体的な指示の仕方について改善する必要があると考えた。

4.4 コンケン大学の学生との交流

コンケン大学の学生の方と様々な交流をした。学生の方はテスト期間で忙しかったということもあり研修最終日まで会うことの出来なかった学生の方もいた。この研修期間中は空港までの送迎も含め常に私たちのお世話をしていただきました。私は、英語に不安がありましたがつたない英語でも一生懸命コミュニケーションをとってくれた。また、タイ語を教えていただいたり、逆に日本語を教えたりとお互いの言語の文化に触れることができた。コンケン観光の際、分からないことがあれば詳しく説明してくれました。

言語が違うためコミュニケーションをとることに苦労しましたが、お互い一生懸命伝えたり聞き取ろうとすることが重要だと再認識した。

5. 総括

今回の研修を通じて学んだことはとても多かった。まず、シンプルな授業作りが大切だと実感した。シンプルな授業作りをしっかりと日本で作るべきであったと考える。日本での活動で模擬授業をほぼ行わないまま現地に行ったため現地で問題が出てきたのだと考えた。日本でしっかりと考え現地で授業の意図を共有する必要があった。研修 1 日目と 2 日目のディスカッションで最終的に身につけさせたい目標が変更したためコンケン大学の学生の方が少し混乱してしまったと思う。しっかりと日本での話し合いをしっかりと行いタイに行くべきであったと実感した。

また、実際、タイの小学生と日本の小学生の学ぶ内容、授業スタイル、また教員の教え方などの文化の違いに触れることができた。机を使わずに床で授業を行うスタイルに大変驚いた。また、挨拶も含めタイの文化に触れることで自分の知らなかったことも多くあり大変勉強になった。

鳴門教育大学、コンケン大学の学生の方々と一つの授業を作る中で親睦を深めることができた。言語や文化の壁はあるが算数という世界共通な内容を用いて一緒に授業を作れたことはグローバルな視点を持った教員になる第一歩だと感じた。

今回の研修でお世話になったコンケン大学の学生また研修に関わった方々に感謝します。この研修でしか学べないものもたくさんあり有意義な時間を過ごすことができた。今後も視野を広げ様々なことに目を向けグローバルな視点を持った教員になる決意をした。

平成 29 年度 鳴門教育大学

グローバル教員養成プログラム 参加報告書

算数科・数学科教育プログラム

～ グローバルな視野を持つ算数科・数学科担当教員の養成を目的とする海外研修～

鳴門教育大学大学院 学校教育研究科
教科・領域教育専攻 自然系コース（数学）
学籍番号 17817117
氏 名 谷口 誠崇

1. 本研修の目的

コンケン大学院生と協働で、算数科授業実践を行い、院生同士の研究交流を深めることにより、グローバルな視点をもった人材としての資質を養うこと。

2. 研修期間

平成 29 年 12 月 4 日～12 月 10 日

3. タイに行くまでの活動

(1) 題材の決定

授業では私たちの英語をタイの学生がタイ語に訳し子ども達に伝える。このような手段を取るため私たちが伝えたいことをうまく伝えることが難しい。そこで題材を決定する際に、私たちはよりシンプルな内容にすることを重視した。また、幾何の内容であれば図形を示しながら説明することができ、自分たちが伝えた

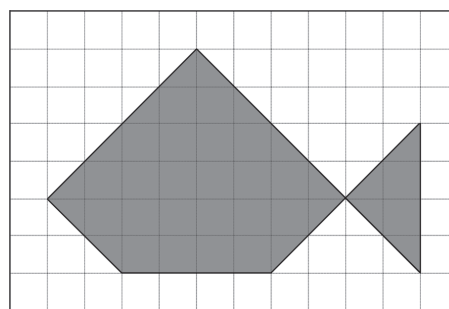


図 1

いことを伝えやすい。このようなことを踏まえ、図 1 のような外枠の長方形と色のついた部分(魚の形)の大きさを比べるという授業内容に決定した。対象は小学 3 年生にした。小学 2 年生で学習した「図形の敷き詰め」とも関連しており、後の「面積」を学習する際に役立つからである。

(2) ディスカッション(授業の展開、発問等について)

私たちは授業を通して、子どもたちが魚の形を比べやすい形に変え、大きさを比べることができるようになることを目標とした。ここでいう比べやすい形とは子どもたちがそれまでに学習している正方形や三角形のことである。最初は、子どもたちには魚の形は魚の形にしか見えていない。そのため、子どもたちに「長方形の大きさは色のついた部分いくつ分か」と問うと、簡単には答えることができない。どのような授業展開にすれば子どもたちが比べやすい形に変えることができるようになるかを話し合った。話し合いの結果、次のような流れで授業をすることにした。

- ① 問題を把握させ、魚の形がいくつ分か予想させる。
- ② 図 2 のような正方形の場合はどうなるか考えさせる。
- ③ 図 3 のような三角形の場合はどうなるかを考えさせる。
- ④ ②, ③を踏まえ、もう一度図 1 の魚の形の場合はどうなるか考えさせる。

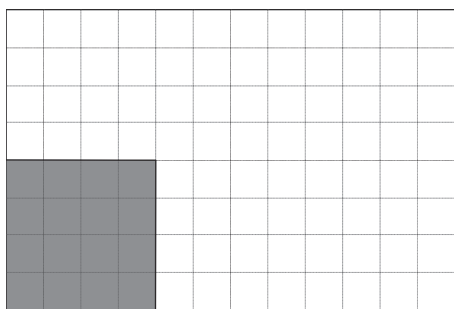


図 2

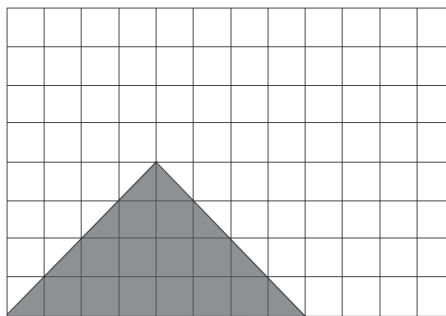


図 3

(3) Skype での打ち合わせ

タイの学生との打ち合わせには Skype を利用した。タイに行くまでに計 4 回の打ち合わせを行った。打ち合わせの日時、内容は以下の通りである。

・11月7日(1回目)

<主な内容> 自己紹介, 授業内容の説明, 人数などの確認

・11月15日(2回目)

<主な内容> 授業の詳細, ワークシートの翻訳

・11月22日(3回目)

<主な内容> 指導案, タイでのスケジュール等

・11月28日(4回目)

<主な内容> 教具, 板書計画

タイの学生との初めての交流であったため, 最初は緊張してうまく話せなかった。しかし, 回を重ねるごとに少しずつ伝えたいことを伝えることができるようになった。また, 大学で行われている「ことば de ともだち」というプログラムに参加し, 留学生の人たちと話した経験が役に立った。英語でコミュニケーションをとる経験を重ねることの大切さに気づいた。今後も大学で行われるこのような活動には積極的に参加したい。

4. 現地での活動

(1) タイでのスケジュール

・12月5日

タイに到着

コンケン大学の学生と模擬授業・ディスカッション

・12月6日

小学校授業観察

授業の改善

コンケン大学の学生とディスカッション

教具作成

- ・ 12 月 7 日
授業実践
授業の反省
コンケン観光(コンケン大学の学生と)
- ・ 12 月 8 日
研修の反省
コンケン観光
- ・ 12 月 9 日
バンコク観光

(2) 小学校授業見学

授業実践の前日には小学校の授業見学をさせていただいた。小学 3 年生の割り算の商とあまりについての授業だった。まず、タイの子どもたちの活発に発表する姿に驚いた。それは日頃からの担任の先生の指導によるものだと思った。先生の話はタイ語であったため言葉を理解することはできないにも関わらず、視線の配り方や間の取り方から話し方のうまさを感じた。また、ゲーム形式の活動もあり子どもたちも積極的に活動していた。とても参考になる授業であった。

(3) 授業実践・反省

子どもたちの反応も良く、いい雰囲気の中で授業を進めることができた。また、子どもたちの解答は私たちの予想していた通りのものが出てきた。しっかり授業を想定して準備できていた結果ではないかと思う。ただ、思った通りに授業を進めたにもかかわらず、最後の問題を解く子どもたちの手の動きはスムーズではなかった。授業の反省のときには、三角形の問題から魚の形の問題でいきなり難しくなっているのではという意見もあった。また、ワークシートだけではなく、子どもたちが自分で切ったりしながら考えることのできる教具を用意しておいた方が良かったのではないかと思う。ただ、最後の問題を解けている子どもいて、その生徒の解答を取り上げながらみんなで考えることで、子どもたちに比べやすい形に変えるという考え方を理解させることができたのではないかと思う。

以上のことから、改善すべき点はあるが授業の目標は概ね達成できたのではないかと思う。

(4) タイの学生との交流

今回の研修はコンケン大学の 10 名の学生がいなければ成り立たなかった。授業の準備だけではなく、車での送迎など本当にお世話になった。また、英語に不安のある私に優しく話しかけ、タイの文化についてなど分かりやすく説明してくれた。彼らとともに授業の準備を

した時間、一緒に話した時間はとても貴重なものとなった。この出会いに感謝したい。

5. 研修を終えて

海外に行くこと自体初めての私にとっては、何より英語でのコミュニケーションが大変だった。初めは自信がないため小さい声になってしまい、うまく伝えたいことを伝えられなかった。会話を続けるうちに、発音などよりも大きな声でシンプルに伝えることが大切だと気づくことができた。そして、研修を通して少しずつ自分の伝えたいことを英語でうまく伝えることができるようになった。当然、授業をする上でも言葉の問題は生じた。授業後にタイで日本語を教えている先生と話してわかったことだが、問題の問いが自分たちの思っていたものとは少し違った翻訳になっていた。日本語を英語に翻訳し、それをタイ語に翻訳するのでそのような問題が起こるのも仕方ないのかもしれない。大事なことは発問をシンプルなものにすることだと思った。そうすれば、このような問題は起こりにくかったはずだ。

発問をよりシンプルにすることが重要なのは日本の子どもたち相手に授業をするときも同じだ。授業をするとき、自分の発問や説明がややこしいために、こちらの意図を子どもが完全に理解していないということはよく起こっているのではないか。子どもたちに分かりやすいシンプルな説明、発問をするためには、まず教える内容を完全に理解していること。子どもたちの反応を予想しながらどのような説明、発問にするか考えること。これらが大切であるのではないかと気づかせられた研修だった。

この研修では多くの学びがあり、自分を成長させることができた。このような貴重な経験をさせていただき本当に感謝している。今回学んだことを今後の大学院での学習、教師として教壇に立つときに活かしたい。

平成 29 年度 鳴門教育大学

グローバル教員養成プログラム 参加報告書

算数科・数学科教育プログラム

～ グローバルな視野を持つ算数科・数学科担当教員の養成を目的とする海外研修～

鳴門教育大学大学院 学校教育研究科

教科・領域教育専攻 自然系コース（数学）

学籍番号 17817099

氏 名 住田 幸平

1. 本研修の目的

コンケン大学院生と協働で、算数科授業実践を行い、院生同士の研究交流を深めることにより、グローバルな視点をもった人材としての資質を養うこと。

2. 研修期間

平成 29 年 12 月 4 日（月）から平成 29 年 12 月 10 日（日）まで

3. コンケンに行くまでの活動

① Skype での打ち合わせ

Skype を使った会議では、教材や授業内容をはじめ、コンケン大学・鳴門教育大学のメンバーの紹介やコンケンで行ってみたい所などを自由に話し合った。この時、両国のメンバーは名札を付け会議に参加することで、名前で呼び合い、名前を覚えられるように工夫し、仲を深めた。研修期間は 4 日という短い期間だったが、お互いの顔を見てコミュニケーションしていたおかげで現地ではすぐに打ち解けることができた。

次に、困難だったことについて述べると、指導内容、教材や教具について共通理解をすることであった。それは、授業内容や教材の意図を言葉だけでは伝えきれないことや互いに母国語が英語でないことが要因だった。そこで私たちは指導案、板書計画やワークシートを手元に置き、同じ資料を見ながら話し合うことで意思疎通を図った。このように正確に意見や考えの伝達ができるための工夫は言語が異なる国の人と協力して目標を達成するためには大切であると思った。

② 授業構築

私たちは海外で授業をするため、不慣れな英語で授業をしなければならず、さらに授業者は英語で授業するため、タイの大学生がタイ語に翻訳し、児童に伝えるという環境であった。そのような環境の中、数式や記号が多くあらわれる教材であるとそれらの表記の仕方や読み方に困る。そこで授業内容は図形とした。図形であれば黒板やワークシートに描かれたものを見るだけで児童は授業内容を把握しやすいと考えた。

授業の目的は面積の概念の素地を養うこととした。対象学年については、本授業では面積の素地を養うため、まず面積については未習である学年に絞った。さらに今回の授業では、図形を動かして敷き詰めることがこの授業内容を学ぶために必要であると考え、その点は既に学習している小学校 3 年生を対象とした。

そして、指導案をまず日本語で作成し、鳴門教育大学のメンバーで議論を重ねた後、英語に翻訳し、コンケンの学生に E-mail で送り共有した。指導案作成では、授業の目的、内容をより正確に伝えられるように英語表現をメンバーで何度も考え作成した。

また、議論した内容については、様々であった。何個の図形を扱うか、それぞれの図形の目的は何か、どんな形・大きさであれば目標とする資質を養うことができるか等を考えた。

4. コンケンでの活動

① 1 日目：授業についての議論

コンケン大学の学生と共に英語で模擬授業を行った。発問の仕方や教具の使い方を確認した。また、授業者が英語で話した内容を実際にタイ語に翻訳しながら授業し、授業の流れを確認した。授業者と翻訳を担当する者以外は児童役となり、予想される児童の疑問・反応を考え、授業者に投げかけていた。この時、コンケン大学の学生が発言しやすいように努めた。理由は、初めて模擬授業を見るコンケン大学の学生の意見や考えを聞きたかったからだ。

コンケン大学の学生の意見は私にとって新鮮だった。私たちが日本で模擬授業を行った時に持った疑問と同じ疑問をタイの学生も持つ場面があったからだ。この時、国によって算数・数学の概念に違いはなく、タイの学生も同じ点に疑問を持つのだと気づかされた。一方、私たちが模擬授業を行った際には出てこなかった疑問が挙げられ、それについて議論したり、同じ疑問については私たちの考えを説明したりして、有意義な話し合いとなった。

② 2日目：附属小学校訪問、授業についての議論

授業実践を行うクラスの算数科の授業を見学した。そして、クラスの雰囲気や授業形態などを確認した。授業内容は割り算だった。授業はタイ語で行われていたため、教員が何を発問しているのかや児童が何を発言しているのかは分からなかった。しかし、プリントや黒板に書かれた数式を見ると何を学んでいるのか理解することができた。国が違い、言語や文化は違ったとしても、算数・数学の授業で児童生徒に理解させるべき概念は世界共通なのだと気づかされた場面だった。

授業が終わり号令が行われた時、その様子に私は驚いた。児童は座った状態で、今にも頭が床に着きそうなほど深々と頭を下げていた。後にその意味が分かった。タイでは教師という職業は尊敬を受ける職業であり、尊敬の念を表していたのだと。この日はタイの学校の習慣や児童の様子を見ることができた貴重な一日だった。

③ 3日目：授業実践、リフレクション

当日、私はプリントを配ることや机間指導を行い授業者のサポートをした。

授業では3つの問題を扱った。これらの問題は前の問題が次の問題のモデルになるように意図して作っていた。また、それぞれの問題には面積の概念の素地を養うという目標を達成するためのエッセンスが含まれる問題を考えていた。よって、各問題の目的や意図を頭に置いて、児童をサポートした。答えの数値が合っている児童にはその考え方を聞いて確認したり、悩んでいる児童には授業者の説明を再び伝えたり、数値が誤っている児童には考え方を聞き誤解を修正できるように努めた。

本授業を振り返ると、前の問題をモデルにして次の問題を解決するというねらいの達成は困難であった。しかし、児童は私たちが目標としていた面積の概念の素地を養えるような考え方を思いつき、発表していた姿が見られたことから面積の概念の素地を養うという目標はおおむね達成できたと思う。

授業後にリフレクションを行った。附属小学校の教員の方から「3つの問題は関係性があり、どのように問題を解いていけばいいのかの流れがあったことがよかった。」「黒板で実際に教具に触ったり動かしたりすることができたことにより、児童はイメージができた。」という意見があった。

黒板では実際に教具をハサミで切って動かして考えることができたが、児童のワークシートではそれができなかった。ハサミで切る箇所に線を引くことや動かした後の様子を想像して描くことしかできなかった。そのため児童の手元にも教具があるともっと思考を促せたのではないかと振り返る。

④ 4日目：院生同士の交流

院生同士の交流では、昼食を一緒に食べたり寺院へ行ったり、お土産を買うことのできる店に連れて行ってもらったりした。昼食を食べながら趣味の話を聞いたり、寺院では作法を教えてもらったりした。また、コンケン大学の学生は研修期間中、朝の送迎から私たちがホテルに戻るまで、常に傍にいてサポートしてくれた。その時間も交流ができた。そして、最終日のこの院生同士の交流で私たちの仲はさらに深まったと思う。コンケン大学の学生が暖かく接してくれたことに感謝したい。そして、この繋がりをこれからも大切に

したいと思う。

5. まとめ

本研修を通して次のことを学ぶことができた。

- 互いに母国語が英語でなく、意思疎通が困難な状況の中で、共に授業を構築するためには、指導内容の本質を理解し伝えることが求められること。
- また、上記のような思考は算数・数学という教科には特に求められるということ。
- 児童・生徒に教えるべき算数・数学の概念は国が異なっても同じであること。
- 国が違い、言語や文化が異なる人と協力して目標を達成するには、様々な意見や考えを受け入れ、より善い方向性を見出そうとする姿勢が大切であること。

研修を終え、日本に帰国して「もっと海外の学校を見たい！」と私は思った。

この研修が数学の授業や日本の学校に対する私の視点を大きく変えたからだ。まだ私には「海外の学校＝タイの学校」に留まっている。他を知れば自己を知れる。もっと他の国の学校や教育を見ることが日本の教育のよさや課題を考えられるようになることに繋がるだろう。

平成 29 年度 鳴門教育大学

グローバル教員養成プログラム 参加報告書

算数科・数学科教育プログラム

～ グローバルな視野を持つ算数科・数学科担当教員の養成を目的とする海外研修～

鳴門教育大学大学院 学校教育研究科
教科・領域教育専攻 自然系コース（数学）
学籍番号 15817143
氏 名 三木 崇正

1. 研修における目的

コンケン大学院生と協働で、算数科授業実践を行い、院生同士の研究交流を深めることにより、グローバルな視点をもった人材としての資質を養うこと。

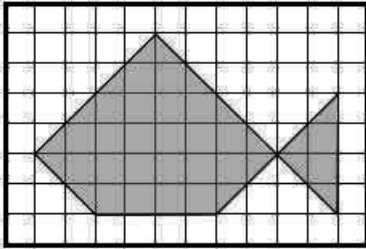
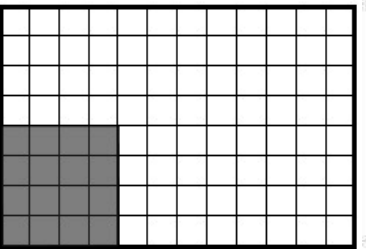
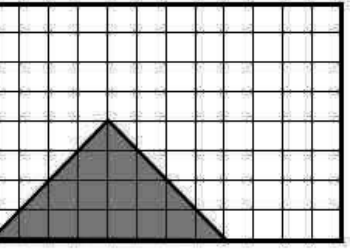
2. 研修期間

平成 29 年 12 月 4 日（月）から平成 29 年 12 月 10 日（日）まで

3. タイに行くまでの活動

3.1 授業内容の構成

今回は子どもたちが図形の面積を考えるうえで素地となる見方を獲得するための授業を目指し、以下の授業を構成した。

目標：比べやすい形をつくることができる。		
主発問：長方形の大きさは、色のついた部分のいくつ分ですか。		
問題 1	問題 2	問題 3
		

3.2 メールとスカイプでの情報交換

今回、タイに行くまでのコンケン大学院生との情報共有はメールとスカイプを通じて行った。メールでは指導案やワークシートの送付、スカイプの日程調整等を行った。スカイプではスライドや紙を用いた授業の流れの説明、指導案やワークシート等についての質疑応答を行った。

スカイプで話し合うことで、画面越しではあるが互いの顔を見ながらコミュニケーションを取ることができ、お互いの距離を縮めることができた。同時に、日本語が通じない相手に対するコミュニケーションの難しさを実感した。自分の言いたいことを伝えたつもりでも、相手に正確に伝わったのか不安になった。相手の伝えてくれたことも、自分が実際に理解できたのか不安になった。

このような不安を無くして正確に意思共有するためには、自分の言いたいことをシンプルで明確にしておくことと、相手からの情報に対して自分はこう認識したと相手に伝えなおして確認することが大切であるということに気付いた。

4. タイに行ってから活動

4.1 授業についての打ち合わせ

タイに着いた日（12/5）の午後、コンケン大学にて授業についての打ち合わせを行った。事前に送っておいた指導案をもとに授業についての概要と変更点を述べ、その後模擬授業を行った。日本とタイのメンバーから一人ずつが授業者、残りのメンバーが子ども役となった。授業者が日本とタイのメンバーから一人ずつである理由は、実際の子どもたちがタイ語しか理解できないためである。そのため、日本のメンバーが英語で授業を行い、タイのメンバーがそれをタイ語に訳するという形をとった。

模擬授業ではタイのメンバーが子どもの視点に立って、多くの意見を出してくれた。その意見のほとんどは、子どもたちがこの授業を通して本当に目標を達成できるのか、今の問い方で教師側の意図していることを理解できるのか、ということに関する内容であった。出てきた意見について考え、話し合うことで、全員がもう一度自分たちの授業を見つめ直すこととなった。

4.2 授業参観

次の日（12/6）は、午前中にコンケン大学付属小学校へ授業参観に向かい、私たちが授業をさせていただくクラスの様子を見ることができた。机は四方の隅に寄せてあり、子どもたちは床の上に座って授業を受けていた。今回、見せていただいた授業はわり算の余りに関するもので、グループで活発に取り組む児童の様子を見ることができた。授業はタイ語で行われていたが、数や式を用いた表現が出てきたので大まかな内容は授業を見ただけで把握することができた。詳細な説明はタイのメンバーが私たちに英語で伝えてくれた。

授業参観を通じて、床の上で授業を受けるという日本とは異なった授業文化に触れることができた。また、言語は違えども授業の内容を把握することができたことから、算数・数学の内容は世界共通であるということを実感することができた。

4.3 授業についての最終打ち合わせ

授業参観をした日の午後からは大学へ戻り、授業についての最後の議論を行った。前日に議論した目標と問いの仕方について共通認識を図りながら、スムーズに授業展開ができるようもう一度模擬授業を行い、話し合いをした。また、ワークシートのプリントや貼り物等の教具の最終チェックも行った。

4.4 授業実践

3日目（12/6）の午前にコンケン大学付属小学校にて授業実践を行った。授業30分前に小学校到着し、準備室を設けていただいていたので、そこで準備を行った。教具をすぐ出せる状態にでき、最終確認もできたのでとてもありがたかった。

時間になると教室に向かい、授業を始めた。子どもたちは明るく私たちを迎えてくれた。授業の導入は思い通りの展開となった。問題1では、こちらの問いを正確に理解してくれていない児童がいたが、きちんと把握できている児童も多かった。問題2、3と

問題が難しくなるにつれて、一人で問題を解ける児童が減っていった。そこで、授業者が児童の意見を少しずつ募り、クラス全体で問題を解決していき、何とか授業のまとめをすることができた。

4.5 教室でのリフレクション

授業を行った直後に、教室で、コンケン大学附属小学校の先生方と共に授業の反省会を行った。授業の打ち合わせの際に日本とタイのメンバーが話し合っていたように、問いの仕方がやはり児童にとって分かりにくかったということを課題として挙げていただいた。しかしながら、解き方を教えるだけになりがちという算数・数学教育の国際的な課題に対して、今回の授業は子ども自身の力で問題解決を達成させようとしていたという点で、チャレンジングであったという評価もいただくことができた。

4.6 学生とのリフレクション

授業を行ってコンケン大学に帰ってから、学生で授業の反省会を行った。授業の目標は良かったが、問いが分かりにくかったということが共通意見だった。問いの表現をどれだけ工夫しても、誤った認識を持ってしまう子どもは出てしまうので、その誤った認識をもう一度教師が引き出させ、訂正することを行わないときちんとした共通理解を深めていくことは難しいということを学んだ。

4.7 大学でのリフレクション

授業を行った翌日（12/7）、コンケン大学にて大学の先生方と共に本プログラムについての反省会を行った。日本の各メンバーが本プログラムについての感想と感謝を述べた。また、大学の先生方にも行った授業についての説明をさせていただくと共に、意見をいただいた。

4.8 学生との交流

日本での準備期間、そしてコンケンでの 5 日間、10 名の学生の方々には本当にお世話になった。メールやスカイプではいつも温かく、丁寧な対応をしていただいた。コンケン空港に着いてから、最終日に空港でお別れするまでの間、移動のときにはいつも車での送迎をしていただいた。また、授業づくりでは私たちの意見を尊重しながら、理解してよりよいものにしようとしてくれた。ご飯を食べるときには一つ一つの料理についての説明をしてくれ、観光の際にはタイについてたくさんのことを教えてくれた。優しく、思いやりのあふれる学生の方々と授業実践できたことはかけがえのない経験である。

5. 日本に帰ってからの活動

日本に帰って来て数日経ってから、日本のメンバーで集まって本プログラムの振り返りを行った。いつ何をしたのか、どういうことが課題として挙がったのかといったことを確認し、共通理解を図った。また、行った授業の課題に対してどうしたらよかったのか、次に授業づくりをする際に注意すべきことは何かということを考えた。

今回の反省点として、準備不足ということが挙がった。授業について日本で考えてい

ったつもりだったが、考えきれていなかった点が多く、現地で変更したことがいくらかあった。日本で行う初回の模擬授業をもっと早くに行っておけば、子どもがどう認識するかを考えることを通して、自分たちの設定した目標のあいまいさや、問いの分かりにくさ等が見えてきたはずだ。早い段階で見えてきた課題に対処できていれば、現地で授業内容を変更することなく、よりよい授業がつくれたと思う。

6. まとめ

私は、グローバルな教員とは、日本であろうと海外であろうと教員としての職務を成し遂げることができる教員であると考えている。私が本プログラムを通してグローバル教員な教員として高めたことを以下に述べていく。

算数・数学の内容は世界共通であるということを実感することができた。附属小学校へ参観に行ったときにタイ語の授業でも内容が分かったこと、母国語や文化の違うタイの学生と共に授業をつくったことから、算数・数学の内容は世界共通であることが身をもって知ることができた。日本で算数・数学の授業を行い、子どもたちを成長させることができれば、本質的には世界でも同様のことが行えるはずだ。

母国後ではない、英語という言語で海外の人に自分の意図を伝えようとした結果、なるべく本質を捉えて、シンプルに分かりやすく伝えようとする力を向上させることができた。授業づくりにおいて、何を身に付けさせるのかを端的に捉える力は非常に大切であり、それは日本でも海外でも教員として求められる力である。

海外での1度きりの授業という緊張感、責任感の中で、日本、海外の人々と協働しながら目標を達成できた。このような経験は自分が教員を目指すにあたり、教員としての責任感を強め、自信を高める良い機会である。

私が本プログラムに参加するのは3度目であり、参加するたびに教員として、人間として成長させていただいた。本プログラムに参加できたこと、本プログラムを通じて関わった人々に深謝している。私は本年度で大学院を卒業するため、残念ながら来年度は参加することはできないが、何らかのサポートができたらと思っている。また、本プログラムがこれからも続いていくことを切に願っている。

平成 29 年度 鳴門教育大学

グローバル教員養成プログラム 実施報告書

海外観察・交流実習（気づく実習）

出張者所属・氏名

教員（2名）：	教職キャリア支援センター	佐藤 長武
	教員養成特別コース	若井 ゆかり
学部生（5名）：	小学校教育専修 学校教育実践コース	濱田 あや（G2）
	小学校教育専修 算数科教育コース	小谷 真由（G2）
	小学校教育専修 図画工作科教育コース	三笠 由季（G2）
	中学校教育専修 保健体育科教育コース	後 博子（G2）
	中学校教育専修 家庭科教育コース	戸石 遥香（G2）
職員（1名）：	教務企画課教務企画係	日野 正之
用務地	タイ王国	
用務先	コンケン大学	
出張期間	平成30年1月27日（土）～ 1月31日（水）	

1 はじめに

本学では、様々な教育環境に身を置き、意義あるプログラムを自分たちで開拓することで、教育に対する知見を広げ、教師としての資質能力を高めることを目的として、学部2年次において、「気づく実習」を希望制のオプション実習として実施している。

表1に、気づく実習の1つに位置付ける「海外観察・交流実習」の目的を示す。

表1 海外観察・交流実習の目的

1 【教職理解】

海外の教育事情や学校現場、地域の文化を体験・比較することで自己の教育観に気づく。

2 【児童生徒理解】

海外の児童生徒と接することを通して、自己の子ども観に気づく。

3 【地域交流】

日本と異なる教育環境を体験することにより、自己の国際的資質に気づく。

2 研修の概要

2-1 参加者

平成29年1月、学部1年生を対象に「気づく実習」についての説明会を開催し、実地教育担当教員による概要説明と前年度参加学生によるプレゼンを行い、参加申込書の受付を開始した。4月、7名から参加申込書が提出された。実地教育担当教員による参加申込書に記載された参加希望理由の内容について協議し、参加を認めることとした。

6月上旬、参加希望者を対象に研修内容や実施時期について説明し、参加の意思確認を行った。その結果、2名が辞退したことから今回の研修参加者は、次のとおり決定した。

教員（2名）：	教職キャリア支援センター	佐藤 長 武
	教員養成特別コース	若井 ゆかり
学部生（5名）：	小学校教育専修（学校教育実践）	濱田 あや
	小学校教育専修（算数科）	小谷 真由
	小学校教育専修（図画工作科）	三笠 由季
	中学校教育専修（保健体育科）	後 博子
	中学校教育専修（家庭科）	戸石 遥香
職員（1名）：	教務企画課教務企画係長	日野 正之

2-2 研修日程

海外観察・交流実習は、平成30年1月27（土）～1月31日（水）の期間に実施した。

研修日程は、表 2 のとおりである。

表 2 海外観察・交流実習の日程

日順	月日（曜日）	業務地	業務内容
1	1 月 27 日 （土）	鳴門→関空 関空→バンコク	移動 高速バス 移動 TG673（関空発 17:25→バンコク着 22:00） 移動 ホテルへ
2	1 月 28 日 （日）	バンコク→コンケン	移動 TG2042（バンコク発 9:00→コンケン着 10:00） 移動 ホテルへ 14:00-20:00 ワット・ノンウェン、ナイトマーケット見学
3	1 月 29 日 （月）	コンケン	11:00 コンケン大学訪問 11:30-13:00 日本語学科学生と昼食 13:00-14:00 日本語学科の授業観察 14:20-15:30 日本語学科との交流 18:00-20:00 農業祭見学，交流夕食会
4	1 月 30 日 （火）	コンケン コンケン→バンコク バンコク→ （機中泊）	09:00 コンケン大学附属小学校訪問 09:20-09:30 学校長表敬訪問 09:40-10:30 児童との交流 10:30-11:30 学校見学 11:40-12:40 給食，教員との協議 12:50 インターナショナルスクール訪問 13:00-13:40 授業観察 13:50-14:50 児童との交流 移動 コンケン空港へ 移動 TG2049（コンケン発 17:40→バンコク着 18:40） 移動 TG622（バンコク発 23:15→）
5	1 月 31 日 （水）	→関空 関空→鳴門	移動 （→関空着 06:25） 移動 高速バス

2-3 研修の内容と成果

① 海外観察・交流実習のための準備

平成 29 年 9 月から平成 30 年 1 月にかけて，5 回の事前指導を行った。本研修においては，学生の自主的な運営・計画を尊重することを確認し，コンケン大学の日本語学科

担当教員や国際交流担当職員との電子メールによる連絡・交渉も含め、学生主体で計画立案し、教員はスーパーバイズに徹した。

訪問日が1月下旬であることから、恵方巻きを現地の学生と作りたいとの希望を現地に伝えたが、日本語学科担当教員から、タイでは巻き寿司は珍しくないこと、材料の調達が難しいなどの返信があったことから内容の再検討を行った。その結果、日本語学科の学生との交流では、各地の祭りを通して日本文化を紹介し「縁日（型抜き、くじ引き、射的、輪投げ）」を、小学生との交流では「折り紙」を、インターナショナルスクールでの交流では、「あやとり」を行うことにした。

祭り紹介のプレゼンや折り紙の説明教具、縁日の道具の作成や景品の購入など、役割分担をしながら、学生が主体的に活動した。事前指導の時間以外にも、学生が自主的に集まり準備し、教員は事前指導ごとに進捗状況を確認し、アドバイスを行った。

このような学生の自主的な取組は、授業の内容構成を考えたり、教材・教具の作成に関する基礎を培う活動であるといえる。また、現地の担当者と連絡・調整を行うことは、学校教員による他機関との連携の重要性の視点からも意義深い経験となった。

② コンケン大学における交流

授業での交流に先立ち、日本語学科2年生の学生と校内食堂で昼食を共にし、自己紹介をし、日本とタイの学生生活について情報交換をした。また、休み時間には、一緒にダンスを踊るなど同年代の学生らしい交流を行うことができた。

日本語学科の授業では、1年生が「し」と「ち」の発音の違いについて学んでいた。現地の学生にとって、この発音の違いは難しいようで、参加学生が模範を示したり発音の判定をしたりして、授業に参加した。その後、小グループに分かれて、発音の練習をしながら、お互いの国について理解を深めた。

後半は、参加学生が日本の伝統的な祭りや縁日などの日本文化について映像で紹介し、全員で「型抜き」を行った。細かい作業に四苦八苦しながらも楽しい時間を過ごすことができた。最後に、日本から準備していった手作りの「縁日（くじ引き、射的、輪投げ）」をした。日本の駄菓子やキャラクターグッズを景品として準備していたため、とても盛り上った。

学生との交流により、日本とタイの文化や教育環境の違いに気づくことができた。また、活動について準備を周到に行っていたが、学生の理解度や時間的な制約から急遽予定を変更したことも多々あり、授業を成立させるためには、その場に応じて臨機応変に対応しなければならないことを体感できた。

③ 附属小学校における交流

附属小学校では、校長先生を表敬訪問した。教育目標や学校生活をまとめた学校紹介DVDを見せていただき、児童との交流前に学校の様子を知ることができた。

児童との交流では、日本から持参した「折り紙」をした。画用紙で鶴の折り方を全体説明した後、1人ずつ実際に折った。細かい作業であるため、分りにくいところは、手伝ってあげながら完成させることができた。最後に、日本から準備して行った「千羽鶴」を見せると歓声が上がった。言葉は十分に伝わらなくても、「折り紙」という教材を介して子どもたちと交流することができた。また、国が違っても子どもらしい無邪気な一面を見ることができた。

その後、他の学年の授業参観や校内見学、給食を食べながら先生方と懇談することにより、日本との教育事情や環境の違いを理解することができた。

④ インターナショナルスクールにおける交流

インターナショナルスクールは、今年度児童の受入を始めたばかりで、現在は1年生のみ7名の在籍である。数年後には新しい校舎が完成し、本格的に児童の受入が始まるそうである。

国籍は様々であるが、みんな元気に体育のマット運動の授業をしていた。指導者が、日本人であったことからタイの教育事情や授業を行う上での課題などについて率直な意見交換をすることができた。

児童との交流では、「あやとり」を行った。言葉が十分通じない場面も見られたが、英語を中心に身振り手振りで説明をすると、器用に手先を動かし習得の早さに驚かされた。参加学生は、子どもの興味や関心は国による違いはなく、みんな同じだと改めて気づかされた様子であった。

3 最後に

以上の研修活動を経て、本研修の参加者は、タイと日本の教育事情や学校現場の共通点や相違点について実感することにより、国際理解や国際協力について再認識するとともに、教師としての自覚を深め、さらなる課題を見いだすことができた。本研修は、グローバルな視点を持つ教員の育成に資する大変意義深いのものであるといえる。

今後とも、意欲ある学生に学びの機会と場を提供できるように経済的な支援を含めて長期的な視点にたった大学の取組を期待するものである。

終わりに、今回の派遣を受け入れてくださり温かく歓迎してくださったコンケン大学教育学部日本語教育課程、コンケン大学附属小学校、インターナショナルスクールの関係者のみなさまに厚くお礼申し上げます。

平成 29 年度 鳴門教育大学
グローバル教員養成プログラム 参加報告書

海外観察・交流実習（気づく実習）

鳴門教育大学 学校教育学部
小学校教育専修 学校教育実践コース
学籍番号 16732062
氏 名 濱田 あや

1 はじめに

今回の気づく実習である海外観察・交流実習では、コンケン大学の教育学部日本語学科の学生との交流やコンケン大学附属小学校での日本文化の授業、学校見学、インターナショナルスクールでの授業見学を主とした。以下に、実習前の準備から当日までの動きについて述べる。

2 タイに行くまでの活動について

今回の実習では実際にコンケン大学の学生に日本文化を紹介することや、附属小学校での日本文化についての授業をする予定であった。コンケン大学では「縁日」を実際に体験してもらうことや、附属小学校では「折り紙」と「あやとり」をする予定だったのでそのための準備を大学で集まり行った。特に縁日については屋台の看板（画用紙）や輪投げ、射的、くじ引き、型抜き、日本の祭りについてのスライドを作成した。また、附属小学校の児童に折り紙の鶴をプレゼントするために千羽鶴を折る等の準備を行った。

3 当日の行動について

(1) <1日目：1月27日 土曜日>

初日は、鳴門を昼に出発して夜にバンコクに着く飛行機に乗ったので移動だけとなった。日本はとても寒かったが、タイに着くとじめっとしたような空気に包まれ夜でも蒸し暑かった。空港から送迎バスでホテルへ向かうまでの道中の景色は、目新しく新鮮なものばかりだった。

(2) <2日目：1月28日 日曜日>

朝早く空港へ向かいバンコクからコンケンへ飛行機で移動した。ホテルにチェックインしたあと観光に出かけた。昼食をホテル付近のタイ料理屋で食べた。タイ料理は、本当に辛く食べるのが大変だったが初めて食べるタイを感じる料理に感動した。その後はタクシーで Wat Nong Wang へ行った。金色で神々しい寺で9階まであり、最上階からの景色はコンケンの町並みを見渡せ、風が吹き抜けてとても気持ちがよかった。現地の人々の生活の中にある信仰心を肌で感じることでとても良い経験となった。その後は Central Plaza というコンケンにあるショッピングモールで買い物をして、夜はナイトマーケット（Ton Tann Market）に行った。Ton Tann では夜にもかかわらず人の熱気に包まれており、食べ物もおいしく、食用の虫を売っていたのには驚いたがタイを満喫できた。

(3) <3日目：1月29日 月曜日>

3日目はコンケン大学へ行き、日本語学科の学生と学食で昼食を食べた。日本語学科の学生は、みんな日本語がとても上手だったので驚いたと同時に、同年代の外国人と話す機会があってとてもうれしかった。国は違っても話す内容は日本とはあまり変わらず、タイでの生活を聞くことができた。観光旅行では味わえない実習ならではの体験だったので良い経験となった。その後、日本語の授業で日本文化の紹介をし、縁日を楽しんでもらえた。日本語学科の学生と仲良くなったので夜はコンケン大学で行われていた農業祭に連れて行ってもらい、夜ご飯は大学のキャンパス内にあるしゃぶしゃぶ店に行った。農業祭では現地の人気のお菓子や、日本のおかゆのようなものを食べることができてタイを肌で感じることもできた。しゃぶしゃぶ店でも日本では食べられていない野菜がでてきたり、アイスのフレーバーも違ったりとタイでの夜を楽しんだ。

(4) <5日目：1月30日 火曜日>

附属小学校で、児童に折り紙の紹介をした。言葉は通じなかったが、コミュニケーションを取ることは簡単にでき、子どものすごさを改めて感じた。授業後は、他の授業を観察することができた。日本とは違い、児童が各教室に行って学習する形態だったので、各教室にはその教科ごとの特徴があってその授業の雰囲気になりやすそうだった。音楽室にあるタイの民族楽器に触れさせてもらった。日本語の授業があって、会う児童に日本語で挨拶をしてもらい、外国語の吸収の早さを感じた。昼食は、附属小学校の給食をいただいた。米はもちろんタイ米で、ドラゴンフルーツもついてきて日本の給食との違いを感じた。その後、インターナショナルスクールに行った。ここでは、附属小学校とは全く違う雰囲気で、自由を校風にしていると聞いた。元気いっぱいの1年生の授業を見学した。教えているのが日本人の先生だったので授業内容は日本とあまり変わらなかったが、教具不足に悩んでいると言っていた。体育の授業を見せてもらったが、体育館ではなく、普段の教室だったので、大変そうだという印象を持った。その後、コンケン空港からバンコク経由で帰国した。



図1 コンケン大学での様子

4 実習を通して

今回の実習では多くのことを学ぶことができた。実際にタイという国に行かなければ分からないことが多くあったので、タイでの教育現場やタイという国の雰囲気を肌で感じられた。教室や授業形態などの日本の教育との違いを自分の目で確かめるととても良い機会だった。

た。これからはその経験を自分自身に生かしていきたい。



図2 コンケン大学附属小学校の様子

平成 29 年度 鳴門教育大学
グローバル教員養成プログラム 参加報告書

海外観察・交流実習（気づく実習）

鳴門教育大学 学校教育学部
小学校教育専修 算数科教育コース
学籍番号 16753035
氏 名 小谷 真由

○1日目から2日目について

関西国際空港からタイのバンコクまで約6時間のフライトでした。タイに着くと、すごく蒸し暑く、湿度も高くじめじめしていました。日本は大寒波で乾燥していたのでその差に驚きました。また、空港の案内板もすべてタイ語で、今までタイ語の文字をほとんど見たり学んだことがなかったので全く読めなかったです。また、ホテルに向かう車中から見た景色は日本とは全く異なるものでした。セブンイレブンが至る所にあり、どうしてこの距離にこんなにたくさんあるのか不思議でした。その日は移動で疲れ、ホテルに着いてすぐに寝ました。

2日目は朝早く起き、朝食を食べました。バイキング形式で「miso soup」と書かれた味噌汁もありました。ホテルからの景色は昨日着いたときは夜で分からなかったのですが、窓を覗くとタイの街の風景が広がっていました。高い建物はなく、カラフルな色の建物がたくさんありました。窓を開けるとじめっとした空気が流れ込み、虫も入ってくるので開けないほうがよかったです。

コンケンまでは1時間ほどのフライトです。空港からはタクシーで移動しました。タクシーからの風景はすごかったです。道があまり整備されておらず、車線を分ける白線がなく、みなが譲り合って道路を走行していました。また、道路に牛がいたり、長い箸を売っている人がいたりと初めて見る風景ばかりでした。よくテレビなどで見ていたトゥクトゥクが至る所で走っていて本当にタイに来たんだなって実感しました。バイクの数も日本と違って多くて、普通にノーヘルで2人乗り、3人乗りしているバイクもありすごく驚きました。

ホテルについて荷物を置き、観光に行きました。ホテルから少し行ったところに綺麗なお店がありそこに入りました。店員さんにおすすめの料理を片言の英語で聞き、5品ほど頼みました。有名なトムヤムクンも食べました。すごく辛かったのですが味は美味しかったです。他にもいろいろ食べたのですがすごく辛いのがあり、一口食べただけでも口の中が「辛い」を超え痛くなるものがありました。それは一口しか食べることができませんでした。ほとんどの料理が辛く、刺激的でした。タイに来るまで食べられるかなと心配でしたが思っていたよりもおいしく食べられました。

それからコンケンで有名な寺院に行きました。全体が金色で豪華な建物でした。中には土足で入ることは禁止されており、靴下で中を見て回りました。建物の中にはお参りに来ている多くの方がおり、お坊さんが唱えている前で同じように正座をして同じように唱えていました。タイの人達は信仰心が強く、お参りすることをすごく大事にしているのだとはたから見ていても感じられました。お供え物をもってきている方もいました。

歩いて回っていると、ピクリとも動かないで座っているお坊さんがおり、最初は生きているのだと思いますがよく見てみると人形であったことに驚きました。本当に精巧に作られていてじっくり見ないと見分けがつかないかったです。建物の上の階まで上がると、各界には精巧な絵や彫刻がされていてすごく派手でした。日本の寺院とは違った派手さで神聖でした。

次にタクシーで、お土産などをかうためにデパートに向かいました。飲食店やダイソーな

ど日本でも買えるものや日本の店が多く、地元の物が買いたかったのにほとんど置いていなくて残念でした。けれど、日本の商品がタイにもあるなんて、日本のすごさに感動しました。ユニクロも出店されていましたが値段は日本とそんなに変わらず、タイのほうが物価は安いので、ユニクロは結構高級なお店なのかなと思いました。

そのホテルに帰るときにトゥクトゥクに乗ることができました！タイに来たからには乗りたいと思っていたトゥクトゥク。乗ってみるとちょっとしたアトラクションみたいでした。4人乗りできつきつだったのですが、シートベルトも窓もなく、本当に一歩間違えて落ちたらけがをしてしまうような乗り物で、そのスリリングな感じと風を直接感じる事ができてすごくテンションが上がり楽しかったです。すごく貴重な体験ができて本当に良かったです。

ホテルに戻り、少し休憩した後、念願だったナイトマーケットに行きました。「TON TANN」というナイトマーケットでした。そこはまた昼間と違った雰囲気で、たくさんの人がいて、音楽を演奏したり、催し物をしていたりとお祭りのようでした。屋台がたくさんあり、雑貨を売っているお店もたくさんありました。お寿司の屋台もあり、前に握られたお寿司が並べられていました。生もののなのに、冷蔵保存しなくても大丈夫なのかなと心配になりました。また、各店舗様々な食材や料理が並べられており、タイの料理をまた楽しむことができました。

食事した後は自由に買い物をしました。たくさん物が売っており、中には食用の虫も売っていました。見たときはゾッとしてすぐにその場から逃げました。商品を買うとき英語があまり通じなく、ジェスチャーで伝えることが多かったです。英語を喋れる方が多いかなと思っていたのですが、思っていたより通じなく大変でした。けれど、言葉は知らなくても何とかなるものだと思います。

○3日目について

この日はコンケン大学で私たちが授業をする日です。コンケン大学の学生さんと一緒に学内の食堂でお昼ご飯を食べました。食堂には様々な料理があり、デザートブースもありました。私は辛いものがよかったので学生さんに辛いものを頼んでもらったのですが、食べてみるとすごく辛くって、食べるのが大変でした。タイの人の辛いのは信じちゃ駄目だと思いました。

そして、席について一緒にご飯を食べながらいろいろな話をしました。自己紹介をし合い、質問しあったりして交流しました。ご飯を食べた後、フリールームみたいなところでフォーチュンクッキーを踊りました。日本の歌なのにタイ語版もあることにも驚いたのですがそれを踊れることにも驚きました。

それから授業をするために教室に向かいました。教室には大学1年生の生徒さんが30人ほどいました。初めに日本語学科の先生の授業を見学しました。授業では「し」と「ち」の違いなど、タイの人が聞き取りにくい音を聞き分ける授業をしていて、それに私たちも参加しました。先生が音を発し、それを生徒さんが当てるというものでした。日本人なら簡単に

聞き分ける音でも、タイの人には聞き取りにくいようで、みんな苦戦していました。日本語の授業ってこうゆう風に授業をするのだと体験できて良かったです。

それから5人ほどのグループに分かれ、各グループに私たちが1人ずつつき、生徒さんが「し」と「ち」を発音して、それを私たちが聞き分け、発音があっているか確かめる活動をしました。発音



が難しくみんな苦戦していました。先生が発音するだけでなく、生徒が発音しそれを確かめ合うことで、より理解を深められて良いと思いました。

それから、各グループで交流しあいました。家族構成や日本語を学ぼうと思ったきっかけなど聞き、LINE を交換したり、写真を撮り合ったりして仲良くなれました。日本の好きな芸能人の話をしたりして盛り上がりました。

それから休憩をはさみ、私たちが授業をすることになりました。私たちの授業は、日本の祭りを紹介して、「縁日」を実際に体験してもらうというものでした。今回の学生さんは、1年生なので思っていたより本語が分からないようで、準備していた内容では伝わらないと思ったので、全員が簡単な日本語にその場で変え、ジェスチャーを使いながら伝えました。伝わったかどうかは分かりませんがウケたのでよかったですと思います。この祭りは何県で行われているでしょうという質問をすると、授業で都道府県を習って知っているのかいろいろな県の答えが返ってきました。授業で都道府県の勉強もするのだと驚きました。それから、「型抜き」をしました。みんな真剣になってやってくれていて、中にはきれいにカタドることができる子もいました。それから「縁日」をみんなに体験してもらいました。日本から持ってきた駄菓子も評判で良かったです。

夜はお昼に会った学生さんが大学で行われている農業祭りに連れて行ってもらいました。学生さんがいろんな場所を案内してくれ、買い物したり、しゃべったりしてすごく楽しい時間を過ごしました。それから、しゃぶしゃぶを食べに連れてくれるということで、レストランに行きました。日本と同じようなしゃぶしゃぶなのですがつけるソースが辛い物ばかりで、やはりどこかには辛い物が使われているのだと思いました。おしゃべりしながら学生さんと食事ができて良かったです。普通の旅行では体験できないようなことができて、案内してもらったりして、この感じがすごく良かったです。学生さんとすごく仲良くなれて、帰ってきた今でも連絡を取り合う仲になれて本当に良かったです。タイの人とつながりができることはなかなかないと思うし、しかも同じ年くらいの人たちとなればなおさらだと思います。

○4日目から5日目について

この日は朝から小学校を見学し、昼からインターナショナルに見学に行きました。小学校では先に私たちが授業を行いました。「折り紙」の授業をしました。子どもたちは真剣になって折り紙を折ってくれていてその姿を見ていると折り紙にしてよかったなと思いました。また、全員で作った千羽鶴を見せると感動してくれて本当にうれしかったです。頑張って作って良かったと思いました。



授業をした後、小学校全体を見学しました。日本の学校とは違い、各教科の専用の教室があり、そこで授業を受けるという形でした。日本では自分たちのクラスがあり、ほとんど同じ教室で授業を受けるが違うのだと思いました。教科専用の教室があると教材道具をすぐに使えたりして便利だと思いました。また、給食を食べるところはすごく広く規模の違いを感じました。

インターナショナルスクールを見学しました。体育の授業を見学しました。小人数だったのでそんなに多く子どもたちはいなかったのですが、その子供たちは結構活発で動き回り、よくしゃべりと授業するのはすごく大変だなと思いました。設備が整っていないところもあり、授業を作るのも大変なこともあるようでした。

そして、授業の後「あやとり」をみんなでしました。「あやとり」を人に教えるのはすごく難しく、苦戦しましたが、できた子はすごく喜んでくれて良かったです。「あやとり」をしだすと、あんなに騒いでいた子どもたちが真剣になって指を使って、完成させようとしている姿を見て良かったと思いました。

○実習を通して

今回の実習を通して、たくさんの経験をし、刺激を受け、新しい出会いがあり、つながりができたことが一番良かったことだと思います。日本でいるだけではわからなかったタイの教育の現場の様子や子どもたちの様子を実際に見て、色々なことを感じ、学ぶことができました。今後の自分の将来のために必ず役に立つ経験ができました。行って本当に良かったです。

平成 29 年度 鳴門教育大学
グローバル教員養成プログラム 参加報告書

海外観察・交流実習（気づく実習）

鳴門教育大学 学校教育学部
小学校教育専修 図画工作科教育コース
学籍番号 16756056
氏 名 三笠 由季

1 出発前（打合せ・準備）

海外実習に参加する学生と先生方で何度も打合せをしました。特に、コンケン大学の日本語学科の学生さんとコンケン大学附属小学校の児童たちに行う日本文化の紹介の内容とについて話し合いました。今回は、日本語学科の学生さんには日本のお祭り。児童には「折り紙」と「あやとり」を紹介することにしました。みんなで、輪投げや射的、くじ引きの屋台を作ったり、折り紙の紹介のために千羽鶴を作ったりしました。他にも、タイから鳴門教育大学に來ている学生さんと交流して、タイ語のあいさつや、おすすめの観光スポット、お土産などを教えてもらいました。

2 コンケン大学

コンケン大学では、まず日本語学科の2年生の学生さんと食堂でご飯を食べました。そのあと、一緒に休憩時間を過ごして、大学のことや、普段の生活について話したり、みんなで踊ったりすることができてとても楽しかったです。

休憩時間の後は、日本語学科1年生の教室にお邪魔しました。3時間の交流時間のうち、1時間程度は日本語学科の先生の講義があり、その中で日本語学科の学生さんと仲良くなることができました。残りの2時間は、私たち鳴門教育大学の学生から日本文化の紹介をしました。スライドを使いながら日本のお祭りについて紹介し、全員で型ぬきを体験してから、輪投げ・射的・くじ引きのブースをそれぞれ回って屋台の遊びを体験してもらいました。学生さんが体験ブースをととても楽しんでくれていて、準備した甲斐があったと感ずることができました。

その日の夜は、お昼を一緒に過ごした日本語学科の学生さんと、コンケン大学内で行われていた農業祭に行きました。出店を見て歩いたり、ご飯を食べたりすることができ、コンケン大学の学生さんとさらに交流することができて、とても楽しかったです。

3 コンケン大学附属小学校

附属小学校では、1時間頂いて、子どもたちに折り紙を紹介しました。画用紙を使って前で折り方を説明しながら、一緒に鶴を折りました。子どもたちが真剣に、楽しんで取り組んでくれて、教え甲斐がありました。最後に千羽鶴をプレゼントすると、子どもたちはとても喜んでくれました。折り紙の紹介を終えてからは、小学校の施設や、さまざまな学年の授業の様子を見せてもらいました。三面壁のない開けた教室があったり、床に座って授業している教室があったりと、日本ではなかなか見られない光景が見られました。最後に、附属小学校の校長先生をはじめ、先生方と一緒に給食を食べました。タイの教育事情や、日本の学校との違い、よく似た部分など、お話をしていく中で多くの発見ができ、有意義な時間を過ごすことができました。



日本語学科の学生と



日本語学科の学生と縁日で交流



日本語学科の学生との夕食会



附属小学校の先生方と



附属小学校の児童と折り紙で交流



インターナショナルスクールにて

平成 29 年度 鳴門教育大学
グローバル教員養成プログラム 参加報告書

海外観察・交流実習（気づく実習）

鳴門教育大学 学校教育学部
中学校教育専修 保健体育科教育コース
学籍番号 16757020
氏 名 後 博子

1 本研修の目的

タイのコンケン大学の学生との交流を通して、日本の文化や習慣を共有しあい、コンケン大学の学生の案内でタイの食文化や習慣に触れること。またコンケン大学においては、日本語専攻の学生の授業を観察し、一緒に活動することで、日本語教育の現状を把握すること。

2 本研修での成果

(1) 日本語学生との交流

コンケン大学の日本語専攻の学生と授業内で活動をしました。はじめは授業観察をし、タイの学生らが「つ」と「す」の発音の違いについて学んだり、日本語の言葉を通じてそれらの発音のコツを学んだりしている様子を見ました。授業の中盤では私たちが前に出て日本で準備してきた「日本の祭り」についての紹介を行いました。とくに盛り上がったのは「北海道の札幌雪まつり」です。タイでは雪が降ることがないため、スライドで写真を見せた瞬間、歓声が起こったのを覚えています。タイの学生に「日本のどこに行きたいか」を質問したところ、ほとんどの学生が「北海道」と答えたことから雪への関心があることがわかります。

時間が少ない中、実際にお祭りで盛り上がる縁日を模した活動をしました。射的、輪投げ、くじ引きの三つを日本から準備していき、景品に日本の駄菓子をを用意しました。いくら言葉が通じなくても、縁日の楽しさは授業時間を忘れてしまうほどの盛り上がりを見せました。



(2) タイの文化～仏教の信仰～

日本でも仏教信仰者が多いですが、タイのお寺は日本にある趣と情緒のあるお寺とは違った、金色を主調とした神々しいお寺でした。

お坊さんがお祈りに来た参拝者にお水をかけて清めたり、床に顔が付くぐらい低い姿勢でのお祈りをしていたりと日本では見かけない習慣が見られました。実習に行く前から「タイは日本と違ってお坊さんにより敬意を払わなければいけない」と聞かされていました。実際行ってみてお坊さんに直接敬意を払う場面はなかったですが、日本における仏教の信仰深さとタイにおける信仰深さには大きく違いがあると感じました。



(3) タイの交通事情

タイのバンコクに着いて、はじめに見て驚いたのは、ノーヘルメットでバイクに乗っていたことでした。日本ではありえない光景ですが、タイではヘルメットの義務化がされていないようです。なので、コンケン大学の学生たちもヘルメットを着用することなく、学内を走行していました。またバイクに2人乗るのはまだしも、公共の道路においては3人や4人で乗っている光景を目にしました。明確な車線もなく、信号機も少ないので、お互いの配慮で車線変更や右左折を行っている状況でした。日本だと信号機や車線があっても事故が絶えないにもかかわらず、タイ国内に滞在中に事故を目撃することはありませんでした。

日本車がほとんどを占めており、ホンダや日産、トヨタなどの日本車がタイの街を埋め尽くしていました。

日本にはないトゥクトゥクにも乗りました。最大4人まで乗れて、目的地まで一人当たり17バーツ（約70円）で乗れるということもあり、とても魅力的でした。窓がないので夜風に当たりながらコンケンの町並みを堪能することができ、とても貴重な経験になりました。

平成 29 年度 鳴門教育大学
グローバル教員養成プログラム 参加報告書

海外観察・交流実習（気づく実習）

鳴門教育大学 学校教育学部
中学校教育専修 家庭科教育コース
学籍番号 16759038
氏 名 戸石 遥香

1 タイに行くまでの活動について

教師として働くためには、日本にとどまるのではなく、世界のことも知っておきたいという考えから、タイでの海外実習に参加を決めました。

タイに行くまでの活動としては、何度かミーティングを重ねて、海外実習で何をしたいか、昨年の先輩方を参考に自分たちで考えて実習内容を決めました。コンケン大学の日本語学科の学生がまだ知らないような日本文化を紹介したいと思い、最初は2月という季節にちなんで、タイの学生と一緒に恵方巻きを作ろうと考えていました。しかし、実はタイにも巻き寿司が知られており、現地で材料の調達ができるのかななどの問題から、実習内容を変更することになりました。自分が思っていたより日本の文化はタイに知られているのだと驚きました。

話し合いの結果、コンケン大学の学生には日本の縁日やお祭りの屋台について紹介し、コンケン大学附属小学生には折り紙と、時間があればあやとりを紹介することになりました。教材作りや、景品のお菓子を準備するとき、自分も知らなかった日本の文化について詳しく知ることができて、勉強になりました。例えば、沖縄全島エイサー祭りは、お盆の終わりにご先祖様が帰られるのをお見送りするお祭りであることなど、日本のいろいろなお祭りについてその開催される意味を知ることができました。また、小さい頃は外遊びやお絵かきをして遊んでいたのが、「あやとり」に触れることが少なかったのが、いい経験になりました。

また、「言葉 DE ともだちプログラム」で、鳴門教育大学に留学している3人のタイ人学生と交流し、タイの言葉や生活、ルールやマナーについて聞くことができました。友達になることができて、休憩時間にしゃべったり連絡を取り合ったりする仲になれたのでとても嬉しいです。

タイでの宿泊先や、実習のスケジュール、保険等に関しては、先生方や教務課の方々、国際交流係の方々、コンケン大学の高橋先生をはじめとする先生方にお世話になりました。たくさんの方々を支えられてこの実習は成り立っていて、感謝の気持ちでいっぱいです。

2 タイに行って学んだこと

初めての海外で、日本と違うことが多く、とても新鮮でした。日本語は通じず、ホテルのチェックインでさえ大変でした。英語で話すことができれば通じると思われる場面もあり、英語を学ぶことの必要性を感じました。飲料水に細心の注意をし、蚊に刺されないよう虫除けスプレーを使用するなど、衛生面は特に気をつけました。これも日本ではできない体験だったと思います。

コンケン大学を訪問し、学生と一緒に昼食をとり、交流しました。日本にはない食文化で、ほとんどの料理が辛く、驚きました。休憩時間は一緒に日本のアーティストのダンスを踊ったり、夜は大学内で行われていた農業祭りに連れて行ってもらったりしました。日本語学科の学生は日本語がとても上手で、たくさん日本やタイについてお話することができ、楽しかったです。

日本文化の縁日については日本語学科の1年生に、折り紙は附属小学生に、「あやとり」はインターナショナルスクールの小学1年生に紹介しました。日本語学科の1年生は、日本語の学習を始めてから日が浅く、想定していたより日本語がわからないということで、できるだけ簡単な言葉を使い、要点を絞って説明するよう工夫しましたが、難しかったです。同じように、インターナショナルスクールの子どもたちにも、「あやとり」の説明が難しく、教え方をもっとわかりやすくするために、動画などの教材の準備が必要であると感じました。屋台や折り紙は学生や児童が楽しく取り組んでくれて、日本の文化に親しんでくれたと思います。とても達成感があり、充実した内容で、むしろ時間が足りないと感じました。教材をプレゼントすることができたので、交流時間が足りなかった分、教材で遊んでもらえたらいいなと思います。

折り紙した後は、附属小学校の中を見させていただきました。タイでは教科によって教室が分かれていたり、いすに座って机に向かって学習することもあれば、床に座って学習することもあり、日本にはない光景だと驚きました。



今回の実習を通して、タイの学生や子どもたちが日本の文化に親しんでくれたように、私たちもタイの文化に親しむことができたと思います。貴重な体験がすることができ、外国の文化・教育現場や、教えることの難しさを学ぶことができました。この経験を、これからの自分に生かしていきたいと考えています。



平成29年度 鳴門教育大学
グローバル教員養成プログラム報告書

発 行 平成30年3月31日

編集・発行 鳴門教育大学
〒772-8502

徳島県鳴門市鳴門町高島字中島 748

印 刷 (協)徳島印刷センター

